孟子講學會本

全

序

高橋辰五郎君ハ斯學ニ熱心ナルモノナリ嘗テ緒方正清氏ト産科學ノ纂著ヲ共ニシ今又此著アリ余執テ之レヲ閲スルニ頗ル實際ニ適シ理義明白章句瞭然タリ余ハ斯道進歩ノ爲メニ此ノ如キ書ノ發行多カランヿヲ希望スルモノナリ君序ヲ余ニ乞フ乃チ贈ルニ此言ヲ以テス

明治三十年十二月

醫學博士　濵田玄達

序

在北越ノ學友高橋辰五郎君、産科婦人科ヲ以テ其專門トシ、兼テ力ヲ助産婦ノ養成ニ盡セリ、頃者一書ヲ著シ、以テ助産婦學海ノ津筏タラシメントス、此書則チ是ナリ、

本書題シテ産婆學講本ト云フ、抑モ君亦助産婦ナル新稱呼ヲ採用セントスルノ贊成者タリ、然モ尚ホ此書ニ於テ産婆ナル舊名ヲ襲用セル、蓋シ周圍ノ事情未タ容易ニ革ムル能ハサル所ノアルニ因ルト云フ、

其題名ハ暫ク措テ論セス、其内容ニ至リテハ、君カ概博ノ學識ニ基ツキ、君カ流暢ノ文辭ヲ以テス、次序章節秩然トシテ法アリ則アリ、毎項必ラス先ツ本旨ヲ揭テ、挿圖ノ意匠亦頗ル斬新、最モ閲覽記臆ニ便ナリ、殊ニ内診ノ防腐法ヲ細説セルカ如キ、産床ノ搆

造方ヲ詳述セルカ如キ、其他助産婦須要ノ器械ヲ創作撰定シ、又ハ助産婦ノ社會及ヒ法律規則トノ關係ヲ論述スルカ如キ、若クハ石炭酸水ノ調製法、及ヒ撿温器度目ノ改算法ヲ示セルカ如キ、皆ナ悉ク我國現時ノ狀況ニ適切ナラサルナシ、誰カ亦此書ヲ讀ミテ、産婆トハ啻ニ古來因習ノ稱呼ニシテ、其語ノ穩當ナラサル者タルヲ理解セサルモノアランヤ、

蓋シ吾人ハ夙ニ助産婦ヲ改良進歩セシメ、以テ其地位ヲ高クシ、世人ヲシテ當然ノ尊敬ヲ致サシメンヿヲ希望シ、且ツ劃策シツヽアリ、故ヲ以テ予ハ此類ノ著書ノ陸續世ニ出テンヿヲ望ミ、又特ニ其助産婦社會ニ歡迎セラルヘキヲ信スルナリ、聊カ一言ヲ述ヘ以テ序トナス、

明治三十年十二月　　ドクトル　緒方正清誌

序

産婆ナル者ハ世人高尚ノ職務ニシテ其地位醫師ト相ヒ距ルヿ甚タ近シ蓋シ娩産ナルモノハ婦人一世ノ難事ニシテ而シテ人ノ子タルモノ又必ス之レヲ經過セサル可ラサル所ノ難關ナリ此險難ノ場合ニ當リ善ク補翼ノ務ヲ盡クシ母兒兩體ヲシテ平易安穩ノ樂ヲ完カラシムルモノハ即チ産婆ニ外ナラザルナリ臨産ノ婦人頻リニ苦痛ヲ訴エ煩悶シテ救治ヲ人ニ求ム傍人周章シテ擧措所ヲ失ヒ顏色蒼茫タリ此際ニ當リ能ク其體狀ヲ視娩産ノ機轉ヲ察シ其一モ疾病異常ノ存セサルヲ觀テハ則チ靜然トシテ産婦傍人ヲ安慰シ肅然トシテ保護避患ノ務ヲ盡シ母體ト小兒トヲシテ安易ニ娩産ノ難關ヲ通過セシメ回生ノ思アラシムルモノハ即チ是レ産婆ニアラズヤ若シ夫レ妊産婦ト傍

人ト一モ知ル所ナク晏然トシテ其險難ヲ夢思セザルニ當リ産婆一タヒ其體狀ヲ撿シ胎位異常ノ如キ若クハ産道ノ障碍ノ如キアルヲ知ラバ則チ晴天ノ霹靂ノ如ク或ハ之レニ嚴格ノ攝生ヲ命シ或ハ分秒ヲ空フセズシテ適正ノ醫治ヲ求メシム若シ夫レ或ハ之レニ反シ産婆不明ニシテ其異常ト障碍トヲ審カニセズ若クハ怠慢ニシテ其必要ノ處置ヲ忽ニスルアラバ其結果ハ直チニ人ノ生命ニ關ス之レヲ譬フルニ我日本國一ヶ年間ノ生産數凡ソ百二十四万六千四百二十七人(明治二十八年)母兒兩體ヲ合スレバ二百四十九万二千八百五十四人悉ク産婆ノ補助ヲ要ス其間ノ生死禍福産婆ノ關スル所果シテ幾何ゾ産婆ノ責豈ニ輕シトス可ンヤ是レ余輩カ世人ノ未タ思ハサルニ先ダチ産婆ノ職務ヲ以テ尊トナシ其地位ヲ高トナシ其進歩ト改良トニ役々タル所以ナリ

産婆ヲ改良シ進歩セシメント欲セバ必ス先ヅ其教育ヲ完全ナラシメサル可ラズ飜テ我國ノ産婆社會ヲ觀察スルニ其最大多數ハ即チ事理ニ通セズ必要ノ學術ヲ知ラズ蠢々然トシテ尙ホ野蠻ノ遺法ヲ守ル其弊實ニ慨嘆ニ耐エザルナリ吾人ハ産婆教育ノ一日モ忽カセニス可ラザルヲ信ズ

産婆ノ教育ヲ完全ナラシメンニハ産科院ヲ有スル善良ノ産婆教育所ヲ有セザル可ラズ哀哉我國ニ於テハ未タ一モ完全ナル産婆教育所アルヲ見ズ醫科大學内ニ於ケルモノト雖モ其産婦入院ノ數ニ於テハ未タ大ニ慊焉タルヲ免レズ、アールフェルド氏Ahlfeld ニヨレバ一縣下ニハ必ス一ノ産婆教育所ヲ設ケ其教育材料ヲ充分ナラシメ以テ全縣ノ産婆ヲ生ト就職セル産婆ノ補

習ニ供セサル可ラズトナシ加之教育所ト産婆業トハ縣ノ管轄ヲ脱シ一省ニ直隷セシム可シト云フ

又ポーテン氏 Poten ハ産婆教育所ヲシテ大ナラシメ其分娩數一ケ年二百ヲ以テ最少數トス可シトナセリ否ラザレバ實地上ニ於テ産婆ノ自ラ診斷スルヲ要スル所ノ病的分娩即チ横位前置胎盤子癇狹窄骨盤等ヲ教示スルノ機會少ナク爲ニ之ヲ實驗セシムルノ困難ヲ免レズトナセリ、ヂエトリヒ氏 Dietrich ハ更ニ此等ノ主旨ヲ布演シテ曰ク小ナル教育所ノ新卒業産婆ニ就キ其診斷ノ不確實ナルヲ見ルハ屢經驗スル所ナリ蓋シ確實ナル診斷ハ産婆ノ實地上緊要ナルニ係ラズ産婆ハ實地開業ニ就キ始メテ其習練ヲナスニ至リテハ即チ産婆教育所ハ其目的ヲ失セルモノナリ此故ニ大ナル縣立産婆教育所ハ妊婦ニ就キ保護賞

金ヲ以テ豊富ノ材料ヲ集ム可シ即チ産婦ハ之レヲ給費トナシ看護及ビ治療ヲ加ヘ退院ノ際更ニ補助金ヲ與ヘ奬勵ヲ加フルヲ要スト而シテ其教育所長ハ專任トナシ四千乃至六千馬克ノ年俸ト官舍トヲ給シ次長ハ年俸二千馬克ニシテ校舍ノ附近ニ開業ヲ許シ第三醫員ニハ一千馬克ヲ給シ助手トナシ且ツ市内ノ分娩ニ就キ女學生ヲ監督セシム可シトナセリ

以上說ク所ニヨリ以テ産婆教育所ニ要スル組織ノ大要ヲ覗フ可シ我國ニ於テハ遽カニ此ノ如ク完全ナル教育所ヲ設立シ能ハサル可シト雖モ亦各地方競テ産婆教育所ヲ起シ目下ノ流弊ヲ救濟スルハ極メテ緊要ナルヲ知ラザル可ラズ

産婆ハ啻ニ産婆術ニ習熟スルノミナラズ必ズ普通ノ學力ヲ備ヘンヿヲ要ス即チ普通ノ文書ヲ讀ミ理學化學解剖學生理學ノ

大要ヲ知ラザル可ラズ彼ノ歐洲ノ産婆會ニ於テ講師ハ頻リニ生理解剖ノ要項ヲ演述ス吾人モ亦其必要ヲ感ズ産婆ノ實際上ニ要スル所アルヤ知ル可キノミ産婆ハ石炭酸ノ性質硼酸ノ金屬ニ觸ル可ラザル理由若クハ昇汞ノ性狀ノ如キハ之レヲ知ラズンバアラズ、イルリガートル水壓ノ理由子宮内ニ高壓ノ灌注ヲ用ユ可ラザル所以檢温器度目ノ換算法ノ如キ大ニ産婆ニ要アリ理學及ビ化學ノ要旨ヲ學習セサル可ラサル「甚ダ明カナラズヤ或ハ普通ノ文書ヲ讀ミ學者間ニ行ハル、言語ノ大體ヲ識ル「ヲ要スルカ如キハ固ヨリ論ナシ故ニ余輩ハ此産婆學講本ヲ著ハスニ當リ枉テ俗言平話ヲ用ユルヲ務メズ其必要アルニ當リテハ高尚ナル術語モ亦避ケザル所アリ從テ文字ノ傍訓ノ如キモ亦敢テ之レヲ施コサズ余輩ノ信スル所ヲ以テスレバ

産婆ハ少ナクモ此ノ如クノ記述ヲ理會スルノ腦力ヲ有スルニアラザレバ貴重ノ人命ニ關渉シテ娩産ノ處置ヲ行フニ適セズ譬ヘバ余輩ハ此ノ如キノ産婆ニ向テ予ガ家族ノ娩産ヲ處置セシムルヲ欲セザルナリ既ニ此ノ如ク産婆教育ヲ高尚ナラシムルノ必要アラバ其教育ノ年限ヲ長クシ凡ソ二ケ年トナラシメサル可ラズ其習學期ヲ六七ケ月トナシ甚ダシキハ三四ケ月ニ止ムルガ如キハ余輩大ニ其不可ナルヲ見ルナリ

子宮内ノ手術即チ内回轉術及ビ胎盤剝離法ノ如キハ一定ノ場合ヲ限リ之ヲ産婆ニ行ハシム可キヤ否ヤハ産婆學上極メテ重要ノ問題ナリ醫學ノ進歩、世界ニ冠タルノ獨乙國ニ於テモ其議論大ニ紛擾ヲ極メ或ハ之レヲ行ハシム可シトナシ或ハ之レヲ許ス可ラズトナシ其說未ダ一定セズ之レヲ要スルニ産婆ヲシ

テ子宮內ノ手術ヲ行ハシムル可ラズトナスハ第一、防腐法ヲ完全ニ行ヒ得サルヿ第二、施術ノ範圍ヲ越ヘ之レヲ濫用スルノ憂アルヿ第三、醫師ノ配置ヲ良好ニシ交通ヲ便利ナラシムルキハ產婆ニ危險ノ手術ヲ行ハシムルノ必要ナキヿ、以上三個ノ理由ニ基ケルモノナリ之レニ反シ子宮內ノ手術ヲ產婆ニ許ス可シトナスハ實際ノ狀況ニ鑑ミタルモノニシテ第一、時トシテ醫治ヲ求ムルヿ能ハザルカ又ハ醫師ノ到ルヿ甚グシク遲延ス可ク其間自然ニ委スルキハ產婦ヲシテ言フ可ラザルノ危險ニ陷ラシム可キヿ第二、防腐法不完全ナルノ危險ハ現在ノ危險ヲ坐視スルヨリモ其害少ナク且ツ防腐法ノ不完全ト施術ノ濫用トハ產婆ノ敎育方ニヨリテ大ニ其弊ヲ改ムルヲ得可キニ根據セルモノトス我國ノ如キニ在リテハ以上ノ二說中何レヲ以テ適當ト

ナス可キカハ頗ル重難ノ問題ナリト雖モ著者ノ所見ヲ以テスレバ現今醫師社會ノ不完全ナルニ當リテハ一定ノ範圍內ニ於テ產婆ニ施術ヲ認許スルノ方針ヲ以テ敎育ヲ施コスノ緊要ナルヲ信ス何トナレバ方今我國醫師社會ノ現狀ハ甚ダ慘怛タルモノニシテ分娩ノ作用ヲ解知シ防腐法ノ要項ニ通曉スルノ醫師ハ其數甚ダ少ナク近世醫學ノ敎育ヲ受ケタルモノハ未ダ十ノ一ニ當ラズ是スラ我國產科院制度ノ存立セザルガ爲メニ產科學上ノ敎育ハ大ニ不完全ヲ極ムルヿ以テ日本全國ヲ通シ產科ノ智識ヲ有スルノ醫師最モ少ナク一郡一縣ニ就テ之レヲ求ムルモ僅カニ指ヲ屈ス可ク產床ニ臨ミ完全ノ防腐法ヲ適用シ傳染症ノ豫防ヲ確實ニ保證シ得ルノ醫師ニ至リテハ實際果テ幾何人カアル一般ノ醫師特ニ彼ノ從來免許ヲ有スル最大

多數ノ老開業醫ノ如キハ分娩ノ處置法ニ就キ其智識ト技術トニ於テ夐カニ敎育アル新産婆ノ下ニ在ルヲ信ズ既往現今及ビ將來尙ホ數十年ノ間社會ハ既ニ此等ノ醫師ニ産科手術ノ全權ヲ握ラシム果シテ然ラバ今後幾年間其必要ノ盡クルニ至ルマデ敎育アル産婆ヲシテ危急ノ際一定ノ産科手術ヲ行ハシムルハ最モ適當ニシテ且ツ最モ必要ナルヲ信ゼスンバアラズ故ニ余輩ハ嚴ニ其施術ノ適應症ヲ定メ之レヲ本書中ニ收ム但シ内回轉術ハ之レヲ卷末ノ附錄トナセリ若シ夫レ産婆生徒ヲシテ學バシムルヿヲ欲セザルモノハ宜シク之レヲ欠如ス可シ

産婆用器具ニ就キ携帶用器具ナルモノハ可及的總テノ必要品ヲ收メ之レヲ開展スレバ殆ト産科院内分娩室ノ器品ヲ辨スルニ足ルモノナラサル可ラズ若シ夫レ然ラズシテ分娩ニ際シ産

家ニ就キ個々其器具ヲ求メ其供給ヲ俟ツガ如キハ甚ダ不可ナリ若シ幸ニシテ其用ヲ辨スルヲ得ルトナスモ妄リニ時間ヲ費ヤシ分秒ノ危機ヲ誤マリ清潔消毒上ノ注意ヲ失ヒ爲メニ重患險症ヲ發セシムルノ虞ナクンバアラズ加之其器具ヲ求メテ之レヲ得サルノ場合ニ至リテハ殆ト産婆ノ術ヲ施コスヿ能ハサラントス其不幸擧テ言フ可ラサルナリ此故ニ予輩ハ頗ル意ヲ玆ニ致シ諸多ノ物品ヲ産婆携帶用器具中ニ收メ之レヲ各種ノ場合ニ試ミ敢テ甚ダ其不備ヲ感セサルニ至レリ乃チ其器具ノ解說ヲ卷末附錄第二百九章ニ說述セリ尙ホ大方ノ是正ヲ得バ幸甚ノ至リニ堪エズ

産婆ナル名稱ハ現時ニ於テ之レヲ考フルニ決シテ適當ナルモノニハアラサルナリ抑モ婆ナル名稱ハ世人之レヲ卑賤ナル老

婦ノ義トナス故ニ産婆ノ名ヲ聞クモノハ崇敬ノ念ヲ失ハズンバアラズ産婆ノ高尚ニシテ尊敬ス可キ業務タルヿ再ビ説クヲ要セズ而メ當代ノ産婆豈卑賤ノ老婦ナランヤ産婆ナル名稱ノ不適當ニシテ其實ニ害アルヿ此ノ如シ故ニ予ハ曾テ學友ドクトル緒方正清君ト之レガ教育ヲ共ニセルニ當リ相謀リテ産婆ノ名稱ヲ改メ助産婦トナシ同君ノ教育所ヲ改稱シテ助産婦教育所トナセリ吾人ハ之レヲ以テ時弊ヲ濟フノ要件タルヲ信ズ爾來余ハ北越ニ在リテ産婆ヲ教育シ今又此書ヲ著ハス助産婦ノ名ヲ用ヰ助産婦學ト名命センヿヲ欲スルヤ切ナリ然リト雖ヒ顧ミテ周圍ノ狀況ヲ察シ更ニ日本社會ノ全體ヲ通觀スルニ世人ハ概シテ産婆ノ何物タルヲ解セズ其名稱ノ適否ハ未ダ問フ所ニアラザルヲ知ル故ニ暫ク舊名ヲ改メス主トシテ産婆ノ高尚ナル業務タルヿヲ稱道シ其改良進歩ヲ謀リ以テ徐々ニ其名稱ノ不適ナルヲ改メント欲スルナリ

余輩ガ産婆ニ對シ懷抱スル所ノ意見ハ概チ右ニ述ブルガ如シ余今此産婆學講本ヲ著ハスニ當リ此懷抱スル所ヲ以テ大ニ我國ノ産婆社會ニ行ハレンヿヲ望マズンバアラズ此ノ如クニシテ産婆ノ地位ヲ高尚ナラシメ其學術ノ進歩ヲ致シ以テ世人ノ幸福ヲ完カラシメンヿヲ期ス乃チ此言ヲ記シテ産婆學講本ノ序トナス

明治三十年十二月十日

著者　高橋辰五郎

産婆學講本凡例

一、著者ハ大ニ産婆改良ノ意見ヲ懷ク本書ヲ著述スルノ意モ亦多ク此ニ存ス其所見ノ大要ハ論シテ著者ノ序言中ニ在リ故ニ本書ヲ繙クモノハ必ズ序言ヲ一讀アランコトヲ希望ス但シ著者ノ意見ハ此ニ盡キタルモノニアラズ著者ハ他日大ニ論スル所アランコトヲ期スルモノナリ

二、既ニ略ホ序言中ニ述フルカ如ク産婆ハ其思想必ス精緻ナル可ク從テ普通ノ文書ハ必ス之レヲ通讀シ得可キモノナルガ故ニ本書ニ於テハ敢テ枉テ俗言平言ヲ用ユルコトヲナサズ但シ現今一般ノ産婆及ヒ産婆生徒ハ尚ホ普通ノ學力ニ乏シキモノ多カル可キヲ以テ一時ノ要ニ應センガ爲メ別卷ニ附錄トシテ備忘錄ヲ添附セリ此備忘錄ヲ繙カバ多クハ通讀シ得サルモノナカル可シ

三、篇中%ト記セルハ「プロセント」ノ符ニシテ%トハ百分ニ就キ幾何トノ意ナリ故ニ一%ハ百分中ニ一(即チ百倍)五%ハ百分中ニ五(即チ二十倍)ヲ含ムヲ示スモノナリ

四、篇中「瓦」ト記セルハ量目ノ瓦(グラム)蘭謨ヲ略セルモノニシテ一瓦蘭謨トハ我國ノ二分

六厘六毛七絲ニ當リ四瓦蘭謨ハ一匁〇七厘七毛餘即チ大凡一匁ニ相當セリ故ニ

一〇〇〇〇〇〇即チ一万瓦ハ　大凡ソ二貫五百匁

一〇〇〇〇〇即チ一千瓦ハ　大凡ソ二百五十匁

一〇〇〇〇即チ一百瓦ハ　大凡ソ二十五匁

一〇〇〇即チ十瓦ハ　大凡ソ二匁五分

ト概定セリ

五、篇中一〇〇〇ト記セルハ一瓦蘭謨一〇〇〇〇〇〇ト記セルハ十瓦蘭謨一〇〇〇〇〇〇ト記セルハ一千瓦蘭謨ナリ又升量ナルトキハ

二〇〇〇〇即チ二百瓦　大凡ソ一合

五〇〇〇即チ五百瓦　大凡ソ二合五勺

一〇〇〇〇即チ一千瓦　大凡ソ五合

二〇〇〇〇即チ二千瓦　大凡ソ一升

一〇〇〇〇〇即チ一万瓦　大凡ソ五升

ナリトス

六、篇中「迷」又ハ「迷的兒」ト記セルハ「メーテル」ノ符ニシテ「メーテル」ハ日本ノ大凡三尺三寸ニ當レリ「仙迷」又ハ「仙迷的兒」ト記セルハ「センチメーテル」ノ符ニシテ大凡ソ我國ノ三分三厘ニ當リ一迷ハ百仙迷ナリ故ニ

一仙迷　凡ソ三分三厘

十仙迷　凡ソ三寸三分

百仙迷即チ一迷　凡ソ三尺三寸

七、篇中ニ附錄四章(第九十七章、第二百八章、第三百九章及ビ第二百十章)ヲ附ス必ズシモ之レヲ講習スルヲ要セザレドモ篤志ナルモノハ之レヲ一讀シテ可ナリ幾何カ裨益スル所アル可シ

八、參考用トシテ茲ニレオポルド、ツワイフェル氏ノ分娩成績表一表ヲヲ錄ス各產婆自ラ此表ヲ調製シ其處置セル分娩ノ事項ヲ毎回之レニ記入セハ自己ノ業務ニ便スル所大ナル可シ又各自ノ意見ニヨリ表中ノ項目ヲ便宜ニ改竄スルハ固ヨリ禁セザル所ナリ

分娩成績一覽表

某所産婆某所持

1.	號番				
2.	産婦ノ住所職業姓名				
3.	産婦ノ年齢健康第何回ノ娩公生分私生又ハ				
4.	陣痛ノ初發時ノ産婆ノ到家レ及ビ日時間				
5.	小産ニ出ヒシ胎盤ノ日時及ビ間				
6.	胎兒ノ胎位分娩時				
7.	小兒ノ男女				
8.	小兒ノ生存者ハ娩ク時ハ分ノ死亡娩又前ハ				
9.	小兒ノ成熟者ハ成ク未熟ハ				
10.	分娩ニ際シテハ醫師ヲ招ヤ否ヤ				
11.	何ノ故ニ醫師ヲ迎ヘシカ且ツ何時醫師ヲ招ヤシマシタ人工分娩ヲ施シタカ				
12.	産婦ニ病疾ヲ發シタ原因及ビ其ノ程度				
13.	産婦ノ死亡セシ時ヤ其ノ日				
14.	小兒ニ母乳ヲ與ヘシ時及ビ其ノ持續				
15.	小兒ニ人工營養ヲ與ヘシ時及ビ其ノ品目				
16.	小兒ニ悲鳴ヲ發シタルヤ				
17.	小兒ハ死亡シタ時及ビ其ノ日				
18.	醫師ニ關スル特別事項				

產婆學講本目次

序論

第一章　產婆及ヒ產婆學　一頁

第二章　產婆ノ本務　二頁

第一篇　人體畧論

第三章　人體ノ構成　九頁

第四章　人體外部各部分ノ區別　九頁

第五章　頭部　十六頁

第六章　軀幹　十六頁

第七章　四肢　十八頁

第八章　婦人ニ固有ナル體格　二十七頁

第九章　骨盤　二十八頁

第十章　大骨盤及ヒ小骨盤　二十九頁　三十三頁

第十一章　婦人生殖器ノ論　三十九頁
第十二章　乳房　四十二頁
第十三章　外陰部　四十四頁
第十四章　腟　四十五頁
第十五章　子宮　四十七頁
第十六章　喇叭管卵巣及ヒ附屬諸靱帶　五十一頁
第十七章　腹膜　五十二頁
第十八章　膀胱及ヒ直腸　五十五頁

第二篇　正規ノ妊娠及ヒ其取扱法

第十九章　誘導篇　五十五頁
第二十章　妊娠　五十五頁
第二十一章　受胎セル卵ノ變化　五十五頁
第二十二章　成熟卵　五十五頁
第二十三章　胎兒各月ノ徵候　五十六頁

第二十四章　成熟胎兒　六十八頁
第二十五章　成熟胎兒ノ頭蓋　六十九頁
第二十六章　胎兒ノ子宮內ニ於ケル狀態　七十二頁
第二十七章　胎兒ノ生理　七十五頁
第二十八章　妊婦ノ生殖器系ニ現ハルヽ變狀　七十六頁
第二十九章　妊婦ノ自餘ノ身體ニ現ハルヽ變狀　七十八頁
第三十章　分娩時算定法　八十頁
第三十一章　妊娠ノ徵候　八十二頁
第三十二章　妊娠每月ノ徵候　八十三頁
第三十三章　妊婦ノ檢查　八十七頁
第三十四章　外檢查法　八十八頁
第三十五章　內檢查法　九十三頁
第三十六章　双合檢查法　九十七頁
第三十七章　消毒法ノ說　九十八頁

第三十八章　骨盤徑線ノ檢査　百一頁
第三十九章　初産及ヒ經産ノ鑑別　百二頁
第四十章　胎兒ノ位置生死及ヒ兩性ノ檢定　百五頁
第四十一章　双胎ノ檢査　百七頁
第四十二章　産婦ノ攝生法　百八頁

第三篇　正規分娩及ヒ其取扱法　百十三頁

第四十三章　誘導編　百十三頁
第四十四章　分娩及ヒ其區別　百十三頁
第四十五章　産道　百十四頁
第四十六章　産出力　百十六頁
第四十七章　胎兒ノ位置即チ胎位　百十七頁
第四十八章　頭蓋位正規分娩ノ狀況　百二十一頁
第四十九章　第一期開口期　百二十二頁
第五十章　第二期産出期　百二十六頁

第五十一章　第三期後産期　百二十八頁
第五十二章　分娩ノ持續　百三十頁
第五十三章　正規分娩ノ器械的作用　百三十一頁
第五十四章　第一頭蓋位ノ內外檢査並ニ分娩ノ器械的作用　百三十四頁
第五十五章　第二頭蓋位ノ內外檢査並ニ分娩ノ器械的作用　百三十七頁
第五十六章　頭蓋位ノ內外檢査並ニ分娩器械的作用ノ一覽表　百三十九頁
第五十七章　第三及第四頭蓋位(前顱頂位又ハ前頭位)　百四十一頁
第五十八章　分娩時ニ現ハル、母體及ビ兒體ノ變狀　百四十二頁
第五十九章　金規十則(分娩ノ處置ニ就キ)　百四十四頁(乙)
第六十章　正規分娩處置ノ概要　百四十五頁
第六十一章　産婆携帶用器具並ニ衣服　百四十七頁
第六十二章　防腐法　百五十頁

第六十二章　臨產婦ノ檢查法　百五十頁
第六十三章　開口期及ヒ產出期ノ處置　百五十二頁
第六十四章　會陰防護法　百六十一頁
第六十五章　軀幹產出時ノ處置　百六十六頁
第六十六章　臍帶切離法　百六十八頁
第六十七章　後產期ノ處置　百六十九頁
第六十八章　新タニ分娩ヲ終レル產婦ノ處置　百七十二頁
第六十九章　正規ニアラザル分娩ノ論　百七十五頁
第七十章　第三及ヒ第四頭蓋位(前顱頂位若クハ前頭位)ノ分娩　百七十六頁
第七十一章　前顱頂骨位及ヒ後顱頂骨位ノ分娩　百七十八頁
第七十二章　頭蓋位深在橫位ノ分娩　百七十九頁
第七十三章　顏面位ノ分娩　百七十九頁
第七十四章　額位ノ分娩　百八十四頁

第七十五章　骨盤端位　百八十五頁
第七十六章　臀位ノ分娩　百八十六頁
第七十七章　第一臀位分娩ノ器械的作用　百八十七頁
第七十八章　第二臀位分娩ノ器械的作用　百八十八頁
第七十九章　臀位ノ異常ナル分娩　百八十九頁
第八十章　足位ノ分娩　百八十九頁
第八十一章　膝位ノ分娩　百九十頁
第八十二章　骨盤端位分娩ノ利害　百九十三頁
第八十三章　骨盤端位分娩ノ處置　百九十三頁
第八十四章　骨盤端位挽出法　百九十七頁
第八十五章　雙胎ノ分娩　二百四頁
第八十六章　雙胎分娩ノ處置　二百六頁
第八十七章　分娩中胎兒ノ生活及ヒ死亡ノ徵候　二百七頁
第八十八章　初生兒ノ徵候　二百九頁

第四篇　正規産褥及ビ其取扱法

第八十九章　誘導編　二百十頁
第九十章　産蓐　二百十頁
第九十一章　産蓐中生殖器ニ現ハルヽ狀況　二百十頁
第九十二章　蓐婦ノ全身ニ現ハルヽ變狀　二百十四頁
第九十三章　蓐婦ノ看護法　二百十六頁
第九十四章　初生兒ノ看護法　二百二十五頁
第九十五章　乳房ノ檢査　二百三十二頁
第九十六章　小兒人工營養法　二百三十三頁
第九十七章(附錄)　褥婦營養法　二百四十頁

第五篇　異常妊娠及ビ其取扱法

第九十八章　誘導編　二百五十一頁
第九十九章　妊娠性嘔吐　二百五十一頁
第百章　便秘　二百五十二頁

第百一章　尿利困難　二百五十三頁
第百二章　浮腫　二百五十三頁
第百三章　靜脈瘤　二百五十四頁
第百四章　白帶下　二百五十五頁
第百五章　妊娠中生殖器ノ出血　二百五十八頁
第百六章　子宮脫及腟脫　二百五十九頁
第百七章　妊娠子宮後屈症　二百六十頁
第百八章　妊娠子宮ノ前轉(懸垂腹)　二百六十三頁
第百九章　葡萄狀胎(胞胎又ハ胞狀鬼胎)　二百六十四頁
第百十章　羊膜水腫　二百六十六頁
第百十一章　羊水過少(羊膜糸)　二百六十七頁
第百十二章　妊娠中胎兒ノ死亡　二百六十七頁
第百十三章　流産(又ハ墮胎)早産ノ區別並ニ其原因　二百六十八頁
第百十四章　流産ノ症狀及ビ處置　二百六十九頁

第百十五章　第二期ノ流產並ニ早產ノ症狀及ビ處置　二百七十四頁
第百十六章　子宮外姙娠　二百七十四頁
第百十七章　誘導編　二百七十九頁
第百十八章　陣痛微弱　二百七十九頁
第百十九章　陣痛過劇　二百七十九頁
第百二十章　痙攣性陣痛　二百八十二頁
第百二十一章　子宮ノ位置異常　二百八十三頁
第百二十二章　子宮ノ形狀異常　二百八十四頁
第百二十三章　卵巢腫瘍　二百八十五頁
第百二十四章　子宮口狹窄及ビ閉塞　二百八十五頁
第百二十五章　腟及ビ外陰部ノ狹窄　二百八十六頁
第百二十六章　陰部ノ血腫　二百八十七頁
第百二十七章　腟脫及ビ陰唇ノ浮腫及ビ靜脈瘤　二百八十八頁

第六篇　異常分娩及ビ其取扱法

第百二十八章　直腸膀胱ノ充盈　二百八十九頁
第百二十九章　狹窄骨盤　二百九十頁
第百三十章　甚タシク傾斜セル骨盤　三百一頁
第百三十一章　過大ナル胎兒　三百二頁
第百三十二章　胎兒ノ畸形　三百六頁
第百三十三章　橫位　三百十二頁
第百三十四章　頭蓋位ニ於ケル上肢及ヒ下肢ノ脫出　三百十三頁
第百三十五章　臍帶脫及ビ臍帶先進　三百十五頁
第百三十六章　臍帶ノ異常　三百十七頁
第百三十七章　子宮破裂　三百十九頁
第百三十八章　子宮飜轉　三百二十頁
第百三十九章　子宮頸腟及ヒ外陰部ノ裂傷　三百二十三頁
第百四十章　會陰破裂　三百二十五頁
第百四十一章　骨盤關節ノ損傷

第百四十二章　分娩時ノ出血　三百二十五頁
第百四十三章　胎盤ノ早期剝離　三百二十六頁
第百四十四章　前置胎盤　三百二十八頁
第百四十五章　後產期ノ出血　三百三十四頁
第百四十六章　軟部產道ノ損傷ニヨル後產期ノ出血　三百三十五頁
第百四十七章　陣痛微弱ニ因スル後產期ノ出血　三百三十五頁
第百四十八章　急性貧血(血暈)　三百三十九頁
第百四十九章　胎盤產出ノ遲延　三百四十一頁
第百五十章　陣痛微弱ニシテ剝離セサルニヨレル胎盤產出ノ遲延　三百四十一頁
第百五十一章　胎盤ノ癒着ニ因スル胎盤產出ノ遲延　三百四十四頁
第百五十二章　子宮頸ノ痙攣ニ因スル胎盤產出ノ遲延　三百四十五頁
第百五十三章　子癇　三百四十六頁
第百五十四章　分娩中種々ノ合併症　三百四十九頁

第百五十五章　產婦ノ死亡　三百五十頁

第七篇　異常產褥及ヒ其取扱法

第百五十六章　誘導編　三百五十一頁
第百五十七章　後陣痛ノ過劇　三百五十一頁
第百五十八章　子宮ノ回復不全　三百五十二頁
第百五十九章　子宮ノ位置變常　三百五十二頁
第百六十章　惡露ノ障害　三百五十三頁
第百六十一章　外陰部及ヒ會陰部ノ腫脹　三百五十五頁
第百六十二章　便通ノ異常　三百五十五頁
第百六十三章　排尿ノ障害　三百五十六頁
第百六十四章　下肢靜脈ノ血塞　三百五十七頁
第百六十五章　乳房ノ疾患　三百五十八頁
第百六十六章　產褥性熱性病　三百六十二頁
第百六十七章　創傷熱　三百六十三頁

第百六十八章　產褥熱　三百六十四頁
第百六十九章　初生兒ノ疾患　三百六十六頁
第百七十章　初生兒ノ假死　三百六十六頁
第百七十一章　分娩時ニ生ゼル兒頭ノ變形　三百七十三頁
第百七十二章　臍部ノ疾患　三百七十四頁
第百七十三章　骨傷　三百七十六頁
第百七十四章　初生兒眼炎　三百七十六頁
第百七十五章　乳房ノ腫張及ヒ其炎症　三百七十八頁
第百七十六章　鼠蹊脫腸及ヒ陰囊水腫　三百七十九頁
第百七十七章　畸形　三百七十九頁
第百七十八章　口唇癌　三百八十頁
第百七十九章　消化ノ障害　三百八十一頁
第百八十章　吃逆　三百八十三頁
第百八十一章　痙攣　三百八十三頁

第百八十二章　初生兒黃疸　三百八十四頁
第百八十三章　丹毒　三百八十五頁
第百八十四章　糜爛　三百八十六頁
第百八十五章　糠粃疹　三百八十七頁
第百八十六章　汗疹　三百八十七頁
第百八十七章　溫疹　三百八十七頁
第百八十八章　水胞疹　三百八十八頁
第百八十九章　誘導編　三百八十九頁
第百九十章　卒倒　三百八十九頁
第百九十一章　外傷　三百九十頁
第百九十二章　火傷及ヒ湯傷　三百九十一頁
第百九十三章　凍傷　三百九十二頁
第百九十四章　溺死窒息若シハ頓死　三百九十三頁

第八篇　一般看護法大要

第百九十五章　腟内灌注法　三百九十三頁
第百九十六章　石炭酸水調製法　三百九十五頁
第百九十七章　灌腸法　三百九十六頁
第百九十八章　冷罨法及ヒ氷罨法　三百九十八頁
第百九十九章　温罨法及ヒ　プリエスニッツ氏罨法　三百九十九頁
第二百章　芥子泥　四百頁
第二百一章　乾角及ヒ血角　四百一頁
第二百二章　水蛭　四百一頁
第二百三章　検温器用法　四百一頁
第二百四章　體温ヲ検スル法　四百五頁
第二百五章　脈搏ノ検査　四百七頁
第二百六章　排泄物ノ論　四百八頁

附錄

第二百七章　内回轉術　四百十頁
第二百八章　内回轉術ノ術式　四百十一頁
第二百九章　産婆携帶用器具　四百十五頁
第二百十章　産婆ノ、社會及ヒ法律規則ニ關スル事項　四百二十七頁

挿圖目次

第一篇

第一圖　人體諸骨ノ圖　十一頁
第二圖　靴帶ノ圖　十二頁
第三圖　筋肉ノ圖　十三頁
第四圖　脈管系ノ假想圖　十四頁
第五圖　神經系ノ圖　十五頁
第六圖　頭蓋頂面（大人）ノ圖　十七頁
第七圖　頭蓋及ヒ顏面諸骨ノ圖　十八頁
第八圖　頭及ヒ軀幹ノ諸骨ヲ縱割シテ示セル圖　十九頁
第九圖　心臟及ヒ肺臟ノ圖　二十頁
第十圖　胸廓內ニ於ケル心臟肺臟及ヒ動靜脈ノ關係ヲ示ス圖　二十一頁
第十一圖　橫隔膜ノ縮張ニヨリ呼吸ヲ營マルヽノ畧圖　二十二頁
第十二圖　腹部前面各部分ノ圖　二十三頁
第十三圖　胸腔及ヒ腹腔內諸臟器連繫ノ畧圖　二十四頁
第十四圖　消化器系ヨリ營養分ノ血營系ニ進入スル道路ヲ示ス假想圖　二十五頁
第十五圖　骨盤ノ位置ヲ示ス圖並ニ一二ノ徑線ヲ附記ス　二十九頁
第十六圖　骨盤諸骨ヲ分離シテ示セル圖　三十頁
第十七圖　膄骨外面ノ圖　三十一頁

第十八圖　腟骨內面ノ圖　三十二頁
第十九圖　骨盤入口ノ形狀及ヒ徑線ノ圖　三十四頁
第二十圖　骨盤誘導線ノ圖　三十八頁
第廿一圖　乳房ノ圖　四十頁
第廿二圖　乳房ノ內部乳線ノ畧圖　四十一頁
第廿三圖　乳汁ヲ顯微鏡ニテ檢セル圖　四十一頁
第廿四圖　外陰部ノ圖　四十二頁
第廿五圖　內外生殖器ノ連續ヲ示ス圖　四十五頁
第廿六圖　子宮ノ圖　四十六頁
第廿七圖　卵巢ヲ割斷シテ示セル圖　四十八頁
第二十八圖　子宮諸靱帶ノ畧圖　五十頁
第二十九圖　骨盤內臟器ノ位置及ヒ腹膜經過ノ圖　五十二頁
第三十圖　骨盤內ニ於ケル生殖器尿器及ヒ腸管ノ關係ヲ示ス圖　五十三頁

第二篇

第三十一圖　成熟卵ノ圖　五十七頁
第三十二圖　胎盤子宮面ノ圖　五十九頁
第三十三圖　胎盤胎兒面ノ圖　五十九頁
第三十四圖　子宮壁及ヒ胎盤ノ兩不平面互ニ嵌合シ胎兒ノ血液ト子宮ノ血液ト相接觸スルヲ示ス假想圖　六十頁
第三十五圖　臍帶動脈靜脈ノ經路並ニ眞結節ヲ示スノ假想圖　六十一頁
第三十六圖　臍帶假結節ノ假想圖　六十二頁
第三十七圖　姙娠十二乃至十三日ヲ經タル人卵ノ圖（自然大）　六十三頁
第三十八圖　甲、姙娠第廿一日ヲ經タル胎兒ノ圖（五倍大）　六十三頁
乙、同上（自然大）　六十三頁
丙、同上卵膜內ニ在ルモノ（自然大）　六十三頁
第三十九圖　甲、姙娠二十八日ヲ經タル胎兒ノ圖（五倍大）　六十四頁
乙、同（自然大）　六十四頁
丙、同卵膜內ニ在ルモノ（自然大）　六十四頁
第四十圖　甲、姙娠第三十三日ヲ經タル胎兒ノ圖（五倍大）　六十五頁
乙、同（自然大）　六十五頁
第四十一圖　甲、姙娠四十二日即チ六週ヲ經タル胎兒ノ圖（五倍大）　六十六頁
乙、同（自然大）　六十六頁

第四十二圖　甲、姙娠四十九日即ヲ七週ヲ經タル胎兒ノ圖(四倍大)　六十七頁
乙、同(自然大)　六十七頁
第四十三圖　甲、姙娠五十六日即ヲ八週ヲ經タル胎兒ノ圖(三倍大)　六十七頁
乙、同(自然大)　六十七頁
第四十四圖　成熟胎兒頭蓋頂面ノ圖　七十頁
第四十五圖　成熟胎兒頭蓋側面ノ圖　七十一頁
第四十六圖　姙娠末期ニ於ケル姙婦ノ矢狀斷面ノ圖　七十三頁
第四十七圖　姙娠線ノ圖　七十八頁
第四十八圖　分娩日測算暦ノ圖　八十頁
第四十九圖　姙娠各月ノ子宮位置ノ圖　八十四頁
第五十圖　兩手ヲ上腹部ニ抵テ子宮底ヲ觸診スルノ圖　八十八頁
第五十一圖　兩手ヲ子宮ノ兩側ニ抵テ觸診スルノ圖　八十九頁
第五十二圖　一手ヲ以テ把握スルガ如ク兒頭ヲ觸診スルノ圖　九十頁
第五十三圖　兩手ヲ深ク骨盤内ニ進メ觸診スルノ圖　九十一頁
第五十四圖　内檢査ノ手ノ方式ノ圖　九十六頁

第五十五圖　雙合檢査法ノ圖　九十七頁
第五十六圖　骨盤内直徑線ノ長サヲ檢スル圖　百一頁
第五十七圖　初姙婦腟口ノ圖　百二頁
第五十八圖　經產婦腟口ノ圖　百二頁
第五十九圖　初姙婦子宮口ノ圖　百四頁
第六十圖　經產婦子宮口ノ圖　百五頁
第六十一圖　雙胎々兒ノ圖　百七頁

第三篇

第六十二圖　軟部產道延長シ其方向前上方ニ向フヲ示ス圖　百十五頁
第六十三圖　胎胞ヲ形成シ子宮ヲ開カシムルノ圖　百二十三頁
第六十四圖　開大セサル姙子宮ノ頸管ヲ示ス圖　百二十四頁
第六十五圖　子宮頸管全ク開大シテ腟ト一ヲナスヲ示ス圖　百二十五頁
第六十六圖　兒頭露出シ會陰部延張膨出シ肛門哆開セルヲ示ス圖　百二十七頁
第六十七圖　胎盤剝離シ產出セントスルノ圖　百二十九頁
第六十八圖　兒頭ノ矢狀縫合第一斜徑ニ位スルヲ示ス圖　百三十五頁
第六十九圖　兒頭ノ矢狀縫合殆ト

骨盤出口ノ直徑ニ一致スルヲ示ス圖　百三十六頁
第七十圖　同兒頭ノ矢狀縫合第二斜徑ニ存スルヲ示ス圖　百三十七頁
第七十一圖　兒頭ノ矢狀縫合殆ト骨盤直徑線ニ一致スルヲ示ス圖　百三十八頁
第七十二圖　後頭位ヲ以テ產出セル兒頭ノ圖　百四十三頁
第七十三圖　前頭位ヲ以テ產出セル兒頭ノ圖　百四十三頁
第七十四圖　顏面位ヲ以テ產出セル兒頭ノ圖　百四十四頁
第七十五圖　額位ヲ以テ產出セル兒頭ノ圖　百四十四頁
第七十六圖　側臥ニ於テ會陰ヲ防護スルノ圖　百六十二頁
第七十七圖　仰臥ニ於テ會陰ヲ防護スルノ圖　百六十四頁
第七十八圖　臍帶結紮結節ノ圖　百六十八頁
第七十九圖　クレーデ氏胎盤壓出法ノ圖　百七十一頁
第八十圖　前頭位（第三頭蓋位）ノ圖　百七十七頁
第八十一圖　顏面位（第一顏面位）ノ圖　百八十頁
第八十二圖　額位（第二額位）ノ圖　百八十四頁

第八十三圖　臀位（第一臀位）ノ圖　百八十五頁
第八十四圖　小兒ノ跨レル臍帶ヲ解除スル圖　百九十六頁
第八十五圖　骨盤端位挽出法中臀部ヲ把握スルヲ示圖　百九十八頁
第八十六圖　後方ノ上肢ヲ牽下スルヲ示ス圖　百九十九頁
第八十七圖　前方ノ上肢ヲ牽下セソガ爲メニ兒體ヲ後方ニ廻旋セソトスルヲ示ス圖　二百頁
第八十八圖　兒頭ヲ挽出スルヲ示ス圖　二百二頁
第八十九圖　二卵性雙胎ノ圖　二百五頁

第四篇

第九十圖　吸乳器ノ圖　二百三十三頁
第九十一圖　臍帶ヲ包被スル瓦設片ノ圖　二百二十七頁
第九十二圖　ソキスレット氏煮乳裝置ノ圖　二百三十六頁

第五篇

第九十三圖　後屈子宮姙娠ノ圖　二百六十頁
第九十四圖　懸垂腹ノ圖　二百六十四頁
第九十五圖　子宮壁ヲ切割シテ葡萄狀胎ヲ現ハセル圖　二百六十五頁
第九十六圖　喇叭管姙娠ノ圖　二百七十六頁

第六篇

第九十七圖　正規骨盤斷面ノ圖　二百九十一頁
第九十八圖　單扁平骨盤斷面ノ圖　二百九十一頁
第九十九圖　佝僂病性扁平骨盤斷面ノ圖　二百九十二頁
第百圖　全狹窄骨盤斷面ノ圖　二百九十二頁
第百一圖　同上佝僂病扁平骨盤ノ全圖　二百九十三頁
第百二圖　骨軟化骨病性狹窄骨盤ノ圖　二百九十四頁
第百三圖　橫徑狹窄骨盤ノ圖　二百九十五頁
第百四圖　斜徑狹窄骨盤ノ畧圖　二百九十六頁
第百五圖　骨瘤性狹窄骨盤ノ圖　二百九十六頁
第百六圖　腦水腫胎兒ノ圖　三百三頁
第百七圖　重腹畸形胎兒ノ圖　三百四頁
第百八圖　無頭兒ノ圖　三百五頁
第百九圖　橫位胎兒ノ圖　三百七頁
第百十圖　人工胎盤剝離法ノ圖　三百四十三頁

第七篇

第百十一圖　乳頭帽子ノ圖　三百六十頁
第百十二圖　人工呼吸法(甲)ノ圖　三百六十九頁
第百十三圖　人工呼吸法(乙)ノ圖　三百六十九頁
第百十四圖　兒體ヲ倒懸スル人工呼吸法ノ圖　三百七十一頁

第百十五圖　前圖ニ同シ　三百七十一頁

第八篇

第百十六圖　一日中體溫變化ノ表　四百六頁
第百十七圖　橫位ニ於ケル內回轉術ノ圖　四百十二頁
第百十八圖　頭蓋位ニ於ケル內回轉術ノ圖　四百十四頁
第百十九圖　產婆携帶用器具ヲ開展シテ示セル圖　四百二十頁
第百二十圖　全產婆用器具ヲ提籃中ニ收メタル圖　四百二十五頁
第百廿一圖　產婆用器具ヲ結束セル圖　四百二十五頁

産婆學講本

醫學士 千葉稔次郎校訂
高橋辰五郎著述

第一章 産婆及ヒ産婆學

産婆 凡ソ産婆ナル者ハ正規ノ分娩即チ平易ニシテ毫モ危險ノ虞レナキ場合ニ處置シ又ハ産科醫ノ助手トナリテ各種ノ分娩ニ關與スル目ヲ處置シ又ハ産科醫ノ助手トナリテ各種ノ分娩ニ關與スル可キ其他妊娠産蓐及ビ初生兒ノ看護ニ就キテ其務メヲ盡ス可キモノトス

産婆學 上記ノ理由ニ基キ産婆學ナルモノハ妊娠分娩及ビ産蓐ニ就キ産婆ニ必要ナル知識ヲ授クルモノナリ而シテ其妊娠分娩及ビ産蓐ハ正規ニシテ容易ナルアリ異常ニシテ危險ナルアリ故ニ産婆學ニ於テハ

此正規及ビ異常ニ就キ各別ニ之レヲ説明ス可シ且ツ此等ノ説明ニ就キ正當ニ理解セシメンニハ先ツ豫カシメ人體ノ解剖及ビ生理ノ概畧ヲ説キ示サヽル可ラス

産婆學ノ區分　前項ノ主旨ニヨリ産婆學ヲ區別シテ次ノ八篇トナス

第一篇　人體畧論
第二篇　正規ノ姙娠及ビ其取扱法
第三篇　正規ノ分娩及ビ其取扱法
第四篇　正規ノ産蓐及ビ其取扱法
第五篇　異常ノ姙娠及ビ其取扱法
第六篇　異常ノ分娩及ビ其取扱法
第七篇　異常ノ産蓐及ビ其取扱法
第八篇　一般看護法ノ概畧

第二章　産婆ノ本務

産婆ノ職務

産婆術ハ善ク實地ニ習練スルヲ以テ最モ緊要ナリトス

産婆ノ職務　凡ソ産婆ノ職務ハ(一)姙婦ニハ姙娠中ニ必要ナル攝生法ヲ教示シ産婦ニハ補助ヲ與ヘテ苦痛ヲ輕減シ且ツ其分娩ヲ容易ナラシメ産蓐中ニ在リテハ蓐婦及ビ初生兒ノ看護ヲ營ムニ在リ(二)加之姙娠分娩又ハ産蓐ニ際シ醫師ノ治療ヲ要スル異常アルトキハ善ク之レヲ認識シ時ヲ過タズシテ醫師ニ托セサル可ラズ(三)而シテ急遽ノ間産科醫又ハ醫師ノ未ダ到ラザルノ際ニ在リテハ己レノ習得セル規則ニヨリ自ラ其危急ヲ處置セサル可ラズ(四)其他産科醫ノ施術スルニ當リテハ之レヲ補助シ且ツ己レノ委托セラレタル事項ハ適當ニ施行ス可キモノトス

産婆術ハ善ク實地ニ習練スルヲ以テ最モ緊要ナリトス　是レ此術ハ人ノ生死ト健康トノ關係スル所ニシテ甚ダ重要ナルモノナルニヨル産婆若シ唯書藉ノミニ就キ習學セルトキハ實地ニ當リ誤謬ノ判斷ナナシ或ハ症狀ノ輕重ヲ誤認シ漫リニ狼狽シ若クハ必要ノ處置ヲ等閑ニシテ救フ可ラサルノ失策ヲ釀スコトアリ故ニ産婆ハ自ラ其術ヲ行フニ先タチ必ズ熟練ナル師ニ就キテ各分娩ノ輕重緩急ヲ知リ其適應

ノ處置ニ習熟スルヲ以テ緊要ナリトス

産婆術ノ良否

産婆術ノ良否

又産婆術ハ之レヲ學ビ知ルコト明カニ且ツ親切ニ之レヲ營ムトキハ大ニ幸福ヲ人世ニ與フルモノナリ然レトモ若シ之レニ反シ産婆ニシテ必要ナル學問及ビ習練ヲ欠キ若シハ其職務ヲ行フコト不親切ナルトキハ極メテ有害ナリトス此故ニ産婆ノ不適當ナルニヨリテ母體若シクハ小兒ヲシテ死ニ陷ラシメ一家ノ幸福ヲ損シ若シクハ母兒兩體ノ死ヲ致スニ至レルコト決シテ其例ニ乏シカラサルナリ

産婆ハ妄リニ産科手術ヲ行フ可カラズ

産婆ハ妄リニ産科手術ヲ行フ可カラズ

産科手術ナルモノハ博キ學識ニヨリ精シク手術前後ノ狀況ヲ察シ嚴密ナル防腐法其他ノ諸準備ヲ整ヒ確實ニ之レヲ行フ可キモノニシテ到底産婆ノ擔任ス可キ所ニアラズ産婆若シ妄リニ之レヲ行ハヾ或ハ不必要ノ手術ヲ施コシ或ハ其手術ニヨリテ却テ甚ダシキ異常ニ陷ラシメ或ハ手術ニヨリテ損傷疾病等ヲ得セシメ却テ大害ヲ招クニ至ル可シ是レ産婆ノ妄リニ産科手術ヲ行フ可ラサル所以ナリ但シ危急ノ場合ニシテ醫師ノ未ダ到ラサル

トキハ止ムヲ得ズ一二ノ手術ヲ行フ可キコトアリ此ノ如キモノハ各其條下ニ說述ス可シ

産婆ハ自ラ疾病ヲ處置ス可カラズ

産婆ハ自ラ疾病ヲ處置ス可カラズ

凡ソ産婆ノ學ブ所ハ極メテ單易ナルモノナリ加之産婆ハ醫師ニアラサルガ故ニ固ヨリ疾病又ハ變狀ノ存スルニ當リ之レヲ診斷シテ適當ノ處置ヲ盡クスコト能ハサルモノナリ若シ患婦ノ治療ヲ醫師ニ托セズシテ切要ノ時期ヲ過キ去ラシムルトキハ母體又ハ小兒ノ生命ヲ損スルニ至ルコトアリ是レ最モ愼ム可キ所ナリ

産婆志願者ノ資格

産婆志願者ノ資格

(一)年齡ハ二十歲乃至三十五歲ニシテ(二)其手及ビ指ハ不器用ナラズ且ツ畸形皮膚病等ナク(三)感覺ハ遲鈍ナルコトナク殊ニ其視力聽力及ビ觸覺ハ良巧ナル可シ(四)精神遲鈍ナラズシテ意志明カニ且ツ判斷力ニ富ミ(五)身體ハ强健ニシテ善ク勤勞ニ耐ユ可ク(六)勉强力ニ乏カラズ(七)讀書筆記ヲ能クセサル可ラズ以上ノ資格ヲ具エサルトキハ善ク其術ヲ學ビ且ツ完全ニ其業務ニ服スルコト能ハサルモノト

産婆タルモノヽ責任

ス

産婆タルモノヽ責任

(一)産婆ハ其職務ヲ尊ビ重ンジ決シテ自ラ己レノ業務ヲ賤シム可ラズ又職務上ノ秘密ヲ守ランコトヲ要ス妄リニ業務上ノ事項ヲ話シ産婦ノ内事ヲ他人ニ暴露スルガ如キハ最モ誡ム可キモノトナス

(二)産婆ハ修學ニ熱心ナラサル可ラズ　産婆ハ正規ノ姙娠其他ノ取扱ヲナシ異常アルヲ見バ之レヲ醫師ニ托スルヲ以テ足レリトナスト雖トモ原ト正規ト異常トノ境界ハ最モ隱微ナルモノアルガ故ニ之レヲ知ルコト決シテ易カラズ且ツ普通ノ取扱法ト雖トモ高尚ノ學理ニ基クコト極メテ多キガ故ニ産婆タルモノハ常ニ教科書ヲ讀ミ産婆學雜誌等ヲ閲シ熟達セル産科醫ノ談話ヲ聽キ以テ己レノ必要ナル學問ヲ養ハサル可ラズ否ラザレバ實地ニ當リ處置スル所毎ニ其當ヲ得ス母兒共ニ其健康ヲ損シ甚ダシキニ至リテハ其生命ヲ害セシムルニ至ルコトアリ

(三)産婆ハ勇氣ヲ蓄ヒ沈着ヲ主トシ慈愛温和寡慾ニシテ且ツ品行方正ナラサル可ラズ　産婦ハ甚ダシキ苦痛ヲ訴ヘ若クハ將サニ死ニ陷ラントシ一家哀ミニ沈ムノ間ニ居リ醫師ノ助手トシテ能ク其職務ヲ盡スハ即チ勇氣アリテ且ツ沈着ナラサル可ラズ又産家貧困ニシテ産婆ニ十分ノ禮遇ヲ盡スコト能ハサルカ若クハ頑固ニシテ産婆ノ命ヲ用ヰサルモノト雖トモ亦能ク之レニ適當ノ處置ヲ與ヘ其職務ヲ全フセンコハ大ニ温和ニシテ慈愛心ニ富マンコトヲ要ス之レニ反シ富者ニ媚ヒテ之レニ諂ヒ貧者ヲ賤ミテ之レヲ疎ンスルカ如キコトアラバ決シテ其職務ヲ盡スコト能ハサルモノナリ其他一身ノ品行ハ最モ謹マンコトヲ要ス即チ若シ其身ニ脩マラサル所アレハ假令業務ニ熟達シ學問ニ秀ツト雖トモ既ニ世人ノ敬愛ヲ失ヒ空シク不名譽ノ裡ニ埋モルヽニ至ル可シ

(四)其他産婆ハ業務ニ熱心ナラサル可ラズ　即チ善ク業務上ノ諸準備ヲ整ヒ器具藥品等ハ必ズ清潔ニシテ且ツ缺乏ナカラシメ何時ニテモ産家ノ招キニ應ズルヲ得可ラシム可シ又日々遭遇セル業務上一般ノ事項ハ必ズ之レヲ記錄ニ止ルヲ要ス此ノ如ク熱心ナルトキハ益々其術ニ熟達

スルノミナラズ心常ニ業ヲデ業務ニ服スルノ益アリ又業務上ノ事項ヲ記錄スルトキハ記憶ヲ確カニシ業務ノ便利ヲ得且ツ自ラ興味ヲ生シ求メズシテ其業務ニ勉勵スルニ至ル可シ

(五)又産婆ハ業務ノ暇アレバ務メテ學ヲ勵ミ又ハ善良ノ文書ニ由リテ其氣質ヲ養ヒ決シテ不良ナル小説演劇等ニ耽ルコト勿ル可シ是レ其本務ヲ完カラシムルノ要法ナリ

第一編　人體器論

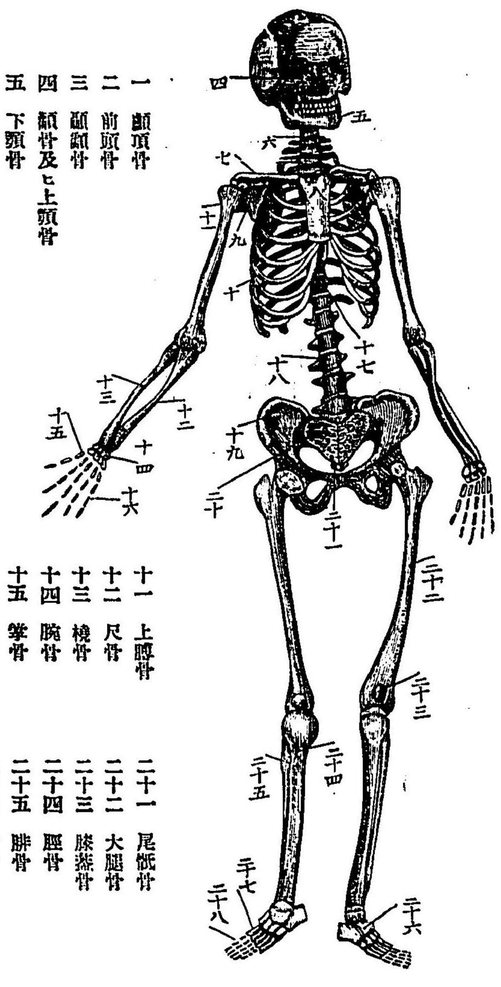
第三章　人體ノ構成

人體　人體ハ主ニ骨軟骨靱帶筋肉脈管神經內臟外皮及ビ結締織ヨリ構成セラル

骨　骨ハ概シテ石灰質ヨリ成レル堅固ノ體ニシテ筋肉ノ支柱トナリ又ハ腔洞ヲ造リテ貴要ノ臟器ヲ含ラシム身體中ニハ次ニ諸骨ヲ有ス

頭蓋骨	八
顏面骨	十四
脊椎骨	二十四
薦骨	一
尾骶骨	四
胸骨	一
舌骨	一
肋骨	二十四

第一圖　人體諸骨ノ圖

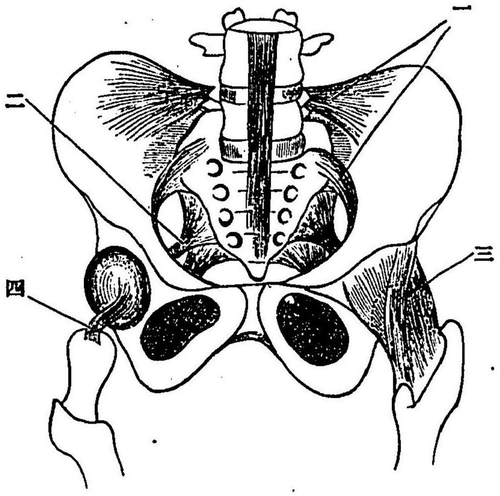


上肢骨　六十四
鎖骨　二
肩胛骨　二
上膊骨　二
尺骨　二
橈骨　二
腕骨　十六
掌骨　十
指骨　二十八
下肢骨　六十二
腕骨　二
大腿骨　二
膝蓋骨　二
脛骨　二

腓骨　二
蹄骨　十四
踵骨　十
趾骨　二十八

第二圖　靱帶ノ圖

骨盤ニ就キテ靱帶ノ關節ヲ連合セシムルヲ示ス



一　鷹腸關節ノ靱帶
二　蹶竹坐骨靱帶
三　股關節ノ靱帶
四　股關節內ノ靱帶（關節ヲ離隔セシメテ露セルモノ）

以上諸骨ノ全數ハ二百〇三個トナズ此等諸骨ノ連合セルモノヲ骨格ト稱ス此外耳中ニ六個ノ聽骨手及ビ足ニ各四個ノ種子骨アリ

軟骨　ハ軟キ骨ニシテ耳翼鼻尖等ノ內ニアリ又胎兒ノ骨ハ初メ軟骨ナレトモ變シテ堅キ骨トナルモノナリ

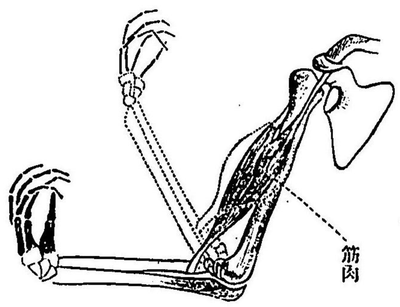
靱帶　ハ色白ク其質强キモノニシテ主ニ骨ノ關節ヲ包ミ其關節ヲ連合セシムルモノナリ

筋肉　ハ俗ニ肉ト名クル者ニシテ其色赤ク筋纖維ト稱スル細微ノ線條ノ集合セルニヨリテナル此筋肉ハ主ニ一ノ骨ヨリ他ノ骨ニ連ナリ其收縮ニヨリ身體ノ運動ヲ營マシムル者ナリ

軟骨　靱帶　筋肉　脈管

第三圖

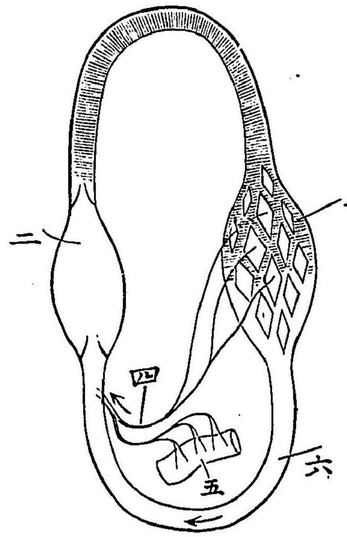
筋肉ノ圖　上膊ニ於ケルモノヲ示ス



點線ハ筋收縮シ前膊ノ肱上セラルヽヲ現ハス

脈管　ニハ動脈靜脈及ビ水脈管アリ動脈トハ搏動スル血管ニシテ心臟ヨリ起リ頭、上肢、下肢等普ク全身ニ分布シ樹枝ノ如ク漸次ニ相分レ終ニ至細ノ管（毛細管）トナリ以テ靜脈ニ移行ス

第四圖　脈管系ノ假想圖



一　動脈
二　心臟
三　毛細管
四　水脈管
五　腎
六　靜脈

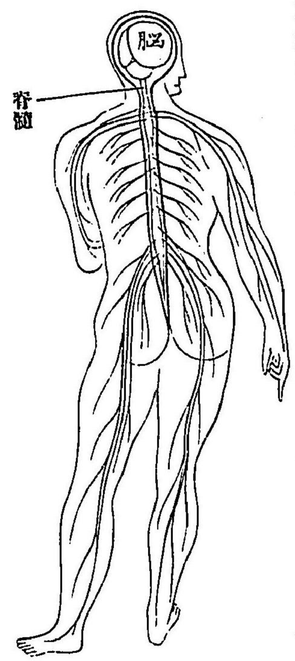
又靜脈ハ毛細管ヨリ起リ漸ク集合シ終ニ大管トナリテ心臟ニ還ル血液ハ心臟ヨリ出デ動脈ヲ經毛細管ヨリ靜脈ニ移リ之レヨリ更ニ心臟ニ戻ル者ナリ

又水脈管ハ毛細管ノ周圍ニ於テ組織ノ間ヨリ起リ漸次ニ相集マリ終ニ靜脈中ニ開口スル者ニシテ毛細管ヨリ滲出スル血液ノ成分ヲ再ビ血中ニ導ビクモノトス其腸ヨリ起レル水脈管ハ乳糜管ト稱ス

神經系　神經ハ腦髓及ヒ脊髓ヨリ出デ身體ノ各部ニ分布シ其感覺ト運動トヲ起サシムル者ナリ其色白クシテ恰モ絹絲ノ如シ小ナルモノハ

神經系

第五圖



神經系ノ圖　神經ノ腦脊髓ヲ出テ全身ニ分布スルヲ示ス

見ル可ラズ腦髓トハ頭蓋腔中ニ在リテ精神ノ舍ル所脊髓トハ脊椎骨管中ニ存シ主ニ運動ヲ主トルモノトス其他五官器ト云フモノアリ眼耳鼻舌皮膚ヲ云フ此五管器ハ腦髓ヨリ來レル神經ノ止マル所ニシテ其神經ニヨリ各種ノ機能ヲ營ム者ナリ

内臟　トハ胸廓及ヒ腹腔内ニ存スル機關ニシテ肺臟心臟胃腸肝脾腎臟膀胱子宮等ヲ云フナリ

皮膚　ハ五管ノ一ニシテ寒暖ノ感覺ヲ司トルノ外身體ノ内部ヲ保護シ汗ノ分泌ヲ營ム者ナリ又毛髮爪齒ハ皮膚ニ屬スルモノナリ

結締織　トハ細線ヨリナレル網狀物ニシテ總テノ臟器ノ間ニアレト

モ殊ニ皮下筋肉ノ間ニ存シ身體各器ノ連結ヲナサシムル者トス又脂肪ハ結締織ノ間ニ含マルヽ者ニシテ主トシテ皮下結締織ノ中ニ多シ

第四章　人體外部各部分ノ區別

人體ハ外部ヨリ區別スレバ(甲)頭部(乙)軀幹(丙)四肢ノ三トナス以下第五乃至第七章ニ於テ之レヲ記述ス可シ

第五章　頭部

頭部　ハ更ニ分チテ頭蓋ト顔面トノ二トナス

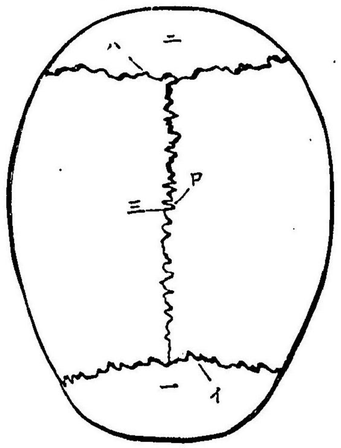
頭蓋　ハ腦髓ヲ容ルヽ骨ノ筐ニシテ八箇ノ骨ヨリナル即チ次ノ如シ

前頭骨又ハ額骨(一)顱頂骨(二)後頭骨(一)篩骨(一)蝴蝶骨(一)顳顬骨(二)是レナリ此等ノ諸骨ハ大抵扁平ニシテ互ニ接合スル所ハ鋸齒狀ヲナシ良ク嵌合ス之レヲ頭蓋骨ノ縫合ト云フ初生兒ノ縫合ハ多クハ化骨セズ而シテ二個或ハ三四個ノ縫合相接合スル部ニハ稍大ナル骨ノ間隙ヲ現ハス之レヲ頰門ト名ク顳顬骨ノ下部ニ耳竅ヲ現ハス又頭蓋ノ內腔ヲ頭蓋腔ト稱ス——頭蓋外部ノ名稱ハ最上部ヲ顱頂部トナシ其前部ヲ前頭又ハ前額

頭部
頭蓋

顔面

第六圖　頭蓋頂面(大人)ノ圖



一　前頭骨
二　後頭骨
三　顱頂骨
イ　冠狀縫合
ロ　矢狀縫合
ハ　三角縫合

部トナシ顱頂ノ後部ヲ後頭部トナシ頭蓋ノ側方耳ノ前上部ヲ顳顬部トナス

顔面　ハ多クノ骨ヨリ成レルモ其外面ニ現ハレテ主要ナルモノハ鼻骨上顎骨頰骨及ビ下顎骨トナス顔面骨ノ中央ニ鼻竅ヲ現ハシ鼻竅ノ上方ニ兩個ノ眼窩アリ又上下顎骨ノ間ニ口ヲ形成ス

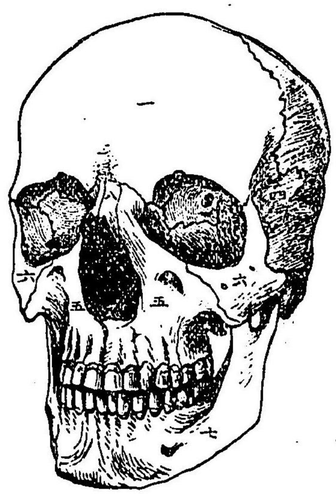
顔面中主要ナル部ノ名稱

顔面中主要ナル部ノ名稱　鼻ノ中央上下ニ連ナル高所ヲ鼻梁又ハ鼻背ト云ヒ鼻ノ下端鼻孔ノ兩側ニ開張セル部ヲ鼻翼ト稱シ兩眉ノ間

軀幹

第七圖

頭蓋及ヒ顔面諸骨ノ圖



一　前頭骨（又ハ額骨）
二　顱頂骨
三　顱顔骨
四　蝴蝶骨ノ一部
五　上顎骨
六　頬骨
七　下顎骨
八　鼻骨

第六章　軀幹

軀幹ハ又頭部・胸部・腹部ノ三ニ分ツ而ノ脊柱ト骨盤ニヨリ支ヘラル此脊柱ハ頸椎七胸椎十二腰椎五ヨリナリ内ニ脊髄ヲ臟ス骨盤ハ底ナキ椀鉢狀ノ骨ニシテ後ハ脊椎ノ下端ニ接シ左右ハ大腿骨ニ連ナリ子宮膀胱等ヲ容ルヽモノトス此骨盤ノ位置ニ就キテハ第十五圖ヲ參看スヘシ

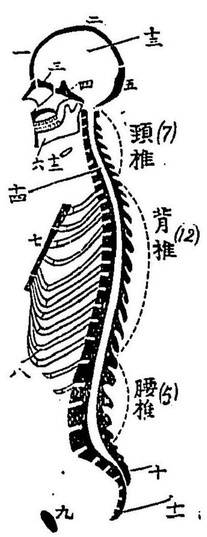
頸部

頸部ハ前部左右側部及ヒ後部ニ分ツ前部ニハ皮下ニ喉頭氣管甲狀腺アリ側部ニハ筋肉及ヒ貴要ナル大血管神經アリ後部ハ又項部ト稱シ皮下ニ頸椎棘狀突起ヲ現ハス頸椎ト氣管トノ間ニハ食道アリ

胸部

胸部ニ於テハ諸骨連合シテ胸廓ヲナス即チ胸廓ノ前部ハ胸骨及ヒ肋軟骨ニシテ側部ハ左右各十二箇ノ肋骨後部ハ十二箇ノ背椎ヨリ成レリ胸廓前面ノ上部ニ於テ横ニ胸骨ノ上端ヨリ外方肩胛骨ノ一突起ニ聯ナル

第八圖



一　前頭骨
二　顱頂骨
三　篩骨
四　蝴蝶骨
五　後頭骨
六　下顎骨
七　胸骨
八　肋骨及ヒ十二肋軟骨
九　恥骨
十　薦骨
十一　尾骶骨
十二　舌骨
十三　頭蓋腔
十四　脊椎骨若

心臟

長骨アリ之レヲ鎖骨ト云フ上肢ヲ胸廓ニ連結スルノ骨ナリ肩胛骨ハ胸廓後面ニ在テ各側ノ上部ニ位シ三角形ヲナシ上腕骨ヲ連結セシム又胸廓ノ前面ニハ各側ニ各一ノ乳房ヲ現ハス婦人ニ在リテハ其乳房頗ル大ナルヲ見ル――胸廓ノ內部ニハ肺臟心臟及ビ大血管ヲ藏ス

心臟

心臟ハ兩肺ノ中間ニ在リテ全身ノ血液循環ヲ支配スル臟器ナリ其狀ハ恰モ喞筒ノ如ク自ラ縮張シ以テ血液ヲ流動セシムルモノトス而シテ此心臟ハ左右二部ヨリナレルモノニシテ右ハ全身ヨリ還リ來レル不良ノ血液ヲ受ケ之レヲ肺ニ送リ左ハ肺ヲ流通シテ新

第九圖

心臟及ヒ肺臟ノ圖

一 喉頭
二 氣管
三 氣管枝
四 肺臟
五 心臟
六 大動脈
七 肺動脈
八 大靜脈

右方ナルハ內部ヲ現ハシ小體膜囊狀ヲナセル肺胞ヲ示ス

鮮トナレル血液ヲ受ケ之レヲ全身ニ送リ出スモノナリ

動脈靜脈及ヒ脈搏　血液ノ心臟ヨリ出デヽ全身ニ循リ行ク線路ヲ動脈ト云ヒ心臟ノ收縮ニ從フテ搏動ス又全身ヨリ心臟ニ還ルノ路ヲ靜脈ト稱ス搏動スルコトナク皮下ニ青キ蚯蚓ノ如キ線ノ現ハルヽハ此靜脈ノ一系ナリ動脈ノ搏動ハ之レヲ脈搏ト名ケ大人ノ脈搏ハ一分間凡ソ七十二回ナリ

動脈靜脈及ヒ脈搏

第十圖

胸廓內ニ於ケル心臟肺臟及ヒ動靜脈ノ關係ヲ示ス圖

1 喉頭
2 甲狀腺
3 氣管
4 氣管枝
5 左右ノ肺臟
6 左心
7 大動脈
8 上行大動脈
9 上肢及ヒ頭部ニ循ル動脈
10 下行大動脈
11 下大靜脈
12 上大靜脈
13 右心
14 肺動脈
15 肺靜脈
16 肺胞（氣管枝ノ末端）
17 胸廓
18 橫隔膜

肺胞ノ中間ニ細管トナリテ圍繞ス

橫隔膜　胸廓ノ下底即チ肺臟心臟

橫隔膜

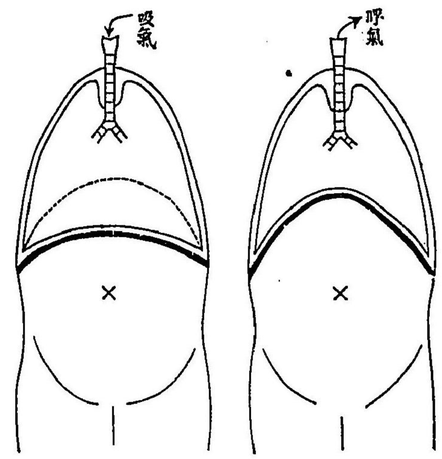
ノ直下ニハ筋肉ヨリ成レル穹窿形ノ一膜アリ之レヲ横隔膜ト云フ即チ胸腔ト腹腔トノ境界ヲナスモノニシテ主ニ呼吸ノ作用ヲ營マシム

呼吸ノ作用

呼吸ノ作用

即チ横隔膜緊張收縮スルトキハ其膜ノ穹窿部腹腔ニ向テ低下シ胸廓ト共ニ肺臟ヲ擴カラシム此際空氣ハ自ラ喉内ヲ通リテ擴張セル肺中ニ流入ス吸氣トハ即チ是レナリ之レニ反シテ横隔膜弛緩延張スルトキハ腹内ノ壓迫ニヨリテ其穹窿再ビ胸廓内ニ昇リ以テ肺臟ヲ壓縮シ其中ノ空氣ヲ逃出セシム之レヲ呼氣トナス呼氣ト吸氣トヲ名ケテ呼吸ト稱ス――大人一分時間ノ呼吸ハ凡ソ十八回ナリトス

第十一圖



甲、横隔膜弛ミ延ビテ上方ニ昇リ肺臟縮小シ呼氣ヲ生ズルヲ示ス

乙、横隔膜縮ミ張リテ腹腔内ニ降リ肺臟擴張シ吸氣ヲ發スルノ圖點線ハ(甲)ノ横隔膜ノ位置ヲ示ス

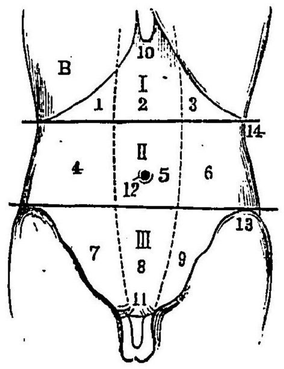
腹部

腹部

腹部ノ基礎ハ骨盤ニシテ上ハ横隔膜ヲ以テ堺トナシ後ハ五箇ノ腰椎ニシテ前及ビ左右ハ腹壁ナリ其内腔ヲ腹腔ト稱シ腹腔内ニハ消食器泌尿器ヲ藏シ婦人ニ在テハ子宮其他ノ生殖器ヲ有ス又腹部ノ後側ハ之レヲ腰部ト名ク

腹部前面各部分ノ圖

第十二圖



I 上腹部 1 右季肋部 2 上腹 3 左季肋部
II 中腹部 4 右腸骨部 5 臍部 6 左腸骨部
III 下腹部 7 右鼠蹊部 8 恥部 9 左鼠蹊部
10 心窩 11 陰阜 12 臍 13 腸骨前上棘 14 最下肋骨

腹部ノ前面

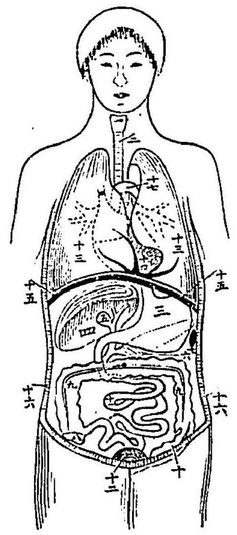
腹部ノ前面

縦ニ長キ六角形ニシテ其上界ノ中央ハ最モ高キ一角ヲナシ胸骨ノ劍狀

突起ノ直下ニ於テ稍凹陷ヲ呈スル之レヲ心窩トナス下界ノ中央最モ低キ一角ハ恥骨縫際ノ部位ニシテ稍隆起ヲ現ハス之レヲ陰阜ト名クル而シテ此六角形ノ全面ヲ先ツ横ニ上中下ノ三ニ別チ之レヲ上腹部中腹部下腹部トナシ各部ヲ更ニ三小部ニ區別ス即チ上腹部ニ於テハ中部ヲ上腹兩側ヲ左右ノ季肋部トナシ中腹部ニ在リテハ中央部ヲ臍部兩側ヲ左右腸骨部ト稱シ下腹部ニ至リテハ中部ヲ恥部兩側ヲ左右鼠蹊部ト名ク

胸腔及ビ腹腔内諸臓器連續ノ畧圖

第十三圖



一 喉頭　二 氣管　三 胃　四 肝　五 膽　六 膵　七 脾　八 盲腸　九 結腸　十 直腸　十一 小腸　十二 膀胱　十三 肺臓　十四 心臓　十五 横隔膜　十六 腹壁ノ切面　十七 大動脈

消食器

トハ主ニ胃腸肝膽膵ヲ總稱スル者ナリ就中胃ハ心窩ニ位シ其形囊狀ニシテ鹽酸ヲ含メル

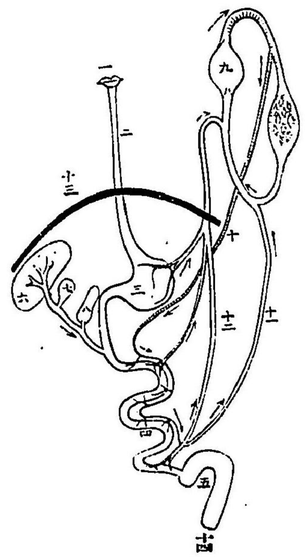
液ヲ分泌ス之レヲ胃液ト云フ

腸

ハ護膜管ノ如キ器ニシテ小腸ト大腸トヨリ成レリ長サ凡ソ二丈アリテ腹腔内ニ縈廻シ腸液ト名クル消化液ヲ分泌ス此他大腸ニ就キテハ尚ホ第十八章ニ説ク所アリ就テ之レヲ見ル可シ

消化器系ヨリ營養分ノ血管系ニ進入スル道路ヲ示ス假想圖

第十四圖



一 口　二 食道　三 胃　四 小腸　五 大腸　六 肝　七 膽　八 膵　九 心臓　十 動脈　十一 靜脈　十二 水脈管又ハ乳糜管トモ云フ　十三 横隔膜　十四 肛門

肝及ビ膵

ハ腸ノ外部ニ位シ各消化液ヲ分泌シ之レヲ腸内ニ注グ其肝ヨリ出ツルモノヲ膽汁ト云ヒ膵ヨリ製セルモノヲ膵液ト稱ス其他膽ハ膽汁ヲ貯蓄スルノ臓器ナリ而シ

テ肝臓ノ位置ハ横隔膜ノ下ニシテ胃ノ右方ニ在リ膽ハ又肝臓ノ下ニ位ス脾ハ胃ノ下方ニシテ小腸ノ間ニ存ス

食物ノ消化

食物ノ消化

食物ハ初メ胃中ニ達スレハ胃ノ運動ニヨリ能ク胃液ニ混シ漸次ニ消化シ粥狀トナル之レヲ糜粥ト稱ス食物既ニ消化シテ糜粥トナレハ胃ハ其下口ヲ開キ腸ニ送ル——食物ノ糜粥胃ヨリ腸ニ下ル時ハ脾液膽汁及ビ腸液之レニ混和シ更ニ良ク消化シ腸ノ内面ヨリ吸收セラレ一分ハ水脈管ヲ經テ靜脈中ニ混シ一分ハ直チニ腸ノ血管中ニ入リ以テ血液ノ必要分ヲ補フモノナリ此水脈管中ヲ通ルモノヲ名ケテ乳糜ト云フ又食物中ノ消化セサルモノハ腸管内ニ在リテ吸收セラルヽコトナク漸次ニ腸ノ下部ニ輸送セラレ終ニ肛門ヨリ排出セラル之レヲ糞トナス

脾

脾

脾ハ胃ノ左側ニ在リテ血液ノ製造ヲ司ドルモノナリ

尿器

尿器(又ハ泌尿器)

尿器ハ腎臓輸尿管膀胱及ビ尿道ニシテ腎臓ハ左右二個アリ腰椎ノ兩側ニ位シ其形ハ蠶豆狀ヲナス尿ハ此内ニ分泌セラレ輸尿管ヲ通リテ膀胱中ニ蓄積シ其滿ルニ至レハ尿道ヨリ排泄セラル尿器連續ノ狀態ハ第三十圖ヲ參看ス可シ

子宮卵巢

子宮卵巢

子宮卵巢等ハ腹腔ノ下部骨盤内ニ位ス其詳細ノ説明ハ之レヲ第十四乃至第十八章ニ讓ル

第七章　四肢

四肢

四肢

四肢ヲ分チテ上肢下肢ノ二トナス

上肢

上肢

上肢ハ更ニ分チテ肩胛部上膊前膊腕部掌部及ビ指トナス肩胛部ハ肩胛骨ノ位セル部ニシテ前側ニハ鎖骨アリテ胸廓ニ聯ナリ上膊骨ヲ連接セシム上膊ニハ上膊骨アリ前膊ニハ内方ニ尺骨外方ニ橈骨アリ上膊ト前膊トノ接合セル後側部ヲ肘ト云フ腕部ニハ八箇ノ腕骨アリ又掌部ニハ五個ノ掌骨指ニハ拇指ニ二節他ノ四指ニ各三節ノ指骨アリ——手トハ腕部掌部及ヒ指ノ三部ヲ總稱セルモノナリ

下肢

下肢

下肢モ亦分チテ腿部臀部上腿下腿及ビ足部トナス即チ下腹部ノ外方腸骨翼ノ部位ヲ腿部トナシ腿部ノ後方ニ當リ筋肉ノ甚タシク膨隆セ

ルノ部ヲ臀部トナス上腿ニハ大腿骨アリ身體中最大ナル骨ナリ而シテ此骨ノ上ハ骨盤ノ髀臼ニ關節シ下ハ脛骨ニ連ナリ大腿骨及ヒ脛骨ノ連合スル部ヲ膝ト云ヒ後面ヲ膝腿ト名ク膝ノ關節ヲ膝關節ト稱シ其關節ノ前側ニ膝蓋骨アリ下腿ニハ二個ノ骨アリ內ハ即チ脛骨ニシテ外ヲ腓骨ト稱ス足ハ後方ニ突隆セル部ヲ踵ト名ケ下面ヲ蹠ト稱シ前方ニハ趾ヲ具フ而シテ足部ノ骨ニハ三種アリ跗骨(七箇)蹠骨(五箇)趾骨(十四箇)是レナリ

指ノ名稱

指ノ名稱ハ第一ヲ拇指第二ヲ示指第三ヲ中指第四ヲ環指(又ハ無名指)第五ヲ小指ト云フ

足趾ノ名稱

足趾ノ名稱ハ第一ヲ第一趾又ハ踝趾第二ヲ第二趾第三ヲ第三趾第四ヲ第四趾第五ヲ第五趾又ハ小趾ト稱ス

以上上肢及ヒ下肢ノ諸骨ハ第一圖ニ就キテ之レヲ看ル可シ

第八章　婦人ニ固有ナル體格

婦人ハ骨格及ヒ筋肉ハ弱小ナレトモ脂肪ノ發生ト骨盤ノ發育ハ優大ナ

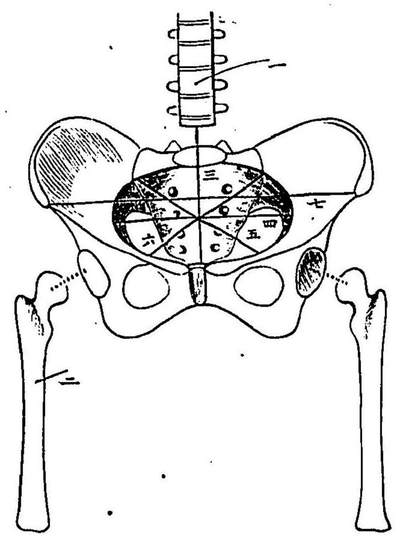
骨盤

ルモノナリ就中婦人ニ最モ緊要ナルハ骨盤ナリ是レ胎兒ハ骨盤內ヲ通リテ產出スルモノナルニ由ル

第九章　骨盤

骨盤ノ位置ヲ示ス圖並ニ一二ノ徑線ヲ附記ス

第十五圖



一　脊椎
二　大腿骨
三　直徑線
四　橫徑線
五　第一斜徑線
六　第二斜徑線
七　左右髂骨前上棘間ノ距離

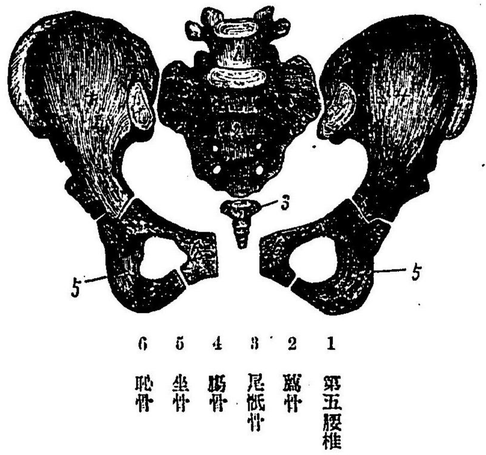
骨盤ハ腰部ノ骨ニシテ背椎ト大腿骨ノ間ニ位シ盤狀ヲナスヲ以テ此ノ名アリ之レヲ區別スレハ髖骨(或ハ無名骨)薦骨及ヒ尾骶骨トナス

薦骨

薦骨ハ骨盤後壁ノ骨ニシテ稍扁平ヲナシ三角形ヲ

尾骶骨

第十六圖



骨盤諸骨ヲ分離シテ示セル圖

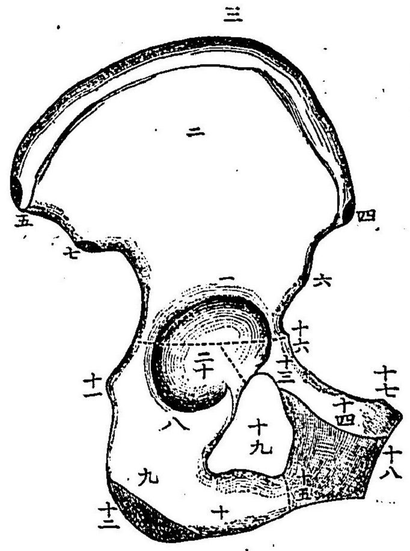
現ハス前面ハ凹形ニシテ四對ノ孔ヲ有シ後面ハ凸隆不平ニシテ同シク四對ノ孔ヲ呈ス上側ハ最下腰椎ト關節シ左右ノ側緣ハ上部粗糙ニシテ左右ノ腸骨ニ連接シ下部ハ遊離ス下端ハ即チ三角形ノ尖端ニシテ尾骶骨トノ小關節面ヲ現ハス此薦骨ハ小兒ノ時五個ノ椎骨ヨリナレトモ成長ノ後ヲ癒合シテ一骨トナルモノナリ

尾骶骨

ハ小ニシテ其形畧薦骨ニ類シ四個ノ小骨ヨリ成リ薦骨ノ尖端ト連結シ其關節ハ運動性ヲ有シ分娩ノ際後方ニ向テ移動スルモノナリ

腸骨　腹骨

第十七圖



腹骨外面ノ圖

一 腸骨體
二 腸骨翼
三 腸骨櫛
四 前上棘
五 後上棘
六 前下棘
七 後下棘
八 坐骨體
九 坐骨下行枝
十 坐骨上行枝
十一 坐骨棘
十二 坐骨結節
十三 恥骨體
十四 恥骨地平枝
十五 恥骨下行枝
十六 腸恥結節
十七 恥骨結節
十八 恥骨軟骨接合面
十九 閉鎖孔
二十 髂臼

腹骨(無名骨)

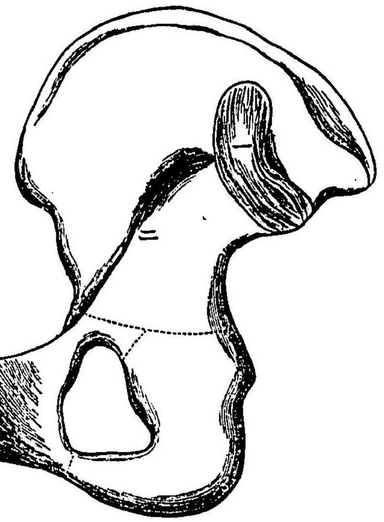
ハ骨盤ノ左右ニ在リテ其前壁ト側壁ヲナス此骨ハ小兒ノ時軟骨ヲ以テ連結セル三個ノ骨ヨリ成ル腸骨坐骨恥骨ト稱ス十四五歲ニ及ビ其間ニ存スル軟骨ハ化骨シテ堅ク癒着シ以テ腹骨ヲナス

腸骨

ハ腹骨ノ上部ヲナセルモノニシテ形恰モ鋤ノ如ク體ト翼(又ハ板)トヨリナル其上緣ハ彎曲ニシテ弓狀ヲナス腸骨櫛ト

腸骨內面ノ圖

第十八圖



一　耳狀面　二　弧形線　三　恥骨軟骨接合面

云フ其前端ヲ腸骨前上棘ト云ヒ後端ヲ腸骨後上棘ト名ク又前上棘ノ下方ニハ前下棘アリ後上棘ノ下ニハ後下棘ヲ現ハス腸骨ノ內面ハ稍凹陷ヲ呈シ腸骨窩ヲナス其下方ニ弧形線アリ其後方ニ耳狀ノ粗糙面アリ之レヲ耳狀面ト名ク薦骨トノ關節面ナリ腸骨ノ外面ハ稍膨隆ヲ呈シ臀部筋肉ノ附着部ヲナス——腸骨體ハ强厚ニシテ狹ク他ノ坐骨及ビ恥骨ノ體部ト共ニ髀臼ヲ構成ス

坐骨

坐骨　ハ體ト二枝ヨリナル體ハ强厚三角形ヲナシ髀臼ノ一部ヲ形ヲ造リ後緣ノ下方ニ坐骨棘ヲ出ダス下行枝ハ體ノ下方ニシテ下端ニ坐骨結節ヲ呈ス上行枝ハ下行枝ノ下端ヨリ斜メニ內上方ニ赴キ恥骨下行枝ト連續ス

恥骨

恥骨　モ亦體ト二枝ヨリ成ル體ハ髀臼ノ前下方ニシテ其上部腸骨トノ接際ニ腸恥結節ヲ現ハス地平枝ハ體ヨリ前內方ニ赴キ內端ニハ軟骨トノ接合面ヲ現ハス即チ左右ノ恥骨ハ軟骨ニヨリテ相接合スルモノナリ其接合部ヲ恥骨縫際ト稱フ接合面ノ上方ニハ恥骨結節ヲ呈ス下行枝ハ地平枝ノ內端ヨリ下外方ニ向フ坐骨及ビ恥骨ノ各兩枝ハ相連合シテ一孔ヲナシ之レヲ閉鎖孔ト稱フ

髀臼

髀臼　ハ杯狀ノ深窩ニシテ腸骨坐骨及ビ恥骨ノ三骨體相癒合セル中央部ニ在リ大腿骨頭ヲ受容シ股關節ヲ形成ス

大小骨盤

第十章　大骨盤及ビ小骨盤

大小骨盤　ハ左右腸骨薦骨尾骶骨及ビ第五腰椎ノ四種(骨數八箇)ヨリ

ナル無名線ヲ以テ大小骨盤ノ境界トナス無名線ハ即チ小骨盤ノ入口ナリ

小骨盤

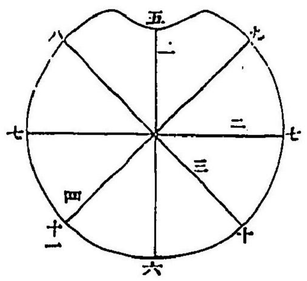
小骨盤

ハ其廣サ僅カニ兒頭ヲ通過セシムルニ足ルヲ以テ分娩ニ當リテ甚ダ緊要ノ關係アリ

骨盤入口

骨盤入口ノ形狀及ヒ徑線ノ圖

第十九圖



一　直徑線
二　橫形線
三　第一斜徑線
四　第二斜徑線
五　薦骨岬
六　恥竹縫際
七　左右無名線ノ最廣部
八　右薦腸關節
九　左薦腸關節
十　左腸恥結節
十一　右腸恥結節

此ノ如ク緊要ナルヲ以テ通常單ニ骨盤ト稱スレハ直ニ小骨盤ヲ指スモノトス小骨盤ヲ分チテ骨盤入口(上口)骨盤出口(又ハ下口)及ビ骨盤腔ノ三トナス

骨盤入口(上口)

ハ即チ無名線ノ部ニシテ後ハ薦骨岬ヨリ始マリ側部ハ腸骨孤形線ニ至リ前ハ腸恥結節ヲ過キ恥骨地平枝ノ上緣ヨリ恥骨縫際ノ上緣ニ於テ左右相會合セル線ヲ以テ圍擁セラルヽモノナリ形狀ハ殆ド葵ノ葉ノ如シ其大サハ三種ノ線ヲ以テ表示セラル即チ直徑線橫徑線及ビ斜徑線是レナリ但シ日本婦人ニ於ケル徑線ノ長サハ未ダ確定セラレサルヲ以ヲ獨乙人ノ徑線ヲ示セリ日本人ニ於ケルモノハ是レヨリ大凡ソ一仙迷短キモノト考フ可シ

直徑線

橫徑線

斜徑線

骨盤腔

直徑線　薦骨岬ノ中央ヨリ恥骨縫際上緣ノ中央ニ達スルモノ……長サ十一仙迷

橫徑線　左右腸骨無名線中部ノ最大ナル距離……長サ十三仙迷半

斜徑線　二線アリ一ハ右薦腸關節ヨリ左腸骨ノ腸恥結節ニ至リ(第一斜徑線)一ハ左ノ薦腸關節ヨリ右腸恥結節ニ達ス(第二斜徑線)ルモノニシテ兩線互ニ交叉ス……長各十二仙迷半

骨盤腔　トハ骨盤入口ヨリ骨盤出口ニ至ルノ間ヲ云ヒ其後壁ハ薦骨及ビ尾骶骨ニシテ側壁ハ坐骨及ビ腸骨ノ下部前壁ハ左右ノ恥骨ヨリナ

レリ形狀ハ入口ト異ニシテ前後ニ廣ク横徑ハ却テ短カシ又骨盤腔內ニハ骨盤廣部及ビ骨盤狹部ノ二部アリ甲ハ薦骨ノ第二及ビ第三椎ノ連合部ヨリ耻骨縫際後面ノ中央ニ達スル線ニシテ乙ハ薦骨及ビ尾骶骨ノ關節部ヨリ恥骨縫際後面ノ下緣ニ至ル線ノ平面ヲ云フ第二十圖中(二)ハ骨盤廣部ノ直經線ニシテ(三)ハ骨盤狹部ノ直徑線ナリ

骨盤出口

骨盤出口(下口) ハ後ハ尾骶骨ノ尖端前ハ耻骨弓左右ハ兩坐骨結節ヨリナレリ其徑線ヲ示スコト次ノ如シ但シ斜徑線ハ其兩端軟部ヨリナルガ故ニ其長徑ヲ定メズ

直徑線

直徑線 耻骨縫際ノ下緣ヨリ尾骶骨ノ尖端ニ至ル……九仙迷

横徑線 兩坐骨結節間……十一仙迷

大骨盤

大骨盤 ハ小骨盤ノ上部ニ位シ後ハ第五腰椎左右ハ腸骨翼前ハ腹壁ノ下部ヨリ成ル大骨盤ハ分娩ノ際直接ニ緊要ノ關係ナシト雖トモ其狀態ヲ明カニスルトキハ小骨盤ノ形狀ヲ概知シ得ベシ而シテ大骨盤ニ於テモ數種ノ徑線ヲ定ム骨盤外計測法ニヨリテ之レヲ測定ス可シ即チ此外計測法ニヨリテ撿ス可キモノ外直徑線外斜徑線左右腸骨前上棘間ノ徑線左右腸骨櫛間ノ徑線及ビ左右大轉子間ノ徑線是レナリ就中產婆ニ必要ナルハ前上棘間ノ經線トナス(第二篇第三十八章ヲ參看ス可シ)次ニ其距離ヲ記ス可シ但シ日本婦人ニ於ケル計測數ハ未ダ一般ニ承認セラルヽニ至ラサルガ故ニ茲ニハ主トシテ獨乙婦人ノ徑線ヲ記載セリ

外直徑線

外直徑線 第五腰椎棘狀突起ヨリ耻骨縫際ノ前面ニ至ル……二十仙迷(日本婦人十八仙迷)

外斜徑線

外斜徑線 一側ノ腸骨後上棘ヨリ他側ノ腸骨前上棘ニ至ル……二十二仙迷(日本婦人二十仙迷)

左右腸骨前上棘間ノ距離

左右腸骨前上棘間ノ距離(徑線) 二十五仙迷(日本婦人二十三仙迷)

左右腸骨櫛間ノ距離

左右腸骨櫛間ノ距離(徑線) ……二十八仙迷(日本婦人二十六仙迷)

左右大轉子間ノ距離

左右大轉子間ノ距離(徑線) ……三十二仙迷(日本婦人二十八仙迷)

骨盤壁ノ高徑

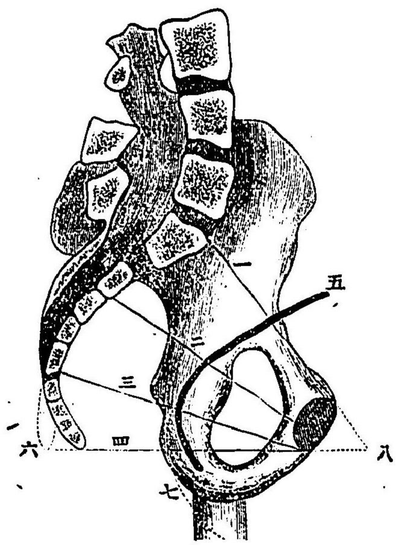
骨盤腔ノ彎曲及ヒ誘導線

骨盤壁ノ高徑　即チ薦骨岬ヨリ尾骶骨ノ尖端ニ至ル迄凡ソ十二仙迷骨盤前壁即チ恥骨ノ高サハ四仙迷ナリトス

骨盤腔ノ彎曲及ヒ誘導線　恥骨縫際後面ノ突隆ト骨盤後壁ノ凹陷ニヨリ骨盤腔ノ彎曲ヲ生ス彎曲ノ方向ハ骨盤上口腔及ビ下口中ニ於ル點線）ヲ示シ且ツ骨盤傾斜ノ角度ヲ附記ス

骨盤誘導線ノ圖　分娩時ニ於ケル變化（彎曲セ

第二十圖



一　骨盤入口ノ直徑線
二　骨盤腔ノ直徑線（骨盤廣部）
三　同ク骨盤腔ノ直徑線（骨盤狹部）
四　骨盤下口ノ直徑線
五　誘導線
六　分娩時ニ尾骶骨後方ニ移動スルヲ示ス
七　分娩時ノ誘導線ノ方向ヲ示ス
八　骨盤傾斜ノ角度

骨盤ノ傾斜

婦人生殖器

乳房

ケル各直徑線ノ中點ヲ連結セルモノニシテ殆ド恥骨縫際ヲ中心トシテ畫ケル圈線ト相同シ此彎曲線ハ分娩ノ際小兒ノ經過ス可キ經路ニシテ之レヲ名ケテ誘導線ト云フ

骨盤ノ傾斜　トハ骨盤入口平面ノ地平線ニ對スル傾斜ヲ云フモノニシテ其入口平面ト地平線トノ造レル角度ハ凡ソ五十五度ナリトス

第十一章　婦人生殖器ノ論

婦人生殖器　ヲ別チテ內生殖器及ビ外生殖器ノ二トナス交接姙娠分娩授乳等ヲ營ムモノナリ而シテ內生殖器トハ腟子宮喇叭管卵巢及ビ附屬諸靱帶ヲ云ヒ外生殖器トハ乳房外陰部ヲ云フ

第十二章　乳房

乳房　ハ乳汁ノ分泌ヲ營ムノ器ニシテ胸部ノ前面第三乃至第六肋骨ノ間ニ在リ形ハ鐘狀ヲナシ乳體及ビ乳頭ヨリナル乳體ハ圓形ニ膨隆シ頂部ニ赤色ノ一部ヲ現ハス之レヲ乳暈ト云フ姙娠中ニハ其色濃厚トナリ甚ダシク黑色ヲ帶ブル者アリ又姙娠セル婦人ノ乳暈ニハ十乃至二十

個ノ大ナル皮脂腺（モントゴメリー氏腺）ヲ現ハス乳暈ノ中央ニ在ル結節ハ即チ乳頭ナリ乳頭ニハ數箇ノ小孔アリ之レヨリ乳汁ヲ涌出セシム

乳腺　乳房中ニ在リテ乳汁ヲ分泌スルモノヲ乳腺ト云フ數箇ノ腺胞相集マリテ葡萄狀ヲナセルモノナリ各胞ノ排泄管ハ相合シテ輸乳管ヲナス此輸乳管ハ終ニ乳頭ニ達シ茲ニ開口ス又乳腺々胞ノ周圍ニ多量ノ脂肪組織アリ之レヲ肥脂囊ト名ク

乳汁　乳腺々胞内ニ分泌セラルヽ白色

乳腺

乳汁

第二十一圖

乳房ノ圖

一　乳體
二　乳暈
三　乳頭
四　皮脂腺

ノ液ニシテ水脂肪乾酪乳糖食鹽其他ノ鹽類ヲ含有ス尙乳汁ニ就キテハ第四篇第九十一章ヲ參看ス可シ

乳球　乳汁ヲ顯微鏡ニテ照檢スレバ夥多ノ小球ヲ見ル之レヲ乳球ト云フ即チ脂肪ノ小塊ナリ此ノ乳球ヲ除去スルトキ透明ノ液トナル之レヲ乳清ト稱ス

初乳　分娩後凡ソ

乳球

初乳

第二十二圖

乳房ノ內部乳腺ノ畧圖

一　乳頭
二　輸乳管
三　乳腺腺胞
四　脂肪組織

第二十三圖

乳汁ヲ顯微鏡ニテ檢セル圖

乳球ヲ示ス

外陰部

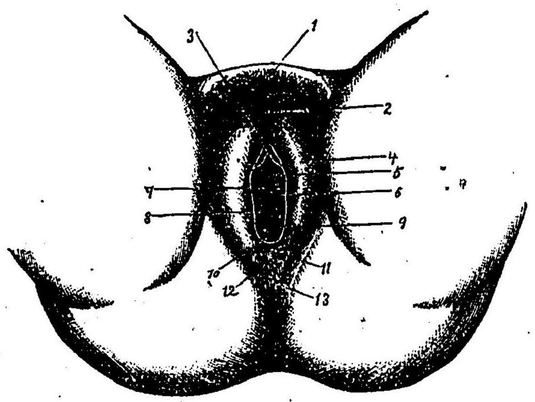
大陰唇

一週間ハ乳汁甚ダ稀薄ニシテ水樣ナナス之レヲ初乳ト名ク

第十三章　外陰部

第二十四圖

外陰部ノ圖



1 陰阜　2 前連合　3 陰核　4 大陰唇　5 前庭　6 小陰唇　7 尿道口　8 腟口　9 處女膜　10 舟狀窩　11 陰唇繫帶　12 後連合　13 陰會

外陰部　ハ腹壁ノ下部ト肛門ノ間ニシテ其中部ニ大陰唇前上部ニ陰阜後下部即チ肛門ノ前部ニ會陰ヲ現ハス

大陰唇　ハ皮膚ノ厚キ縱皺襞ニシテ內ニ多量ノ脂肪ヲ藏シ表面僅ニ陰毛ヲ生ズ左右大陰唇間ヲ陰門裂孔ト名ク大陰唇ノ

小陰唇

バルトリン氏腺

陰核

前庭

腟口

處女膜幷ニ處女膜根及ビ

前端陰阜ノ下方ニ在リテ左右互ニ連合セルノ部ヲ前連合ト云フ又大陰唇ノ後端會陰ノ前部ニ在リテ同シク左右相連合スルヲ後連合ト名ク大陰唇ノ內方ニハ小陰唇アリ

小陰唇　ノ外面ハ大陰唇ニ移行シ內面ハ粘膜ヲ以テ被覆セラル上端ハ二脚トナリテ陰核ノ上下ニ達シ下端ハ漸次ニ狹小トナリテ腟口ヲ界ス

バルトリン氏腺　小陰唇ノ內方腟口上部ノ兩側ニ　バルトリン氏腺アリテ小陰唇及ビ處女膜ノ間ニ開口ス

陰核　ハ前連合ノ下部ニ位セル長圓形ノ小隆起ニシテ小陰唇ノ上端之レニ連結ス陰核ノ下部ニ亦前庭アリ

前庭　ハ三角形ノ平坦部ニシテ中央ニ尿道口ヲ現ハス尿道口ノ周圍稍隆起ス之レヲ尿道口隆起トナス前庭ノ下方ニハ腟口アリ

腟口　ハ腟管ノ口ニシテ小兒ノ際ハ其大部處女膜ヲ以テ閉塞セラル

處女膜並ニ處女膜根及ビ　ミルヲ狀肉阜　處女膜ハ通例腟

ミルチ狀肉阜

口ノ周圍ニ附著シ中央ニ縱形ノ孔ヲ現ハス此膜ハ通例第一回ノ交接ニヨリテ數所ニ斷裂ヲ生シ所謂處女膜根ヲナス又處女膜根ハ分娩ノ際多クハ壞滅シ其遺殘セルモノハ腟口ノ周圍ニ於テ數箇ノ小疣狀物ヲナス之レヲ ミルチ狀肉阜ト名ク

陰唇繫帶

陰唇繫帶

ハ後連合ノ前方兩大陰唇間ニ附着シ通常最初ノ分娩ヲ以テ斷裂ス可シ陰唇繫帶ト處女膜トノ間ニ凹窩アリ之レヲ舟狀窩トナス

陰阜

陰阜

ハ耻骨縫際ノ部ニシテ最モ隆起シ茲ニ陰毛ヲ叢生セシム

會陰

會陰

ハ後連合ト肛門ノ間ニシテ分娩ノ際甚ダシク延張シ其處置不適當ナルトキハ往々破裂ヲ生ズルモノナリ

腟

第十四章　腟

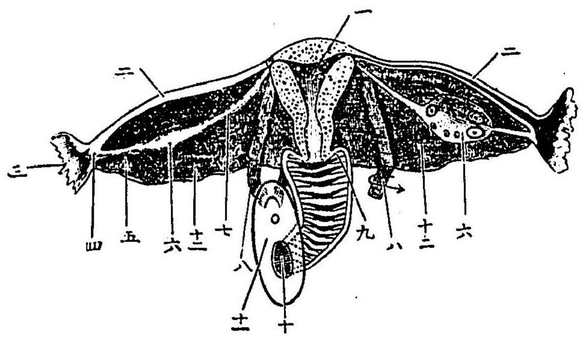
腟ハ腟口ヨリ子宮ニ達スル膜管ニシテ通常ハ其前壁ト後壁ト互ニ密着ス其長サ凡ソ十仙迷ニシテ骨盤誘導線ノ方向ニ從ヒ前方ニ彎曲ス上端ハ子宮腟部ヲ回擁シ且ツ上方ニ向フテ袋狀ニ膨出ス其膨出部ヲ前及ビ後ノ腟穹窿部ト稱ス又腟ノ前後壁ニハ著シキ皺襞ヲ呈ス之レヲ前及

子宮

ビ後ノ腟柱ト名ク

第十五章　子宮

第二十五圖　內外生殖器ノ連續ヲ示ス圖　腟子宮及ヒ左側ノ喇叭管卵巢ノ切割セルヲ示ス

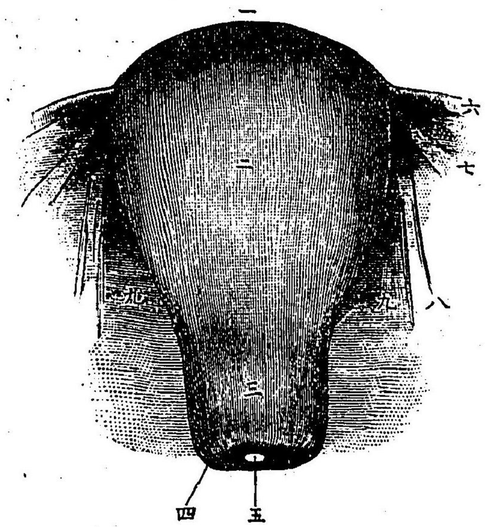


一 子宮
二 喇叭管
三 靭絲
四 闊靱帶
五 卵巢靭絲
六 卵巢
七 卵巢靱帶
八 圓靱帶
九 腟穹窿部
十 腟口
十一 外陰部
十二 扁靱帶

子宮ハ扁平梨子狀ヲナシ腟管ノ上ニ位シ前ハ膀胱後ハ直腸ニ接シ左右ハ喇叭管圓靱帶廣靱帶等ヲ附着セシム其長サ凡ソ八仙迷ヲ有シ前方ニ傾欹シ且稍前屈ス但シ其傾斜ノ位置ハ膀胱及ビ直腸ノ盈虛ニヨリテ變化シ或ハ甚ダシク傾キ或ハ直

子宮ノ圖　附屬器ヲ具フルモノヲ示ス

第二十六圖



一 子宮底　二 子宮體　三 子宮頸　四 子宮腟部　五 子宮外口　六 喇叭管　七 卵巣靱帶　八 円靱帶　九 扁靱帶

立シテ腸骨岬ニ偏倚スルコトアリ子宮ヲ區別シテ底體及ビ頸トナス其内腔ヲ子宮腔ト稱ス

子宮底　ハ鈍圓ニシテ子宮ノ最上部ヲナシ前方ニ向ヒ兩側ニハ喇叭管圓靱帶廣靱帶卵巣靱帶ヲ附麗ス

子宮體　ハ底及ビ頸ノ間ニ在ル部ニシテ兩側ニハ廣靱帶ヲ附着セシム

子宮頸並子宮腟部　子宮頸ハ體ノ下方ニシテ其一部ハ腟内ニ突出ス之レヲ子宮腟部ト云フ腟部ノ中央ニ子宮外口ヲ現ハス

子宮外口　ハ即チ子宮腔ノ開口部ニシテ稍圓形ヲナスモ既ニ分娩ヲ經レバ周圍ノ腟部ニ破裂ヲ生ズルガ故ニ横裂又ハ不正形ヲ現ハス尚ホ此區別ニ就キテハ第二篇第三十九章ヲ參看ス可シ

子宮腔並ニ子宮内口及ビ子宮頸管　子宮腔ハ三角形ヲナシ一角ハ下方ニ在リテ兩角ハ上方ニ位シ喇叭管ノ内腔ニ連通ス下方ノ一角ハ即チ子宮外口ナリ但シ子宮外口ノ上部凡ソ二仙迷半ニシテ内腔頗ル狹小トナル之レヲ子宮内口ト云フ即チ子宮體ト子宮頸ノ連合部ニ當レリ内口及ビ外口ノ間ハ子宮頸ノ部ニシテ之レヲ子宮頸管ト稱ス其中央部ハ稍廣濶ナリ

第十六章　喇叭管卵巣及ビ附屬諸靱帶

喇叭管　ハ其形喇叭ニ似タルヲ以テ名ク或ハ又輸卵管ト稱ス其所在ハ子宮底ノ兩側扁靱帶ノ上縁内ニ在リ管ノ内端ハ細小ニシテ子宮ニ連

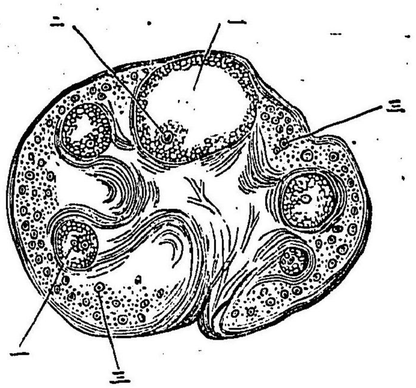
子宮外口

子宮腔并ニ子宮内口及ビ子宮頸管

喇叭管

接ス是レヲ喇叭管ノ子宮口ト云フ其外端ニ至ルニ從ヒ漸次ニ增大シ終ニ壺狀ノ膨大部ヲナス之レヲ喇叭管ノ壺腹ト名ケ腹腔內ニ開口ス而シテ壺腹ノ口緣ハ數箇ノ小片ヲ附ス之レヲ剪絲トナス就中一片ノ剪絲ハ頗ル長クシテ卵巣ニ連ナル之レヲ卵巣剪絲ト唱フ喇叭管ノ長サハ凡ソ十仙迷ニシテ中央ノ大サ罌粟ノ如シ

第二十七圖



卵巣ヲ割斷シテ示セル圖

喇叭管ノ作用　此管ハ卵巣ニ生ズル卵ヲ剪絲ヨリ壺腹ニ受ケ之レヲ子宮腔ニ導ヒクノ用ヲナスモノトス

卵巣　ハ其形ト大サハ罌粟鳩卵ノ如ク扁靱帶ノ兩層間ニ在リ其外端ハ卵巣剪絲ニ連ナリ內端ハ卵巣靱帶ニ接ス其質內ニ濾胞及ヒ　グラーフ氏胞ヲ藏ス

濾胞及ヒグラーフ氏胞　卵巣ノ質中ニハ無數ノ小胞アリ之レヲ濾胞ト云フ濾胞ノ發育セルモノヲ　グラーフ氏胞ト名ク　グラーフ氏胞ハ內ニ透明ノ液ト卵トヲ含ム

卵　ハ透明層蛋黃層胚胞胚斑ノ四部ヨリナリ大サ二密迷(凡ソ七厘)ノ細胞ニシテ　グラーフ氏胞成熟シ破裂スルノ際即チ婦人ノ月經開始スルノ時期ニ於テ破裂セル　グラーフ氏胞內ヨリ脫出シ喇叭管內ヲ通リ通例茲ノ部ニ於テ交接ニヨリ生殖器內ニ進入セル男子ノ精蟲ト合シテ受胎シ子宮腔內ニ達シ其內ニ發育シ遂ニ胎兒ヲ生成スルモノナリ但シ卵ノ精蟲ニ會合スルハ只喇叭管內ノミナラズ卵巣ヨリ子宮內ニ至ルノ間各所ニ之レヲ營ムコトヲ得可シ卵若シ受胎スルコトナケレバ子宮內ヲ出デ體外ニ排出セラル

月經及ヒ婚嫁期　卵ノ卵巣ヲ離ルヽノ時期ハ年齡凡ソ十四五歲ノ

候ニシテ通常其期ニ月經ヲ現ハス可シ此ノ如シ始メテ月經發スルノ期ヲ婚嫁期ト云フ其期以後卵ハ毎月一回宛卵巣ヲ離レ以テ月經ヲ催起ス可シ但シ日本婦人月經ノ持續ハ概シテ之レヲ云ヘバ凡ソ十四歳ニ始マリ四十九歳ニ終ルモノトス

扁靱帶圓靱帶及ヒ薦骨子宮靱帶

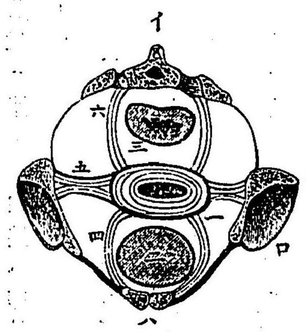
扁靱帶(又ハ廣靱帶)ハ子宮ノ前後ヲ被覆セル腹膜ノ兩葉ヨリナリ子宮ヲ骨盤ノ兩側ニ連結セシメ其兩葉内ニハ子宮ニ分布スル血管淋巴管神經卵巣喇叭管及ヒ圓靱帶ヲ含ム

圓靱帶ハ筋組織ヨリナレル圓形ノ帶ニシテ二條アリ子宮底ニ於テ喇叭管ノ下側ヨリ起リ扁靱帶内ヲ前外方ニ經過シ鼠蹊部ノ組織内ヲ通リ陰阜ニ抵止ス姙娠中ニハ頗ル增大シ高姙娠(姙婦臨月ニ近キモノヲ云フ)ニ在リテハ鉛筆大ニ達ス

薦骨子宮靱帶ハ同ジク筋組織ヨリナレル靱帶ニシテ二條アリ子宮頸ヨリ後方ニ赴キ直腸ヲ狹ミ薦骨ニ附着ス

第二十八圖

子宮諸靱帶ノ略圖
骨盤内臓器ヲ骨盤ト共ニ地平ニ切斷シテ示セルモノ



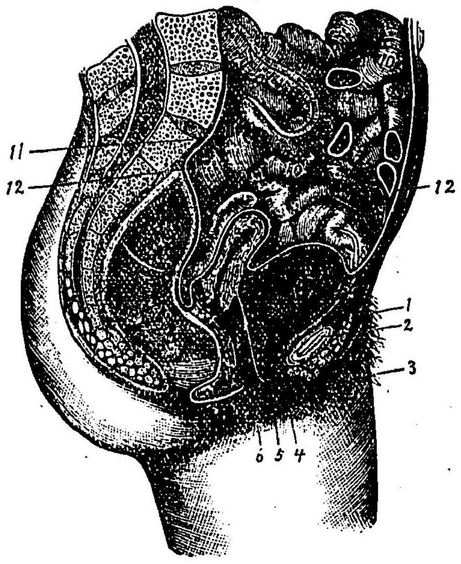
一 子宮
二 膀胱
三 直腸
四 圓靱帶
五 扁靱帶
六 薦骨子宮靱帶
イ 薦骨
ロ 腔骨ノ髀臼部
ハ 恥骨

第十七章　腹膜

腹膜ハ薄キ滑澤ノ膜ニシテ腹腔ノ全内面ト腹腔内諸臓器ノ表面ヲ被包スルモノナリ今骨盤内ニ於ケルモノヲ記述スヲ可シ即チ前腹壁ノ裏面ニ貼付セル腹膜ハ膀胱ノ前上面ヨリ後面ニ至リ子宮口ノ部分ニ於テ上方ニ飜ヘリ子宮ノ前面及ヒ底部ヲ被ヒ次ニ後壁ヲ下リ其前面ニ存セルモノト共ニ全ク子宮體ヲ狹ミ子宮ノ兩側ニ於テハ前後ノ二層相合着シテ廣靱帶ヲナス又後腟穹窿部ニ至レル腹膜ハ再ヒ上方ニ飜リ所謂ドグラス氏窩ヲ造リ次ニ直腸ニ到達スレバ二分シテ直腸ヲ狹ミ再ヒ合シテ骨盤後壁ニ達シ之レニ沿フテ上行スヲ可シ但シ直腸ヲ狹ムノ部ハ直腸

表面ノ腹膜ト相合スルモノナリ

第二十九圖　骨盤內臟器ノ位置及ヒ腹膜經過ノ圖



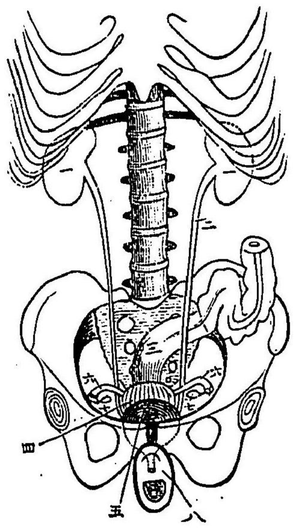
1 陰阜
2 恥骨縫際
3 小陰唇
4 大陰唇
5 尿道口
6 腟口
7 直腸
8 子宮
9 膀胱
10 小腸
11 薦骨岬
12 腹膜

膀胱

第十八章　膀胱及ビ直腸

膀胱及ビ直腸ハ生殖器ト共ニ小骨盤內ニ位スハ子宮ト恥骨縫際ノ間ニ在ル膜囊ニシテ腎臟ヨリ輸尿管ヲ經

第三十圖　骨盤內ニ於ケル生殖器尿器及ヒ腸管ノ關係ヲ示ス圖



一 腎臟
二 輸尿管
三 直腸
四 子宮
五 膀胱
六 喇叭管
七 卵巢
八 外陰部

送リ來レル尿ヲ貯藏スルノ器ナリ其空虛ナルトキハ深ク小骨盤ノ深部ニ潛ミ甚ダシク膨滿スルニ至レハ恥骨縫際ノ上方ニ挺出ス而シテ膀胱ノ盈虛ニヨリ子宮ノ位置ハ前方若クハ後方ニ移動スルモノトス

尿道

尿道　膀胱ヨリ外部ニ通スルノ道ヲ尿道トナス尿道ハ大サ畧ホ鉛筆ノ如ク三仙迷ノ長サヲ有シ膀胱ノ下部ヨリ起リ恥骨縫際ノ下緣ニ沿ヒ彎曲シテ前方ニ向ヒ前庭ニ開口ス尿道口即チ是レナリ

直腸并ニ大腸

直腸並ニ大腸　直腸ハ薦骨ト子宮及ヒ腟ノ間ニ位セル大腸ノ一部

コシテ左薦腸關節部ヨリ始マリ斜メニ薦骨ノ中線ニ近ツキ且ツ其凹面ニ沿フテ下リ尾骶骨ノ尖端ヨリ前方凡ソ三仙迷ノ部ニ開口ス此口ヲ肛門トナス又大腸トハ直腸結腸及ビ盲腸ノ三部ヲ總稱スルモノニシテ其結腸ハ右腸骨窩部ニ於テ始マリ茲ニ小腸ト連結シ下ハ盲腸ニ移行シ上ハ肝ノ下面ニ至ルマデ昇行シ此ヨリ左ニ折レテ胃ノ前下方ヲ過キ左季肋部ニ至リ下方ニ屈曲シ左薦腸關節部ニ至リ直腸トナル其大畧ハ第十三圖ニ示セリ就テ見ル可シ

第二篇　正規ノ姙娠及ビ其取扱法

第十九章　誘導篇

正規ノ姙娠及ビ其取扱法

正規ノ姙娠及ビ其取扱法ニ就キテハ初メニ姙娠トハ如何ナルモノナルヤヲ說キ次ニ母體中ニ生育セル胎兒ノ狀態ヲ述ベ母體ノ全身ニ顯ハルヽ現象ヲ講シ姙婦ノ檢査法ヲ說キ最後ニ其取扱法即チ攝生法ヲ論ズ可シ

第二十章　姙娠

姙娠

姙娠トハ婦人ノ體內ニ胎兒ヲ養成スルノ時期ヲ云フ而シテ此姙娠ハ兩性ノ交接ニヨリ男子ノ精蟲ハ婦人ノ生殖器內ニ進入シ其卵ト結合シ所謂受胎ヲ營ナムニヨリテ始マリ大畧二百八十日ヲ經過シ分娩ニ至リテ終ルモノナリ

第二十一章　受胎セル卵ノ變化

卵既ニ受胎セルトキ

卵既ニ受胎セルトキハ子宮內ニ於テ其脫落膜（子宮粘膜ノ肥厚セルモノ）中ニ

包被セラレ漸次ニ變化ヲ呈ス即チ卵内ニ數多ノ細胞ヲ生シ次ニ其細胞悉ク外壁ニ附着シ一種ノ膜トナリ更ニ此膜ノ一部ニ楕圓形ノ肥厚部ヲ生ス之レヲ胚板ト名ク此胚板ハ即チ胎兒ヲ生ズルノ原ナリ

胎兒ノ生成

胎兒ノ生成

卵内ニ生セル胚板ハ其周緣ヨリ内方ニ向テ綜屈シ以テ圓筒狀物ヲナス其圓筒ノ一端ハ稍膨大シテ頭部ヲナシ眼耳口鼻ヲ生ジ他端ハ臀部トナル而シテ胴部ノ兩側ニ於テ上部及ビ下部ヨリ突起ヲ生シ上肢ト下肢トヲナス胚板周緣ノ綜屈セル緣端ハ中央部ニ集合シ茲ニ臍部ヲ形成ス可シ卵ハ此ノ如ク變化シテ内ニ胎兒ヲ完成スルトキハ之レヲ成熟卵ト云フ

成熟卵

第二十二章　成熟卵

成熟卵トハ卵内ニ胎兒ヲ完成セルモノニシテ之レヲ區別スレハ五種アリ第一胎兒第二臍帶第三胎盤第四卵膜第五羊水是レナリ

卵膜

卵膜

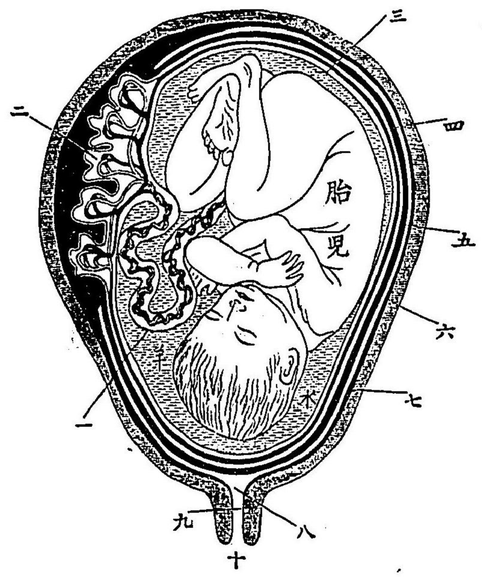
卵膜ハ薄クシテ稍紙ヨリ厚キニ過サレトモ原ト三層ヨリナレリ最内層ヲ羊膜次キヲ絨毛膜外層ヲ翻轉脫落膜ト稱ス此三層ハ互ニ密着シテ一葉ヲナシ以テ無口囊ヲ造リ内ニ羊水ヲ盛リ其水中ニ胎兒ヲ栖息セシム今卵膜各層ノ生ズル有樣ヲ述フ可シ

卵膜各層ノ生成

第三十一圖

成熟卵ノ圖

卵膜ノ三層ヲ分離シテ示ス



一　臍帶
二　胎盤
三　羊膜
四　絨毛膜
五　醜轉脫落膜
三、四、五ヲ合セテ卵膜ト云フ
六　亂脫落膜
七　子宮壁
八　子宮内口
九　子宮頸管
十　子宮外口

卵膜各層ノ生成

初メ姙娠ヲ營ムニ當リ子宮ノ粘膜ハ著シク肥厚

シテ恰モ天鵞絨ノ觀チナス之レヲ脱落膜ト云フ此膜ノ一部ニ卵ノ附着スルトキハ附着部ノ周圍ニ於テ脱落膜著シク增息突起シ終ニ卵ヲ包被スルニ至ル之レヲ轉脱落膜ト云フ又轉脱落膜ニ對シ其他ノ脱落膜ヲ眞脱落膜ト唱ヒ胎盤附着部ノ膜ヲ特ニ床狀脱落膜ト名ク絨毛膜ハ卵ノ透明層ヨリ生シ初メ其膜ノ全外面ニ絨毛ヲ現ハシ以テ營養物ヲ周圍ヨリ取ルノ用ヲナスモ後ニハ胎盤部ヲ除クノ外漸次ニ其絨毛ヲ消失スルモノナリ羊膜ハ胚板周圍ノ膜ヨリ成レルモノニシテ臍帶ヲ包被シ胎兒外皮ノ一系ヲナスモノナリ

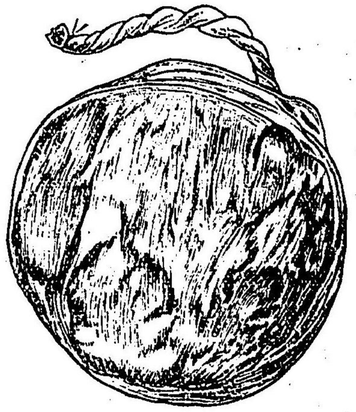
胎盤

胎盤 ハ扁平圓形ナル海綿狀物ニシテ青赤色ヲ帶ブ姙娠ノ末期ニ至レバ廣サ凡ソ十六仙迷厚サ凡ソ三仙迷重サ凡ソ五百瓦アリ通常ハ子宮體ノ前壁若シクハ後壁ニ附着シ其附着面ハ凹凸不平ニシテ襤褸狀ヲ呈シ以テ子宮壁ノ不平面ト嵌合密着ス又胎兒ニ對スル一面ハ平滑ニシテ羊膜ヲ被ムリ數多ノ血管ヲ現ハシ中央ニ臍帶ヲ附着セシム

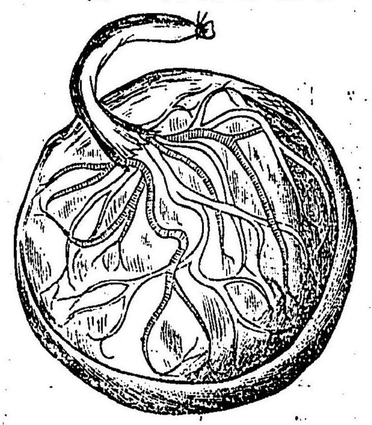
胎盤ノ効用

胎盤ノ効用 胎盤ハ胎兒ト母體トノ血液成分ノ交換ヲ媒スルモノニシテ胎兒ハ之レニヨリ身體ノ老敗物(炭酸尿素等)ヲ母體血中ニ送リ更ニ營養物(酸素蛋白質糖分鹽類水等)ヲ母體ヨリ攝取ス此故ニ胎盤ハ大人ニ於ケル肺(主ニ酸素ヲ取リ炭酸ヲ排泄スルモノナリ)及ヒ胃腸ノ用ヲ兼有スルモノニシテ極メテ緊要ノ器ナリ之レニヨリテ胎盤若シ子宮壁ヨリ剝離スルトキハ胎兒ハ直ニ死ニ陷ルモノトス

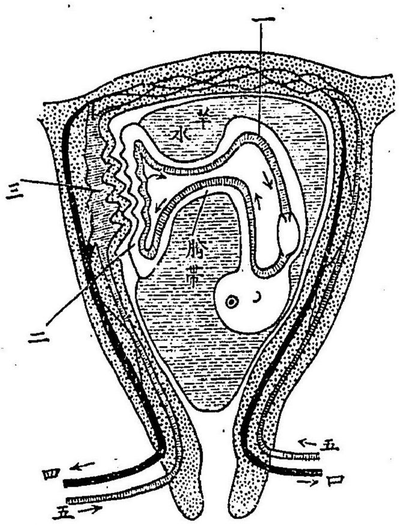
第三十二圖
胎盤子宮面ノ圖



第三十三圖
胎盤胎兒面ノ圖



第三十四圖



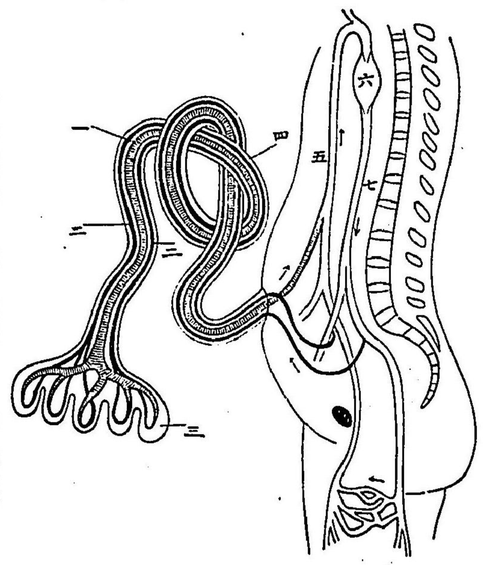
一　胎兒ノ血管　四　靜脈
二　胎盤　五　動脈
三　子宮血管ノ膨大セルモノ

子宮壁及ビ胎盤ノ兩不平面互ニ嵌合シ胎兒ノ血液ト子宮ノ血液ト相接觸スルヲ示スノ假想圖

臍帶

ハ長サ五十仙迷大サ小指ニ均レク臍帶鞘ワルトン氏酸肉二條ノ臍動脈一條ノ臍靜脈ヨリナル胎兒ノ子宮內ニ生活スルノ間ハ臍帶動脈ニヨリテ絕エス搏動ヲ現ハス又子宮內ニ於テ臍帶ハ著シク綣曲スルカ故ニ胎兒ノ手足頸等ニ纏絡スルコトアリ又　ワルトン氏酸肉ノ堆積血管ノ屈曲ニヨリテ假結節ヲ現ハシ或ハ自ラ結バリテ眞結節ヲ生

第三十五圖



一　臍帶靜脈　四　眞結節
二　臍帶動脈　五　大靜脈
三　胎盤　六　心臟

臍帶動脈靜脈ノ經路並ニ眞結節ヲ示スノ假想圖

ニ一條ノ臍靜脈トナリ臍ニ入リテ胎兒腹內ノ大靜脈ニ連ナリ以テ新鮮ズ臍帶ハ胎兒ノ臍ヨリスレバ右ヨリ左ニ向ヒテ轉振シ索狀ヲ呈ス臍帶ノ附着部ハ通例胎盤ノ中央ナレトモ時トシテハ其邊緣ニ抵止スルコトアリ

臍帶動脈及ビ靜脈

二條ノ臍動脈ハ胎兒下腹ノ動脈ヨリ起リ臍ヲ出デヽ胎盤ニ達シ漸次ニ樹枝狀ニ分岐シ毛細管トナリ次テ母體ノ血管ニ密接シ是レヨリ漸次ニ集合シ終

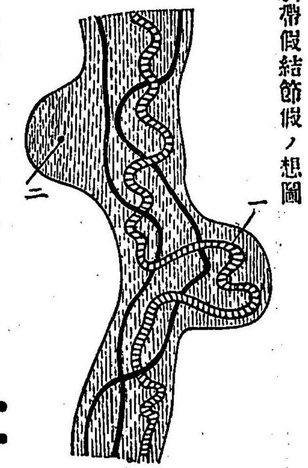
臍帶ヲ壓迫スルトキ

羊水井ニ假羊水

後産

第三十六圖

臍帶假結節假ノ想圖



一　血管ノ屈曲ニヨルモノ

二　ワルトン氏酸肉ノ堆積ニヨルモノ

羊水井ニ假羊水

羊水ハ又胎水ト稱シ始メハ清澄ナレ𪜈後漸ク混濁シ妊娠ノ終リニ至レバ五百乃至一千瓦アリ此液ノ作用ハ(一)胎兒ノ栖息ス可キ腔間ヲ造リ(二)衝突打撲等ノ如キ外來ノ害力ヲ防キ(三)分娩時ニ産道ヲ開大シ且ツ其漏泄ニヨリ産道内ヲ滑澤ニスルニ在リ――時トシテ羊膜ト絨毛膜ノ間又ハ絨毛膜ト黴轉脱落膜ノ間ニ液ヲ蓄フルコトアリ分娩ノ際羊水ニ先ダチテ流溢ス之レヲ假羊水ト云フ

後産

トハ胎盤臍帶及ビ卵膜ノ三者ヲ總稱スルモノナリ此三者ハ胎兒分娩ノ後チニ産出スルヲ以テ名ク

ノ血液ヲ兒體ニ供給スルモノナリ

臍帶ヲ壓迫スルトキ

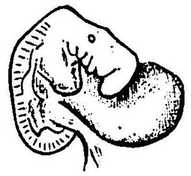
ハ血行全ク廢止シ五分間以上ヲ經レハ胎兒ハ死ニ歸スルモノナリ

第一月末　第三十七圖　妊娠十二乃至十三日ヲ經タル人卵ノ圖自然大

第二月末　妊娠第二十一日ヲ經タル胎兒ノ圖五倍大

第三月末　第三十八圖

(甲)



(乙)

(丙)

同上卵膜内ニ在ルモノ自然大

第五月末

第廿三章　胎兒各月ノ徵候

第一月末

ニハ身長凡ソ一仙迷全卵ハ鳩卵大ナリ

第二月末

ニハ身長凡ソ四仙迷四肢ニ關節ヲ生シ明カニ人體ノ形ヲ認ム可ク全卵ハ雞卵大ニ至ル

第三月末

ニハ身長凡ソ九仙迷手指ト足趾トヲ區別ス可ク全卵ハ鵞卵大ニ至ル

第四月末

ニハ身長凡ソ十六仙迷外陰部ニハ男女ヲ區別ス可ク皮膚ニ毳毛ヲ生ズ

第五月末

ニハ身長凡ソ二十五仙迷頭髮ヲ生シ始メテ心音ヲ聽ク

第六月末　姙娠二十八日ヲ經タル胎兒ノ圖五倍大

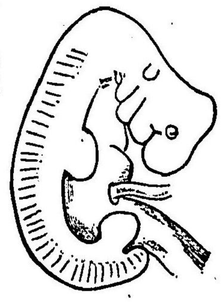
第七月末　同自然大

第八月末　同卵膜内ニ在ルモノ自然大

第九月末

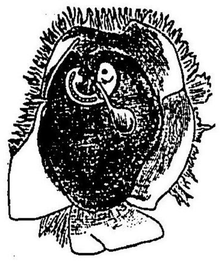
第三十九圖

(甲)



(乙)

(丙)



可シ

第六月末　ニハ身長凡ソ三十仙迷眼裂開ク

第七月末　ニハ身長凡ソ三十五仙迷顔ハ皺襞アリテ老人ノ如シ産出スレバ啼ク凡ソ滿七月以後ニ産出セルモノハ生活シ得ベキ者ナレトモ甚タ虚弱ナルガ爲メニ大抵死亡スルヲ免レズ又時トシテハ全ク哺乳シ得ザルモノアリ

第八月末　ニハ身長凡ソ四十仙迷ヲ有ス

第九月末　ニハ身長凡ソ四十五仙迷脂肪發生シテ頗ル肥ユ

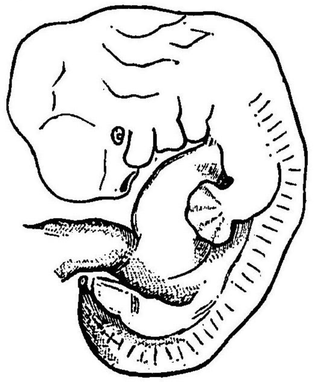
第十月末　ニハ身長凡ソ五十仙迷發育完成シ毳毛消失シ爪ハ稍指趾ノ端ヲ出ヅ成熟胎兒即チ是レナリ尚ホ第二十三章及ビ第二十四章ニ詳論ス可シ

以上姙娠ノ月

以上姙娠ノ月ハ通常ト異ニシテ四週間即チ二十八日ヲ以テ一ケ月トス是レ姙娠ノ持續日數ナル二百八十日ヲ十ケ月ト看做スニヨル

第四十圖

(甲)



姙娠第三十三日ヲ經タル胎兒ノ圖五倍大

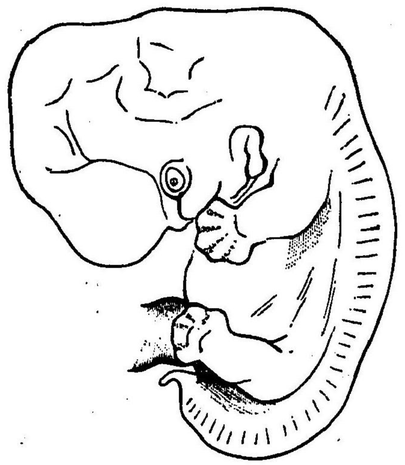
(乙)

同　自然大

第四十一圖

姙娠四十二日即チ六週ヲ經タル胎兒ノ圖　五倍大

(甲)



(乙)

同　自然大

又胎兒ノ身長

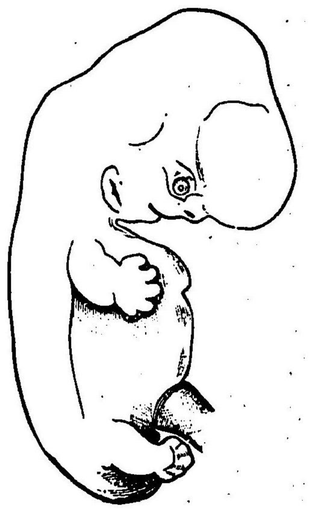
又胎兒ノ身長

ハ原ト西洋人ニ就キテ論ゼルモノナリ日本人ハ一般ニ短小ナルカ故ニ凡ソ一割以下半割ノ長サヲ減スルヲ佳トス而シテ以上記セシ身長ハ大畧ヲ示セルモノニシテ偏ニ記憶ニ便ナラシメンカ

第四十二圖

姙娠四十九日即チ七週ヲ經タル胎兒ノ圖　四倍大

(甲)



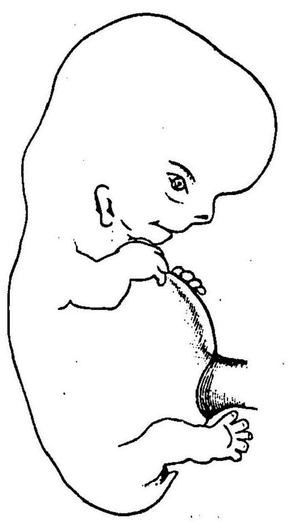
(乙)

同　自然大

第四十三圖

姙娠五十六日即チ八週ヲ經タル胎兒ノ圖　三倍大

(甲)



(乙)

同　自然大

爲メ次ノ表ニ基ツキテ定メタルモノトス

月數	身長(仙迷)
一	1×1=1
二	2×2=4
三	3×3=9
四	4×4=16
五	5×5=25
六	6×5=30
七	7×5=35
八	8×5=40
九	9×5=45
十	10×5=50

右第五ケ月迄ハ各々月數ヲ自乘シ第六ケ月以後ハ其月數ニ常ニ五ヲ乘ジタルモノナリ

成熟胎兒

第廿四章　成熟胎兒

成熟胎兒トハ十ケ月即チ二百八十日ヲ經タルモノヲ云フ其身長凡ソ五十仙迷(凡ソ一尺六寸六分)體重凡ソ三千瓦(大凡ソ七百五十匁)肩胛ノ廣サ凡ソ十二仙迷腰部ノ廣徑凡ソ十仙迷身體頗ル肥ユ產出スレバ高聲ヲ放チテ啼ク且ツ尿ヲ泄シ暫クニシテ暗褐色ノ胎屎ヲ排泄ス可シ又胎兒ノ皮上ニハ多量ノ白色ナル脂肪ヲ附着セシム之レヲ胎兒皮垢ト云フ即チ剝脫セル上皮ト皮脂腺ノ分泌物トヨリナレリ其他成熟胎兒ノ毛髮ハ三仙迷ノ長サヲ有シ爪甲ハ稍指趾ノ端ヲ出ヅ

成熟胎兒ノ頭蓋

第廿五章　成熟胎兒ノ頭蓋

成熟胎兒ノ頭蓋ハ分娩ニ緊要ノ關係アルヲ以テ之レヲ詳說セザル可ラズ今次ニ之レヲ論ス可シ胎兒ノ頭ハ縫合未ダ閉鎖セズ且ツ諸縫合ノ連接部ニ顚門ヲ現ハシ以テ分娩ノ際ニ骨絲重積シ頭蓋ノ容積ヲ縮小スルノ作用ヲ營ム之レヲ甚ダ緊要ノ件ナリ又胎兒ノ前頭骨ハ大人ト異ニシテ左右二個ヨリナルモノトス

縫合及ビ顚門

縫合及ビ顚門

胎兒ノ頭蓋ニ於テ兩前頭骨間ニ前頭縫合兩顱頂骨間ニ矢狀縫合兩前頭骨ト兩顱頂骨ノ間ニ冠處縫合兩顱頂骨ト後頭骨ノ間ニ三角縫合ヲ現ハス又諸縫合間ニ顚門ヲ形成ス

大顚門

大顚門

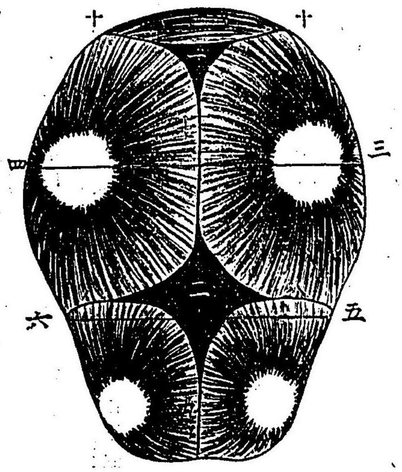
冠處縫合ト矢狀縫合及ビ前頭縫合トノ十字形ニ交叉スル處ニ在リテ菱形ヲナシ生產後長ク閉合セズシテ搏動ヲ現ハスモノナ

小顏門

小顏門

ハ矢狀縫合ト三角縫合ノ接合スル所ニシテ三角形ヲ呈ス其他頭蓋ノ側部ニ數箇ノ顏門アレトモ敢テ緊要ナラス

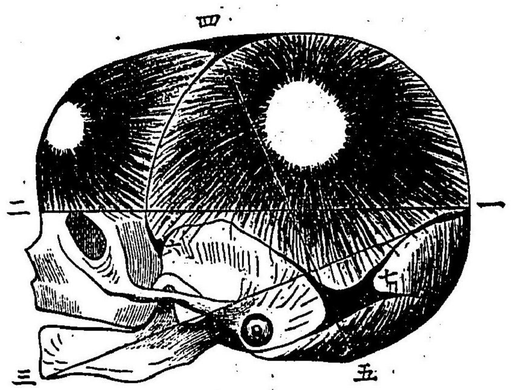
第四十四圖　成熟胎兒頭蓋頂面ノ圖



一　小顏門
二　大顏門
三、四　大橫徑線
五、六　小橫徑線
七　矢狀縫合
八、八　冠狀縫合
九　前頭縫合
十、十　三角縫合

兒頭ノ徑線

第四十五圖　成熟胎兒頭蓋側面ノ圖



一、二　直徑線（十二仙迷）
一、三　大斜徑線（十三、五仙迷）
四、五　小斜徑線（九、五仙迷）
四　大顏門
六　前側顏門
七　後側顏門

兒頭ノ徑線

ニ數種アリ眉間及ビ後頭結節間ヲ直徑線兩顳頂結節間ヲ大橫徑線兩顳顬部間ヲ小橫徑線直徑ニ沿フテ頭蓋ヲ一周セルヲ頭

蓋周圍徑頤部及ビ後頭結節間ヲ大斜徑線項窩及ビ大顏門間ヲ小斜徑線ト稱ス就中緊要ナルモノヲ左ニ示ス

直徑線　十二仙迷

大橫徑線　九、五仙迷

頭蓋周圍徑　三十四仙迷

最小及ヒ最大ナル兒頭ノ周圍徑

最小及ヒ最大ナル兒頭ノ周圍徑

頭蓋ノ最小ナル周徑ハ小斜徑線ニ於ケル周圍徑ニシテ三十二仙迷ヲ有シ最大ナルハ大斜徑線ノ周圍徑ニシテ三十六仙迷ナリ正規ノ分娩ニ於テハ最小ナル周圍徑ヲ以テ骨盤內ヲ通過スルモノナリ若シ大ナル周徑ニ就キテ骨盤內ニ進入スルトキハ其分娩容易ナラザルモノトス

第廿六章　胎兒ノ子宮內ニ於ケル狀態

胎兒ノ子宮內ニ在ヤ三種ノ狀態ヲ區別ス可シ一、胎位二、胎向三、胎勢是レナリ

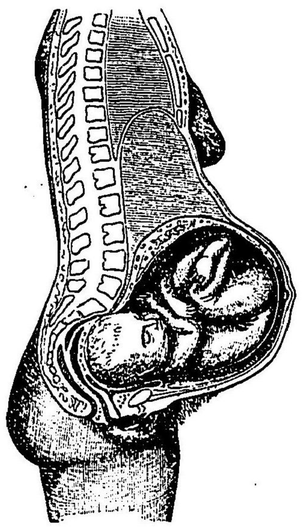
一、胎位

子宮內ニ於ケル胎兒縱ニ位スルトキハ之レヲ縱位ト云ヒ橫

ニ在ルトキハ橫位ト名ク縱位ハ通常ノ位置ニシテ橫位ハ異常ニ屬ス其橫位ノ數ハ凡ソ全胎位ノ一%以下ナリトス

第四十六圖

姙娠末期ニ於ケル姙婦ノ矢狀斷面ノ圖



胎兒ハ第一頭蓋位ニシテ正規ノ體勢ナルヲ示ス

二、胎向

二、胎向

トハ胎兒ノ背ノ向フ所ヲ以テ之レヲ名ク即チ胎兒ノ背母體ノ左ニ向フトキハ第一胎向トナシ右ニ對スルトキハ第二胎向ト稱ス第一胎向ハ第二胎向ヨリモ多シトス

三、胎勢

三、胎勢

トハ胎兒身體ノ姿勢ヲ云フ通常ノ胎勢ハ背ヲ屈シ頤ヲ胸上ニ着ケ四肢ヲ屈曲シテ胸腹ノ前面ニ集メ左右ノ前膊及ヒ左右ノ下腿ハ各交叉シ臍帶ハ腹部ノ前面ニ於テ四肢ノ間ニ繞廻ス可シ若シ或ハ手足又ハ頸ヲ伸展シ若クハ四肢ニ臍帶ノ纏絡スルガ如キモノハ之レヲ異常胎勢トナス

胎位胎向及ビ胎勢ノ變化

胎位胎向及ビ胎勢ノ變化

ノニシテ縱位ハ横位トナリ第一胎向ハ第二胎向トナルカ如ク時々其狀態ヲ改ムルコトアリ殊ニ胎兒小ナルカ又ハ子宮腔大ナルトキハ其變化スルコト益著シキモノトス此理ニヨリ經產婦ハ腹腔濶大ニシテ且ツ子宮壁ノ弛緩セルガ爲メ初姙婦ニ於ケルヨリモ胎位胎向胎勢ノ變更ヲ現ハスコト多シトス就中胎向ノ變化ハ甚ダ容易ナルモノニシテ第一第二

ノ胎向ハ屢々互ニ相交換スルヲ見ル可シ

第廿七章　胎兒ノ生理

胎兒ノ營養

胎兒ノ營養

卵ハ始メ二三ケ月間ハ營養物ヲ絨毛膜ニヨリテ子宮壁ヨリ取リ爾後ハ胎盤ニヨリテ物質ノ交換ヲ營ムモノナリ即チ胎兒ノ血液ハ臍帶動脈ヨリ毛細管ニ至リ胎盤中ヲ循環スルニ當リ酸素蛋白質鹽類等ハ母體ノ血管ヨリ兒ノ血中ニ入リ之レニ反シ炭酸其他ノ老敗物ハ兒體ノ血管ヨリ母ノ血中ニ謝出シ以テ胎兒ノ生活ヲ保續セシム此故ニ臍帶ノ血行一タビ壓止セラレ五分間以上ニ亘タルトキハ胎兒ハ死ニ歸スルモノトス母體ノ死亡セルトキモ亦之レト異ナルコトナシ

無呼吸及ビ早時呼吸

無呼吸及ビ早時呼吸

胎兒子宮内ニ在リテ胎盤ニヨリ完全ノ物質交換ヲ爲シ以テ呼吸ヲ營マザルヲ無呼吸ト稱ス今若シ或ハ臍帶ノ血行又ハ子宮質中ノ血行不良トナルトキハ酸素欠亡シ炭酸ノ過剩トナルカ爲メニ胎兒ハ無呼吸ヲ保續スルヿ能ハスシテ既ニ子宮内ニ於テ呼吸作用ヲ發シ以テ羊水血液等ヲ吸入ス此呼吸ヲ早時呼吸ト名ク此ノ如キ

迅速ニ母體死亡スルトキ

胎兒ハ假死ニ陷リ其假死ノ時間久シキトキハ眞死ニ歸スルモノナリ

速迅ニ母體死亡スルトキ

ハ胎兒モ亦タ共ニ死スルヿ上述ノ如シト雖モ胎兒ハ稍々遲シ絶命スルヿ常トス

胎兒ノ心臟

胎兒ノ心臟

ハ第五ケ月ヨリ其搏動ヲ聽取ス可シ其數男女ニヨリテ差異アレトモ凡ソ百四十搏ヲ算ス可シ而シテ胎兒自己ノ運動母體ノ體溫亢進等ニヨリテ心動增進シ假死ニ陷ラントスルノ際ハ一タヒ著シク減小シ最後ニ至レハ疾數且ツ不正トナルモノナリ

第廿八章　妊婦ノ生殖器系ニ現ハルヽ變狀

子宮

子宮

ハ若年ノ婦人ニ在リテハ長徑凡ソ七仙迷ナレトモ雌娠中漸次ニ增大シ其末期ニ至レハ長徑凡ソ二十五仙迷ニ達シ其容積ハ凡ソ五百倍ニ至ル而シテ子宮ノ位置ハ始メ一二ケ月間ハ深ク骨盤內ニ下降シ後チ漸次ニ上昇シ第四ケ月ニ至レハ大骨盤內ニ出ツ又子宮口ハ雌娠ノ末期ニ及ヘハ後上方ニ退キ薦骨岬ニ近接ス

子宮粘膜

子宮粘膜

ハ卵ノ受胎スルニ及ヒ著シク肥厚シ脫落膜トナリ其一部ハ殊ニ增息シ飜轉セルガ如キ狀チナシテ卵チ包被ス飜轉脫落膜之レナリ脫落膜ハ分娩ノ際其質中ヨリ分離シ剝脫ス可シ是レ脫落膜ノ名アル所以ナリ

膣及ビ外陰部

膣及ビ外陰部

ハ著シク弛緩シ內腔濶大トナリ分泌增進シ其液ハ帶青白色チナス又前庭膣壁子宮膣部ハ變色シテ帶青赤色ヲ呈ス大陰唇ハ時トシテ靜脈ノ怒張ヲ生ズルコトアリ

子宮ノ周圍部

子宮ノ周圍部

ハ子宮ノ增大スルニ隨ヒ壓迫セラレ種々ノ變常ヲ呈ス即チ膀胱ニハ尿意頻數トナリ直腸ニ於テハ便秘ヲ發シ血管ヲ壓迫スレハ大陰唇下肢等ニ浮腫若シハ靜脈ノ怒張ヲ致シ神經ノ壓迫セラルヽトキハ下肢ノ麻痺ヲ生ズ

月經

月經

ハ雌娠中閉止スルヲ常トス然レトモ稀ニハ初メ數月間尙ホ月經ヲ現ハスコトアリ其他雌娠中月經ニアラザル出血ヲ見ルコトナキニアラズ

乳房

乳房

ハ漸次ニ增大シ柔軟トナリ乳暈ハ赤色乃至黑褐色ヲ呈シ稀薄

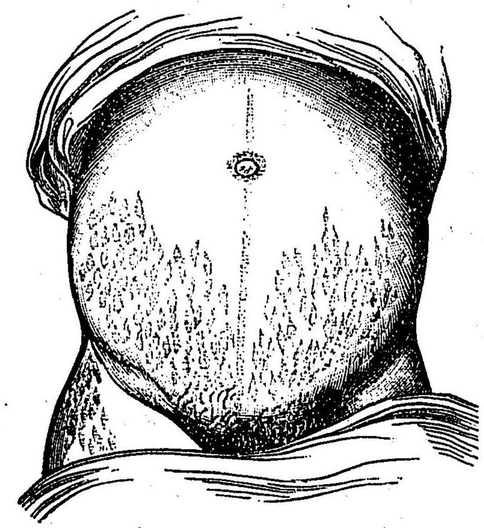
ノ乳汁ヲ分泌ス之レヲ初乳ト云フ

第廿九章　姙婦ノ自餘ノ身體ニ現ハルヽ變狀

姙娠ハ通例疾病ニアラズト雖トモ種々ノ異狀ヲ現ハスモノトス而シテ異狀ノ甚ダシカラザルモノハ固ヨリ生理的ニ屬セシム可キモノナリ即チ次ノ如シ

神經系　ニ於テ頭痛・齒痛・腰痛・關節痛ヲ發シ時トシテハ卒倒スルコトアリ其他精神變調シ或ハ哀ミ或ハ爽快ヲ感ズルモノアリ

第四十七圖　姙娠線ノ圖



消化器系　ニハ惡心・嘔吐・早朝空腹時ノ嘔吐・便秘・食物嗜好ノ變換ヲ現ハシ時トシテハ灰炭白墨等ヲ嗜ミ食スルモノアリ

皮膚　ハ色素ノ沈着ヲ生ジ乳房生殖器白條ノ部位ニ褐色ヲ現ハシ顏面ニ於テハ眼圍・鼻背等ニ之レヲ生ズ又腹部ノ膨大・乳房ノ腫脹ニヨリテ其部ノ皮膚緊張シ爲メニ乳房・腹壁ノ前面等ニ於テ皮膚ノ質中ニ裂線ヲ生シ皮面ニ帶赤色ノ線條ヲ呈ス之レヲ姙娠線ト云フ姙娠線ハ分娩後白色ニ變シ永ク遺殘スルモノナリ其他青年ノ婦女ハ强度ナル脂肪ノ發育ニヨリ臀部・大腿等ニ姙娠線ト同一ノ線條ヲ現ハスモノナリ

血行器　ニ於テハ血液ノ頭部・胸部等ニ輻湊スルニヨリテ眩暈・胸內苦悶・心悸・亢進・衄血等ヲ致ス

全體ノ形狀　ハ腹部ノ强ク前方ニ突出スルガ爲メニ上體ヲ後方ニ反張セシム

臍窩　ハ漸次ニ淺クナリ姙娠ノ末期ニ至レバ多クハ胞狀ヲナシテ突出スルニ至ル

概略ノ算定

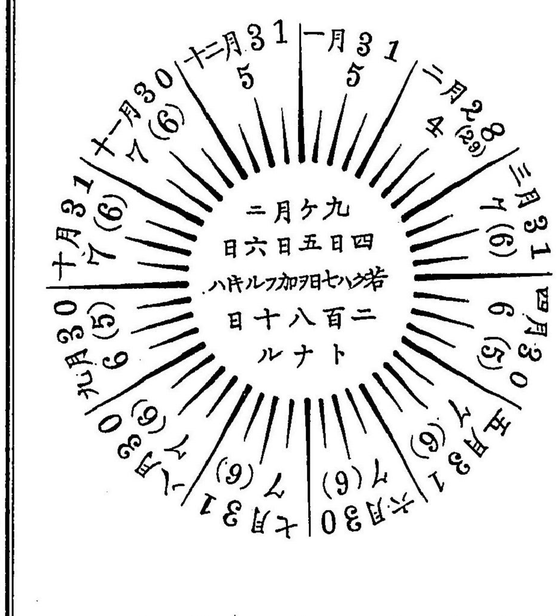
第三十章　分娩時算定法

概略ノ算定

姙娠ノ發起ハ終末月經ノ第一日ヨリ算ス可キモノニシテ其持續ハ平均二百八十日（短キハ二百四十日長キハ三百二十日）ヲ常トス故ニ分娩ノ期日ヲ概算スルニハ終末月經ノ第一日ヨリ三ケ月ヲ減ジ之レニ七日ヲ加フルヲ法トス今十二月ノ一日ニ終末月經ヲ見タリトスレバ之レヨリ三ケ月ヲ減シ九月一日ヲ得更ニ七日ヲ加フレバ九月八日トナル即チ翌年ノ九月八日ニ

第四十八圖

分娩日測算暦ノ圖



稍々精密ナル算定

分娩スルモノト概知ス可シ

稍々精密ナル算定

上法ノ如クスルモ月ノ大小等ニヨリ精密ニ第二百八十日ヲ知リ難キヲ以テ第四十八圖分娩日測算暦ニヨリ之レヲ算定スルモ亦可ナリ即チ此圖ニヨリ分娩日ヲ算出セントセバ終末月經ノ月ヨリ左方ニ三ケ月ヲ算ヘ各月ノ下ニ記セル數字ヲ月經日ニ加フ可キモノトス括弧内ニ記セルモノハ閏年ニ用ユルモノナリ今十二月一日ヲ終末月經ノ第一日トスレバ左方ニ三ケ月ヲ算ヘ九月ヲ得其一日ニ六日ヲ加ヘ九月七日トナル（閏年ニ在リテ九月六日ナリ）即チ終末月經ノ第一日ヨリ二百八十日ニ精當スルモノナリ

初メテ胎動ヲ發スルヨリ分娩ニ至ルノ時日

初メテ胎動ヲ發スルヨリ分娩ニ至ルノ時日

初メテ胎動ヲ發スルハ凡ソ第二十週ニ在ルヲ以テ姙婦ノ始メテ胎動ヲ感セシ日ニ二十週ヲ加ヘテ分娩期日トナスノ法アリ然レトモ胎動ヲ感スルハ確實ナラザルガ故ニ此法ヲ實際ニ適用ス可ラズ

子宮底ノ下降セルヨリ分娩ニ至ルノ時日

子宮底ノ下降セルヨリ分娩ニ至ルノ時日

以上ノ他分娩前

四週日ヨリ子宮底ハ下降ス可シト雖トモ此モ亦測定法ニ應用シ得ベキモノニアラズ

第卅一章　姙娠ノ徴候

婦人姙娠スレバ一定ノ徴候ヲ發スト雖トモ其徴候ニハ不確實ナルモノ疑ハシキモノ及ビ確實ナルモノヽ三種アリ

婦人姙娠スレバ

(一)不確實ナル徴候

ハ第廿八章ニ說述セルガ如ク神經系ニ發スル變狀(頭痛精神ノ變調等)消化器系ノ變狀(惡心嘔吐便秘等)其他血行器泌尿器等ニ發スル變狀之レニ屬ス

不確實ナル徴候

(二)疑ハシキ徴候

ハ生殖器ニ發スル變狀ニシテ(甲)月經ノ閉止(乙)子宮增大シ圓形ニシテ柔軟トナル(丙)前庭腟壁子宮腟部等ニ帶青赤色ヲ現ハスヿ(丁)乳房ハ腫張シ着色ヲ呈スルヿ是レナリ此等ノ徴候ハ姙娠ノ重要ナル徴候ニ屬スレトモ各姙婦之レヲ現ハスノ度ニ輕重アルト他ノ子宮諸病ニ於テモ亦之レヲ發スルコトアルガ故ニ此徴候ノミヲ以テハ未タ極メテ確實ニ姙娠ナルコトヲ診斷シ得サルモノトス

疑ハシキ徴候

(三)確實ナル徴候

ハ胎兒ニ屬スルモノニシテ(甲)胎兒ノ心音及ビ臍帶雜音(乙)胎動(丙)甚タ明カニ胎兒ノ體部ヲ觸知スルコト是レナリ此等ノ諸徴ハ第五ケ月以後ニ至リ始メテ現ハルヽモノナルガ故ニ五ケ月以前ニ在リテハ姙娠ノ極メテ確實ナル診斷ヲ下スコト能ハサルヲ通規トナス而シテ此等ノ諸徴ハ姙婦之レヲ自覺セルモノニアラスシテ外方ヨリ確カニ認知セルモノナラサル可ラズ否ラサレバ到底誤リヲ免ル可ラズ」

確實ナル徴候

第卅二章　姙娠毎月ノ徴候

姙婦ノ自ラ姙娠第何ケ月ト稱スルハ往々正シカラザルヿアリ又時トシテハ自ラ求メテ虛言スルコトアリ故ニ之レヲ確ムル爲メニ檢査ヲ施コスヲ緊要ナリトス初姙婦ノ姙娠各月ヲ鑑定ス可キ徴候ハ左ノ如シ

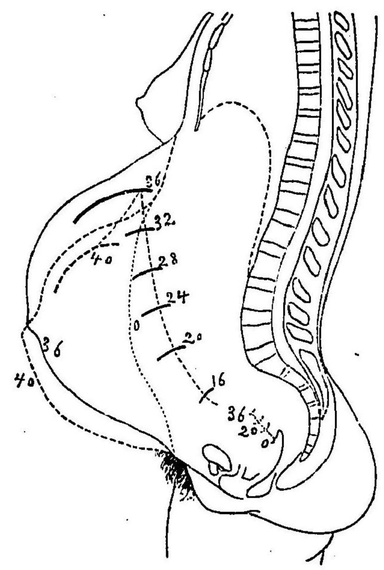
姙婦ノ自ラ姙娠第何ケ月ト稱スルハ

姙娠第一月末

ニ於テハ熟練ナル檢査ニヨルトキハ子宮體ノ稍柔軟トナレルヲ見ル可シ子宮ノ大サハ幾分カ增加ス可シト雖モ月經時ノ腫大ト區別シ得サルモノトス

姙娠第一月末

第四十九圖　姙娠各月ノ子宮位置ノ圖



數字ハ各週ヲ顯ハス，骨盤内ニ於ケル0乃至36ハ子宮腟部ノ週ヲ逐フテ上昇シ二十週若クハ三十六週ニ於ケル所在ヲ示シ腹腔内ノ16乃至36ハ子宮底ノ十六週若クハ三十六週ノ所在ヲ表ス點線ハ第四十週ノ位置ヲ示ス臍ノ内方0符ハ通常ノ臍部ヲ表ス

姙娠第二月末　妊娠第二月末ニ至レバ子宮ハ漸次ニ柔軟トナリ鶏卵大ニ至ル

姙娠第三月末　妊娠第三月末ニ於テハ精シク檢査スレバ屢々姙婦ノ下腹少シク凸出スルヲ認メ子宮ハ兒頭大ニ達シ殆ンド小骨盤内ヲ充タシ腟ノ前穹窿部ヨリ容易ニ觸レ得ベシ而シテ乳房ハ稍々充滿緊張ス

姙娠第四月末　妊娠第四月末ニ在リテハ子宮ハ全ク骨盤内ヲ充タシ子宮底ハ恥骨縫際ノ直上ニ於テ球形ヲナシ觸ルヽヲ得ベシ聽診ニヨリ子宮血管ノ雜音ヲ認識ス可シ

姙娠第五月末　妊娠第五月末ニ於テ子宮底ハ殆ンド臍ト恥骨縫際トノ間(精シク云ヘバ臍下二指横徑ノ部)ニアリ姙婦ハ此月末ヨリ胎動ヲ感シ外檢査ニヨリ胎兒ノ心臟音ヲ聞ク可シ

姙娠第六月末　妊娠第六月末ニ至レバ子宮底ハ凡ソ臍ノ高サニ在リ胎兒ノ體部ヲ觸知ス可シ

姙娠第七月末　妊娠第七月末ニ至レバ子宮底ハ臍上二指横徑ノ部ニ上リ下腹ハ膨大シテ姙娠線ヲ現ハス

姙娠第八月末　妊娠第八月末ニ於テハ子宮底ハ臍ト劒狀突起ノ中間ニ達シ臍窩ハ全ク平坦トナル

姙娠第九月末　妊娠第九月末ニ在リテハ其子宮底全ク胃窩ニ上リ底ノ中央部ハ殆ント劒狀突起ニ達シ側部ハ全ク肋骨弓ニ接シ全腹至ル所緊滿ス

姙娠第十月末　妊娠第十月末ニハ子宮底ハ下降シテ終ニ第八ケ月末ノ位置ニ至

リ姙婦ハ呼吸ノ輕易トナルヲ覺ユ陰部ハ著シク弛緩ス膀胱直腸ハ壓迫セラルヽニヨリ姙婦ハ二便頻數ノ感ヲ生シ又子宮ノ收縮ヲ自覺ス可シ

第八月末ト第十月末ノ區別

第八月末ト第十月末ノ區別

第十月末ト第八月末トハ子宮底同一ノ高サニ在レトモ其區別ス可キモノハ次ノ如シ但シ初姙婦ニ就キテ之レヲ云フ

第八月末

一、胃部ノ腹壁頗ル緊滿ス
二、臍窩ハ平坦トナル
三、兒頭ハ骨盤入口ノ上ニ運動ス
四、子宮腟部ハ尚ホ一指節ノ長サヲ有ス

第十月末

一、胃部ノ腹壁弛緩ス
二、臍窩ハ突出ス
三、兒頭ハ骨盤入口内ニ固定ス
四、子宮腟部ハ楔狀ヲナシ僅カニ觸レ若クハ觸レ能ハズ

經產婦其他ニ於ケル種々ノ異狀

經產婦其他ニ於ケル種々ノ異狀

以上姙娠毎月ノ徴候ハ初姙婦ニ就キ說述シタル所ナレトモ經產婦ニ在リテハ腹壁既ニ弛緩セルガ故ニ子宮底ハ正シク上方ニ昇ルコトナク主トシテ前方ニ挺出ス可シ其甚タシク前方ニ挺出スルモノハ腹壁狀ヲナシテ下垂スルニ至ルノ之レヲ懸垂腹ト云フ又兒頭モ分娩ニ至ルマデ全ク骨盤内ニ固定セスシテ移動シ易キモノトス其他子宮腟部モ全ク消失スルコトナク且ツ子宮外口ハ頗ル哆開ス可シ又初姙婦ニ在リテモ羊水多量ナルカ胎兒大ナルカ若クハ雙胎ナルトキハ子宮底ハ過度ニ上昇シ正規ニ從フモノニアラズ

檢査ノ順序

第卅三章　姙婦ノ檢査

檢査ノ順序　姙婦ヲ診察スルニハ先ツ次ノ順序ニヨリテ問診シ而シテ後チ檢査ニ及ボス可キモノトス

1. 姓名年齡及ビ職業
2. 既往ノ疾病ノ有無
3. 月經開始ノ年齡月經ノ順不順及ビ其日數
4. 既往ノ姙娠ノ有無
5. 該回終末月經ノ期日

檢査法ノ區別

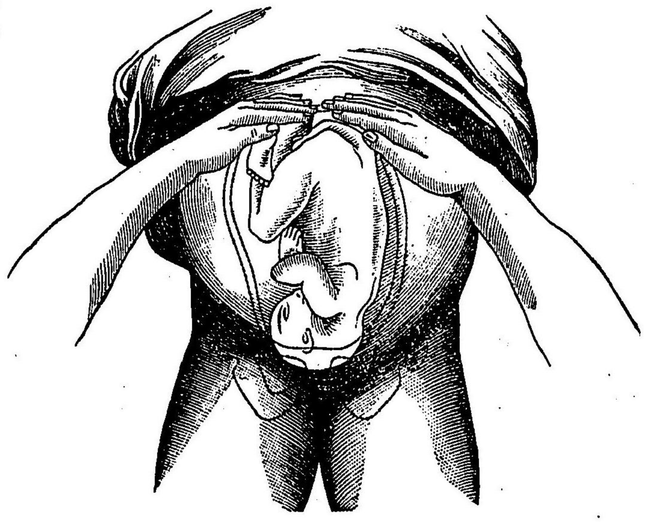
檢査法ノ區別

檢査法ノ區別　姙婦ヲ診スルニ三ツノ檢査法アリ外檢査法內檢査法雙合檢査法是レナリ之レヲ次章ニ詳說ス可シ

外檢査ノ區別

一般ノ檢査

第五十圖　兩手ヲ上腹部ニ抵テ子宮底ヲ觸診スルノ圖



第卅四章　外檢査法

外檢査ノ區別

身體ノ外部ニ就キ檢査スルヲ外檢査法トナス之レヲ區別シテ(甲)一般ノ檢査(乙)腹部ノ檢査(丙)骨盤及ビ足部ノ檢査(丁)腹部ノ聽診法(戊)外陰部視診ノ五種トナス即チ次ノ如シ

(甲)一般ノ檢査

既ニ問診ヲ終ラバ姙婦ノ體格營養ノ良否

腹部檢査

第五十一圖　兩手ヲ子宮ノ兩側ニ抵テ觸診スルノ圖

小臍窩ノ狀態ヲ知リ次ニ豫メ溫メタル兩手ヲ用ヒテ檢査ス可シ即チ檢者ハ姙婦ノ一側ニ座シ始メ兩手掌ヲ上腹部ニ抵テ子宮底ノ位置及ビ其

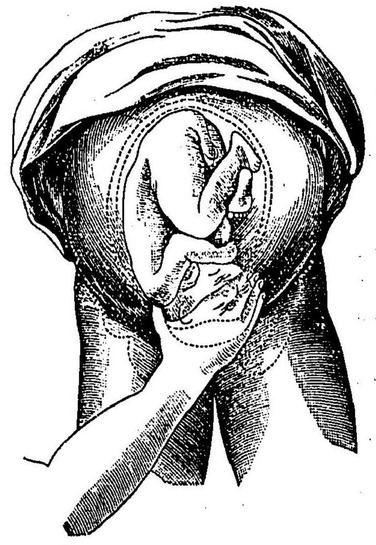
步行ノ狀態ヲ檢シ次ニ乳房ノ形狀乳頭ノ大小乳腺ノ狀態皮膚ノ着色ヲ知ル可シ此ノ如クニシテ腹部ノ檢査ニ移ルモノトス

(乙)腹部ノ檢査

姙婦ヲ仰臥セシメ其兩脚ヲ屈セシメ衣服腹帶等ハ全ク之ヲ寬解セシメ先ヅ視診ニヨリテ腹部ノ形狀大

一手ヲ以テ把握スルガ如ク兒頭ヲ觸診スルノ圖

第五十二圖



內ニ存スル胎兒ノ體部ヲ檢シ次ニ子宮ノ側部ニ兩手ヲ移シ兒背及ビ其小體部ヲ觸レ終リニ右若クハ左ノ一手ヲ以テ恥骨縫際上ニ位セル體部ヲ把握スルガ如クニシテ觸知ス可シ若シ下方ノ體部深ク骨盤內ニ進入セバ檢者ハ座ヲ姙婦ノ頭部ノ方ニ移シ兩手ヲ腹壁上ヨリ深ク骨盤內ニ進メ之レヲ檢知スルコトアリ此檢査ニヨリテ胎兒ノ胎位胎向大小移動性ヲ知ル可シ

骨盤及ビ足部ノ檢査

(丙)骨盤及ビ足部ノ檢査　腹部ノ檢査ヲ終ラバ骨盤外部ノ狀態ヲ檢センヿヲ要ス即チ左右ヨリ兩手ヲ骨盤ノ後側ニ送リ後チ之レヲ腸骨

腹部ノ聽診法

第五十三圖

兩手ヲ深ク骨盤內ニ進メ觸診スルノ圖

櫛ニ移シ以テ薦骨及ビ腸骨櫛ノ彎曲ノ狀ヲ檢知シ次ニ一手ノ拇指ト小指トヲ伸張シ兩腸骨前上棘ニ相達シ得ルコトナキヤヲ檢シ終リニ兩足ニ就キ浮腫靜脈瘤等ノ有無ヲ知ル可シ

(丁)腹部ノ聽診法　腹部ヲ聽診スルニハ觸診ニヨリテ檢査セルノ後チ前ノ如ク仰臥ノ位置ニアラシメ胸聽器ヲ腹上ニ貼シテ之レヲ行フ可シ若シ聽胸器ヲ所持セザルトキハ一葉ノ布片ヲ腹上ニ置キ直チニ耳ヲ貼シテ聽診スルヲ要ス而シテ

聽診ニヨリテ聽キ得ベキ音ハ胎兒ニ屬スルモノト母體ニ屬スルモノトアリ即チ次ノ如シ

(甲) 胎兒ニ屬スルモノ

1 胎兒ノ心臟音
2 胎動ノ雜音
3 臍帶ノ雜音

(乙) 母體ニ屬スルモノ

1 子宮血管ノ雜音
2 腸內瓦斯ノ雜音
3 腹部大血管ノ雜音

胎兒ノ心臟音ハ兒背ノ子宮壁ニ接シタル部ニ於テ最モ明瞭ニ聽取ス可シ其數凡ソ百四十搏ニシテ男兒ハ女兒ヨリ少ナキヲ常トス

胎兒ノ心臟音

胎動ノ雜音ハ指ヲ以テ物ヲ摩ルカ若クハ撞クカ如キ音ニシテ主ニ兒足ト子宮壁ト相摩擦スルニヨリテ發スルモノナリ

胎動ノ雜音

臍帶ノ雜音ハ臍帶ニ壓迫若クハ締結アルノ際ニ發スルモノニシテ吹クガ如キ雜音ナリ只稀レニ聽クコトアルノミ其數ハ胎兒ノ心臟音ト同數ナリ

臍帶ノ雜音

子宮血管ノ雜音ハ姙娠ニヨリ增大セル血管中ニ血液ノ流動スルガ故ニ發スルモノニシテ通常ハ下腹ノ兩側ニ存シ其音大ニシテ往々心臟音ヲ掩蔽スルコトアリ其數ハ母體ノ脈搏ト同一ナリ

子宮血管ノ雜音

腸內瓦斯ノ雜音ハ瓦斯ノ腸管內ニ運動スルガ爲メニ生ジ轟々トシテ雷鳴ノ如ク不規則ナルモノトス

腸內瓦斯ノ雜音

腹部大血管ノ雜音ハ敲クガ如キ音ニシテ母體ノ脈搏ト一致ス

腹部大血管ノ雜音

(戊)外陰部ノ視診モ亦タ緊要ナルガ故ニ內檢査ノ前又ハ同時ニ之レヲ行フ可シ外陰部ニ糜爛新生物等アルカ或ハ多量ノ分泌等アルトキハ醫師ノ診察ヲ請ハシムルヲ要ス

外陰部ノ視診

第卅五章　內檢査法

內檢査法ハ手指ヲ挿入シテ內陰部ノ狀態ヲ檢スルモノナリ之レヲ

內檢査法

行フニハ先ヅ其手ヲ消毒セザル可ラズ

手ノ消毒法

手ノ消毒法

先ヅ爪ヲ剪リ爪鋏子ヲ以テ其端ヲ圓滑ニシ爪垢ヲ去リ衣袖ヲ肘上マデ擧上シ温湯中ニ石硷及ビ刷毛ヲ用ヰテ三乃至五分時間丁寧ニ刷リ洗ヒ次ニ同ジク刷毛ヲ用ヰ五%即チ二十倍石炭酸水中ニ一乃至二分時間洗滌ス可シ(但シ此際用ユル温湯ハ一タヒ沸騰セメシタルモノヲ水ヲ加ヘズシテ冷却セシメ造レルヲ以テ最モ佳ナリトス又次ニ石炭酸水ヲ用ヰテ洗滌スルハ手ニ附着シ殘レル微菌ヲ殺滅スルノ目的ナリ時トシテハ醫師ノ命ニヨリ一千倍昇汞水又ハ百倍リゾール溶液ヲ用ユルコトアリ)

陰部ノ消毒

陰部ノ消毒

温湯石硷ヲ用ヰ外陰部陰阜大腿ノ近部及ビ臀部ヲ丁寧ニ洗滌シ陰毛ノ長クシテ妨害ヲナスモノアルトキハ剪刀ヲ以テ剪除シ次ニ一%即チ一百倍石炭酸水一千瓦ヲ以テ再ビ善ク之レヲ洗フ可シ婦人若シ帶下アルトキハ内検査ニ先ダチ二%即チ五十倍石炭酸水一千瓦ヲ用ヰ二指ヲ腟内ニ送入シ之レヲ洗滌スルヲ要ス

手ノ再度ノ消毒及ビ脂油ノ塗布

手ノ再度ノ消毒及ビ脂油ノ塗布

陰部ノ消毒全ク終ラバ再ビ手ヲ五%石炭酸水中ニ刷リ洗ヒ次ニ其末ダ乾カザルニ乘ジ示指及ヒ中指ニ五%(二十倍)石炭酸油若クハ石炭酸ワセリンヲ塗リ之レヲ腟内ニ挿入シ以テ内検査ヲ施コス可シ

洗滌消毒用液ノ容器

洗滌消毒用液ノ容器

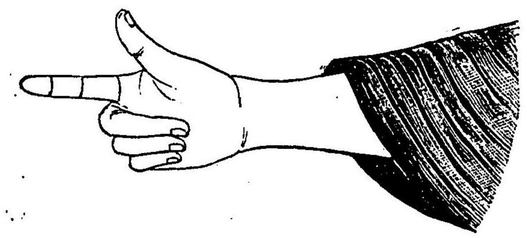
ニハ三箇ノ盥ヲ撰用ス可シ殊ニ淺クシテ大ナル鉢ヲ以テ良トス即チ其第一個ハ温湯ヲ盛リ石硷ヲ以テ洗滌スルニ供シ第二個ハ石硷ヲ洗去シ手ヲ清潔ナラシムルニ用ユ第三ノ一個ニハ五%即チ二十倍石炭酸水凡ソ一千瓦ヲ容ル可シ分娩時ニ在リテ此石炭酸水ヲ始終洗滌用トナシ只極メテ長時間ヲ要スル分娩ニ於テノミ之レヲ新タニ調製シテ交換ス可シ石炭酸溶液調製法ハ第八篇ニ詳ナリ

内検査ノ方式

内検査ノ方式

既ニ準備終ラバ圖ノ如ク示指及ビ拇指ヲ伸ベ他ノ三指ヲ屈シ姙婦ハ豫メ仰臥シ脚ヲ屈セシメ廣キ布片ヲ以テ下體ヲ掩ヘ其布片ノ下ヨリ手ヲ陰部ニ進メ示指ノ末端ヲ陰唇繫帶ニ抵テ腟ノ後壁ニ就キ骨盤誘道線ノ方向ニ從ヒ徐々ニ深部ニ送リ以テ子宮腟部ニ達セ

第五十四圖
内検査ノ手ノ方式ノ圖



シメ拇指ハ陰阜ニ向ケテ壓抵ス可シ此ノ如ク手指ヲ送入スルノ際外陰部ニ於テハ大小陰唇腟口ノ狀態恥骨弓ノ廣狹兩坐骨間ノ距離ヲ畧ボ探知シ腟内ニ於テハ腟腔ノ廣サ腟壁ノ性質(硬軟等)直腸ノ盈虛尿道ノ狀態及ビ骨盤壁ヲ觸診シ遂ニ子宮ニ及ボス可キモノトス若シ一指ヲ用ヰテ内検査スルモ不十分ナルトキハ示中二指ヲ用ユ可シ而シテ子宮ニ就キ検ス可キモノ次ノ如シ

1 子宮腟部
2 子宮口
3 胎児ノ先進部

子宮腟部

子宮腟部ハ通常乳頭狀ヲナシテ腟内ニ突出シ其頭端ノ中央ニ子宮口ヲ現ハス

子宮口

子宮口ハ圓形(初産婦)若クハ横裂(經産婦)ヲナスモノニシテ甲ハ其周縁滑澤ナレトモ乙ハ横裂ノ兩端ニ瘢痕ヲ有シ其縁ヲ前後ノ二唇トナス

胎児ノ前置部

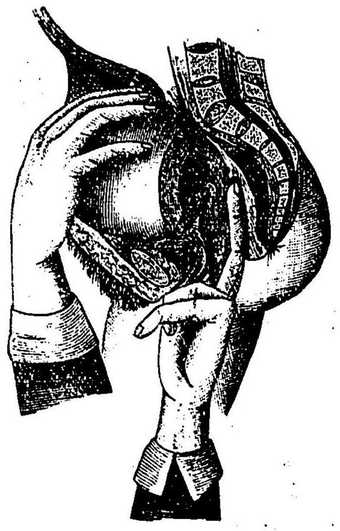
胎児ノ前置部ハ腟部ト恥骨縫際ノ間ニ於テ前腟穹窿部ヲ隔テヽ觸知ス可キモノニシテ其形狀移動性等ヲ検ス可シ

雙合検査法

第卅六章　双合検査法

双合検査法ハ内検査法ニ準ブルガ如ク手指ヲ腟内ニ送リ同時ニ他手ヲ腹上ニ貼シ子宮又ハ胎児ノ體部ヲ下方ニ壓シ内手ヲシテ容易ニ觸診セシムルノ法ナリ此法ニヨリ子宮ノ硬軟胎児體部ノ形狀及ビ移動性等ヲ明瞭ニ検知スルヿ

第五十五圖
双合検査法ノ圖



子宮ノ下部ハ切割セラレタルヲ示ス

ヲ得可シ

第卅七章　消毒法ノ説

消毒法

消毒法　ハ産婆術中ニ於テ極メテ緊要ノ事項ニ屬シ若シ之レヲ忽ニスルトキハ爲メニ産婦又ハ孃婦ノ生命ヲ損スルコトアルガ故ニ産婆ハ最モ此消毒法ヲ完全ナラシメザル可ラズ而シテ完全ノ消毒法ヲ行ハント欲セバ又其理ニ明カナラザルヲ得サルニヨリ次ニ其大要ヲ記ス可シ」

消毒ト防腐

消毒ト防腐　消毒トハ或ル部ニ存スル病毒ヲ消滅セシムルノ意ナリ又防腐ト稱スルコトアリ腐敗ヲ防止スト云フノ意義ヲ有ス必竟此二種ノ名稱ハ同一ノ事項ヲ二樣ニ名ケタルニ過ギス何トナレバ人體ニ於テ腐敗ヲ防止スト云フモ病毒ヲ消滅セシムト唱フルモ共ニ同一事ニ過ギザルニヨル

腐敗

腐敗　トハ黴菌ノ附着ヲ繁殖スルニヨリ生ズルモノナリ然レトモ人體又ハ動物體ノ如キ生活物ニ生ズルトキハ之レヲ腐敗ト云ハズシテ炎症若クハ化膿ト稱ス彼ノ肺炎肋膜炎疔瘡潰瘍等ト稱スルモノハ皆ナ黴菌ノ附着シ繁殖スルニヨリ發スルモノニシテ其理ハ概シテ腐敗ト異ナルコトナシ

黴菌

黴菌　トハ食物ノ上又ハ衣服ノ濕氣ヲ含メル際等ニ生ズル黴ノ類ヲ總稱セルモノニシテ菌蕈ノ類ニ屬スルモノナリ而シテ一般ニ黴菌ト呼フモノハ通例其體極メテ小サク顯微鏡ヲ以テ數百倍ノ大サニ照シ見ルトキハ大凡ソ粟粒ノ大サトナリテ現ハルヽモノナリ此物ハ人身體ノ表面ヲ始メ家屋器具其他總テノ物體ノ表面又ハ内部ニ附着シ並ニ空氣塵埃ノ中ニ存ス黴菌若シ營養物ヲ得ルトキハ其數僅カニ一個ト雖トモ盛ンニ繁殖シ暫時ニシテ幾百千万ノ多キニ達ス可シ例令ハ血液肉類等ヲ取リ幾時間カ之レヲ放置スルトキハ黴菌好ンデ茲ニ繁殖スルガ故ニ其物質ノ變化即チ腐敗ヲ生セシメ多クハ劇毒アル物質ヲ釀生スルニ至ルモノナリ

身體ノ表面ニアル黴菌ノ害ヲ致サヽル理由

身體ノ表面ニアル黴菌ノ害ヲ致サヽル理由　手其他身體ノ表面ニハ固ヨリ多數ノ黴菌附着シ存スト雖トモ繁殖シテ腐敗ヲ生セ

ザル所以ノモノハ身體ノ表面ニハ上皮アリテ善ク之レヲ被覆保護シ黴菌ヲシテ直チニ肉質ニ接セシムルコトナキニヨル

若シ上皮ニ損傷ヲ生シ黴菌肉質中ニ入ルトキハ　茲ニ繁殖ス可シ然レトモ此間注意ス可キハ黴菌一タビ繁殖スルモ其毒力ナキカ又ハ組織ノ抗抵力甚ダ強キトキハ黴菌盛ンニ繁殖スルコト能ハズ却テ消失ニ歸シ皮膚ノ損傷モ亦自ラ治癒スルニ至ル之レニ反シ黴菌ノ毒力強ク且ツ組織ノ抗抵力弱キトキハ黴菌盛ンニ繁殖シ遂ニハ人體ノ生命ヲモ害スルニ至ルモノナリ此ノ如ク黴菌身體中ニ繁殖シ障害ヲ呈スルモノヲ傳染ト稱ス

若シ上皮ニ損傷ヲ生シ黴菌肉質中ニ入ルトキハ

産婦ニ防腐法(消毒法)ノ緊要ナル理由

上記ノ傳染ヲ防止シ産婦ヲシテ産蓐熱ノ危險ヲ免レシムルハ即チ防腐法ノ要目ナリ蓋シ産蓐婦ナルモノハ生殖器内ニ數多ノ損傷アリテ組織ハ充血弛緩シ善ク黴菌ノ侵入ニ適シ且ツ惡露ハ大ニ黴菌ノ繁殖ニ良好ナルニヨリ黴菌ニ對シ甚ダシキ危險ヲ有スルモノナリ此故ニ産婆ハ必ズ自己ノ手及ビ檢査

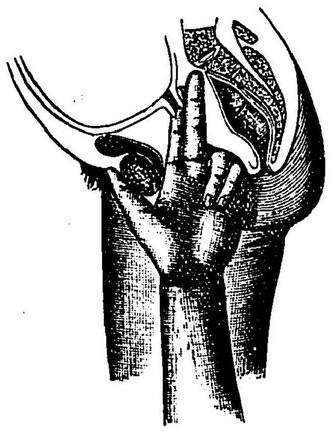
産婦ニ防腐法(消毒法)ノ緊要ナル理由

ヲ受クル婦人ノ陰部ニ嚴格ナル清潔法即チ消毒法ヲ施コシ黴菌ヲ消滅セシメザル可ラズ産婆若シ消毒法ヲ忽セニシテ産婦若クハ産蓐婦等ニ傳染性疾患ヲ起サシムルトキハ決シテ其責ヲ免ル可ラザルモノトス

第卅八章　骨盤直徑線ノ檢査

骨盤直徑線ノ檢査

内檢査ノ際指ヲ薦骨岬ニ向ケテ送入シ容易ク之レニ達ス可キハ骨盤直徑線ノ短小ナルモノニシテ所謂扁平骨盤ナリ此ノ如キモノハ分娩容易ナラザルモノトス尙ホ此檢査ニ就キテハ第五篇狹窄骨盤ノ章下ニ説述スル所アル可シ」



第五十六圖　骨盤内直徑線ノ長サヲ檢スル圖

腸骨前上棘間ノ檢査

腸骨前上棘間ノ檢査

前章外檢査(丙)ノ條下ニ述ブルガ如ク拇指ト

小指ヲ伸展シ兩前上棘間ニ相達シ得ルハ骨盤狹窄セルノ徴ナリ

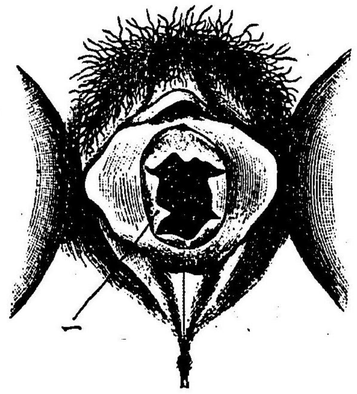
恥骨弓、兩坐骨結節間距離ノ檢査

恥骨弓、兩坐骨結節間距離ノ檢査ハ同ジク第五編狹窄骨盤ノ章中ニ論ズ可シ

第卅九章　初産及ビ經産ノ鑑別

初産婦陰口ノ圖

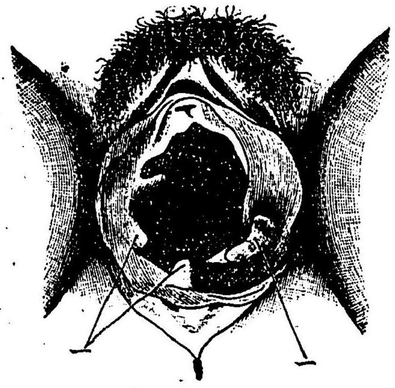
第五十七圖



一、破裂セル處女膜根

經産婦陰口ノ圖

第五十八圖



一、ミルチ狀肉阜

初産及ビ經産ノ區別

初産及ビ經産ノ區別

初産及ビ經産ノ區別ハ通常問診ニヨリテ知ルコトヲ得ベキモ結婚前ノ分娩等ニ屬スルトキハ産婦之レヲ掩蔽スルコトアリ此場合ニ在リテハ外陰部子宮口等ノ狀態ヲ視テ之ヲ鑒別ス可シ即チ次ノ如シ

初産婦

1、處女膜根存ス

2、會陰ニ損傷ナシ(但シ經産婦ニシテ會陰部ノ完全ニ存スルコトアリ)

3、腟腔狹ク腟壁ノ皺襞多シ

4、子宮口ハ圓形ニシテ腟部圓滑ナリ産娠ノ末期ニ至ルモ子宮口閉鎖ス

經産婦

1、處女膜根消失シ結節狀チナセルミルチ狀肉阜數箇ヲ現ハス

2、會陰破裂アラバ經産婦ナルヲ知ル可シ(但シ經産婦ト雖トモ會陰破裂ナキコト多ク之レアリ)

3、腟壁ノ皺襞少ナク腟腔潤シ

4、子宮口ハ横裂ヲナシ腟部ハ結節狀隆起ヲナセルヲ觸知ス可シ産娠ノ末期ニ至レバ子宮外口内ニ指ヲ通セシム

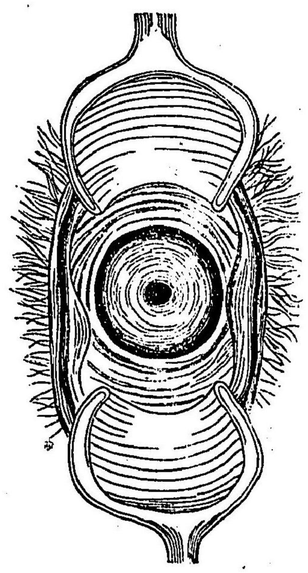
5、第十ケ月ニ至レバ兒頭骨盤入口ニ固定ス

6、帶青赤色ナル一種ノ姙娠線ヲ現ハス

5、第十ケ月ニ至ルモ兒頭骨盤入口ニ固定セズ

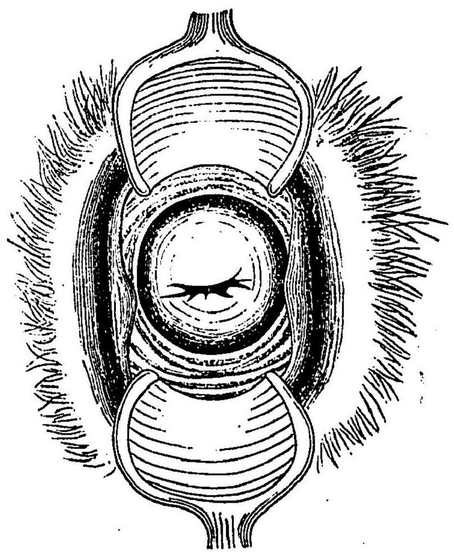
6、白色ニシテ舊キ姙娠線ト帶青赤色ニシテ新ラシキモノト相混シテ存ス

第五十九圖　初姙婦子宮口ノ圖



子宮鏡ヲ用ヒテ腟部ヲ示ス

第六十圖　經産婦子宮口ノ圖



子宮鏡ヲ用ヒテ腟部ヲ示ス

第四十章　胎兒ノ位置生死及ビ両性ノ撿定

胎位　胎兒縱位ヲ取ルトキハ其大體部子宮底ト恥骨縫際ノ上ニ存シ横位ナルトキハ子宮底及ビ恥骨縫際ノ兩部空虛ニシテ大體部ハ左右兩

側部ニ位ス又頭位ナルトキハ小體部ハ子宮底ノ左若シクハ右ニ現ハル骨盤端位ナルトキハ子宮底ノ側部ニ小體部ヲ見ルコトナク內診スレバ柔軟ニシテ突起樣ヲナセル臀部ヲ觸知ス可シ

胎兒生活セルトキ

胎兒生活セルトキハ第二十週(第五ケ月)後ニ於テハ胎動心音ヲ認識シ得ヘキヲ以テ之レヲ確ム可シ然レトモ生活セルモ胎動ハ每回觸知シ得ベキモノニアラズ且ツ心音モ亦兒背ノ後方ニ向フモノ胎盤ノ子宮前壁ニ位スルモノ羊水ノ多量ナルモノ子宮雜音腸內雜音等ノ甚ダシキモノニ在リテハ之レヲ聽取シ難キコトアリ故ニ一回ノ檢査ヲ以テ胎動心音ヲ認ムルコトナキモ直チニ生存セザルモノト云フコト能ハス

胎兒若シ果シテ死亡スルトキ

胎兒若シ果シテ死亡スルトキハ羊水ノ吸收セラルヽガ爲メニ子宮ハ漸次ニ變小シ柔軟トナリ胎動ハ全ク止ミ腟內ヨリハ多量ノ分泌物ヲ泄シ姙婦ハ倦怠消化不良下腹寒冷又ハ腹內ニ異物ノ存スルガ如キヲ覺エ數回注意シテ診察スルモ心音胎動ヲ認ムルコトナキモノトス

男女兩性ノ診斷

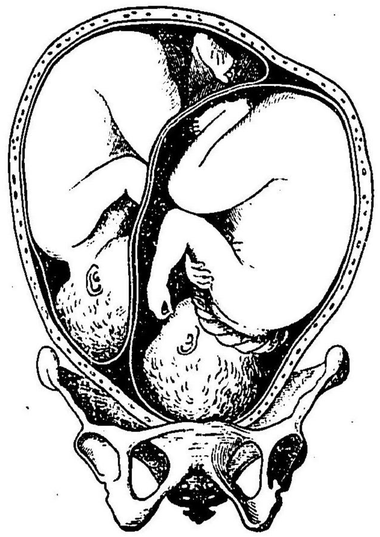
男女兩性ノ診斷ハ每回確實ナルコト能ハザルモ心動數百四十以下ナルトキハ男兒トナシ百四十以上ナレバ女兒トナストキハ多クハ適中ス可シ此他種々ノ說アレトモ到底稱用シ得可キモノアルヲ見ズ

双胎ノ診斷

第四十一章　双胎ノ檢査

双胎ノ診斷　腹部甚ダ大ニシテ各別ノ部ニ二箇ノ心音ヲ聽クトキハ雙胎ナルヲ知ル可シ但シ單ニ腹部ノ大ナルモノハ羊膜水腫過大ナル胎兒ニ於テ之レアリ又雙胎ニ在リテモ兒背ノ後方ニ向フ等ノ爲メニ一兒ノ心音ヲ聽キ得ザルコトアリ故ニ腹部大ニシテ心音一ナルノ際ハ雙胎ノ有無ヲ診斷スルコト甚ダ困難ナルコトア

第六十一圖
雙胎胎兒ノ圖



内檢査ニヨリ

リ殊ニ雙胎ニハ羊膜水腫ヲ兼ヌルコト屢々之レ有リトス

内檢査ニヨリ 分娩ノ際極メテ稀レニ子宮口内ニ四箇以上ノ小體部ヲ觸ルヽカ或ハ一胎兒ノ臍帶又ハ頭部ノ外別ニ搏動セザル臍帶若シハ軟化セル兒頭ノ存スルヲ觸知スルトキハ確カニ双胎ナルヲ知ル可キモ此ノ如キ場合ハ毎回之レアルモノニアラズ

以上ノ理ニヨリ雙胎ノ診斷ハ通例甚タ困難ナルカ又ハ到底之レヲ診斷スルコト能ハザルコトアリ

姙婦ノ攝生法

第四十二章　姙婦ノ攝生法

姙婦ノ攝生法 ニ就キ注意ス可キ事項ハ飲食物業務起臥運動精神上ノ感動衣服身體ノ清潔法乳房及ヒ陰部ノ處置姙娠性症狀ノ取扱法等トナス

飲食物

飲食物 ハ平常ノ習慣ニ從ヒ從來飲食セルモノハ適度ニ之レヲ用ユルトキハ敢テ害アルコトナシ但シ必ズ常度ヲ誤マラザルヲ緊要トリトス又姙娠ノ末期ニ至ラハ一回ノ食量ヲ少ナカラシメ數回食ニ就カシム

業務

運動

起臥

精神上ノ感動

ルヲ佳トス殊ニ晩餐ヲ然リトナス

業務 モ亦從來ノ習慣ニ隨ヒ平時ノ如ク之レヲ營マシム可シ唯必ズ過劇ナルヲ避ク可シ勞力ノ如キモ平常慣レタルモノハ敢テ之レヲ廢スルヲ要セズ却テ體力ヲ强壯ナラシメ分娩產蓐ヲ佳良ナラシムルノ益アリ然レトモ亦必ズ愼重ニシテ粗暴ナルコトアル可ラズ否ラサレハ爲メニ出血流產等ヲ惹キ起スニ至ル可シ特ニ最初四ケ月ハ最モ害ヲ釀シ易キガ故ニ大ニ注意センコトヲ要ス

運動 ハ靜居スル姙婦ニ在リテハ必ズ特ニ之レヲ營マシム可シ自體及ヒ胎兒ニ益アリ但シ舞踏飛躍不平坦ナル道路ノ車行長途ノ鐵道旅行等ハ之レヲ戒シメンコトヲ要ス然ラサレハ過劇ナル業務ト異ナルコトナク危害ヲ生ズルニ至ル可シ

起臥 ハ可及的規律ヲ正シクシテ遲ク寢ネ睡眠不足ナルガ如キコトアル可ラズ而シテ起臥ノ間常ニ心意ヲ平靜ナラシメンコトヲ要ス

精神上ノ感動 即チ恐怖驚愕悲哀憤怒嫌惡劇度ノ喜悅等ハ可及的

之レヲ避ケンコトヲ務ム可シ故ニ感動ス可キ演劇小説談話等ヲ見聞スルコトヲ戒メザル可ラス殊ニ難産病床等ニ侍スルコトヲ禁スルヲ要ス多クノ姙婦ハ姙娠ノ末期ニ至レバ甚ダ悲哀ニ沈ミ易ク且ツ分娩ノ難キヲ恐ルヽガ如キコトアルモノナルガ故ニ産婆ハ己レノ態度ヲ平靜ニシ温言ヲ以テ之レヲ慰諭ス可シ

衣服

衣服　ハ甚ダシク身體ヲ緊縛スルモノヲ用ユ可ラズ腹帶ハ姙娠ノ後半期ニ於テ適度ニ之レヲ用ユルヲ良トス是レ腹壁ノ甚ダシキ弛緩ヲ防ギ胎兒ノ變位ヲ豫防シ兼ネテ妊婦ノ運動ヲ容易ナラシムルノ益アリ

身體ノ清潔法

身體ノ清潔法　ハ殊ニ注意シ毎日一回適宜ニ温浴ニ入ラシムルヲ良トス而シテ其温度ハ凡ソ攝氏三十八度(華氏凡ソ百度)ナル可シ虚弱ナル妊婦ニアリテハ浴後一時間安靜ナラシムルヲ佳トス但シ坐浴脚浴冷水浴又ハ頻回ノ温浴ヲ取ラシム可ラズ否ラザレバ墮胎又ハ早産ヲ致ス可シ

陰部ハ分泌增多スルガ故ニ温湯ヲ以テ一日數回外陰部ヲ洗滌ス可シ腟内モ亦過多ノ帶下アルトキハイルリガートルヲ用ヰ一%微温石炭酸水ヲ以テ洗滌セシムルヲ良トス外陰部若シ多量ノ分泌ヲ現ハストキハ冷水ヲ用ヰテ洗滌スレバ效アリ

交接

交接　ハ稀レニ且ツ温和ニ之レヲ營マシム可シ殊ニ第八週乃至第十六週ノ間ハ注意セソコトヲ要ス否ラザレバ流産ヲ致スコトアリ又流産ノ僻アル婦人ニ在テハ最モ交接ヲ慎重ナラシム可キモノトス

乳房

乳房　ハ温暖ニ保チ衣服ノ壓迫ヲ避ケシメ乳頭ハ毎日二三回冷水ヲ以テ洗ヒ指ヲ用ヰ注意シテ屢々之レヲ牽引シ且ツ時々酒精ヲ塗布ス可シ此ノ如クスルトキハ乳頭ノ形狀ヲ佳良ニシテ其皮膚ヲ强固ナラシムルノ効アリ

姙娠性症狀

姙娠性症狀　ノ中便秘アラバ務メテ室外ノ運動ヲ營マシメ熟シタル菓物及ビ煮タル菓物ヲ食セシメ寢時及ビ早朝其他一日數回時間ヲ定メテ清水若クハ温湯ヲ飲用セシムルヲ要ス此ノ如クスルモ尚ホ便通不良ナルトキハ日々温石硫液ノ灌腸ヲ行ヒ又ハ醫ノ診察ヲ請ヒ緩和ノ下劑

ヲ服セシムル可シ

嘔吐アルモノニハ消化シ易キ食物ヲ少量ニ與ヘ數回食ニ就カシムル可シ

早朝ノ嘔吐ニハ牛乳等ノ滋養物ヲ蓐中ニ飲用シ一時間ヲ經テ起床セシムルヲ良トス

此他總テノ妊娠性症狀ハ醫療ニ就カシムルヲ要ス

第三篇　正規分娩及ビ其取扱法

誘導編

第四十三章

此第三篇ニ於テハ分娩トハ如何ナルモノナルヤヲ說キ正規ノ分娩ニ就キテ其狀況ヲ論シ次ニ分娩ヲ處置スルニハ如何ノ方法ト何等ノ必要アルカヲ述ベ且ツ講習ノ便ヲ謀リ不正規即チ異常ナル縱位ノ分娩ニ就キ其分娩ノ狀況ト緊要ナル處置方法ヲ記シ終リニ分娩中ニ於ケル胎兒生死ノ徵候其他ヲ說カント欲ス

第四十四章　分娩及ビ其區別

分娩　トハ胎兒其附屬物ト共ニ產出力ニヨリテ母體ヲ離ルヽヲ云フ

分娩ノ區別　分娩ニ正規分娩ト異常分娩トノ二アリ正規分娩トハ人工ノ助ケヲ要セズシテ平易ニ產出スルヲ云ヒ異常分娩トハ母體又ハ兒體ニ危險ヲ生ズルノ恐レアルカ又ハ到底危險ヲ免ルヽコト能ハズシテ人工ノ助ケヲ要スルモノヲ云フ

又分娩ノ時期ニ關シ定期産、流産、早産、遲産ノ別アリ定期産トハ四十週ヲ經テ産出スルモノ流産トハ二十八週以前ニ産出シテ小兒ノ生活シ得ザルモノ早産トハ二十八週以後ノ分娩ニシテ小兒ハ生活ヲ營ミ得ベキモノ遲産トハ四十週以上ヲ經テ産出スルモノヲ云フ

分娩ノ正規ニ營マルヽハ

分娩ノ正規ニ營マルヽハ　産道、産出力及ビ胎兒位置ノ三者共ニ正規ナルニヨル若シ此三者不正規ナルトキハ異常ノ分娩ヲ致ス可シ次章ニ於テハ順次ニ此三者ヲ説明セント欲ス

第四十五章　産道

産道

産道ハ之レヲ分チテ骨部産道及ビ軟部産道ノ二トナス骨部産道ハ即チ骨盤ヲ云フ而シテ小兒ヲ通ズルノ管ナルガ故ニ或ハ之レヲ骨盤管ト稱ス

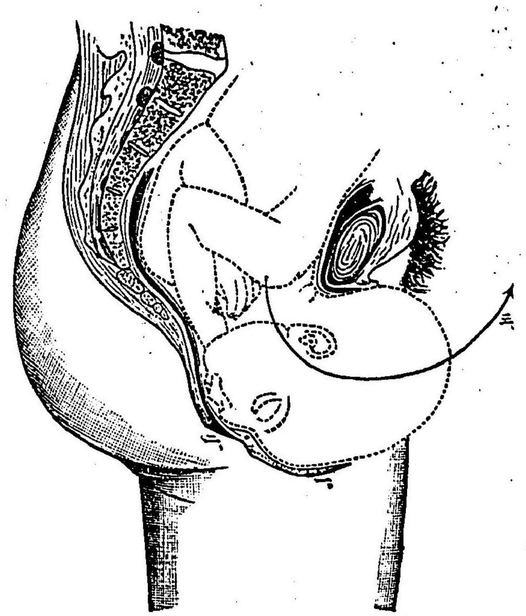
軟部産道ノ方向

軟部産道ハ即チ骨部産道ノ内部ニ位スルモノニシテ子宮頸管、子宮口、腟及ビ外陰部是レナリ

軟部産道ノ方向

分娩ノ際ハ會陰ノ前下方(起立ノ位置ニ就キテ之レヲ云フ)ニ延張スルガ爲メニ軟部産道ノ下端ハ全ク前方ニ向ヒ其方向ハ骨盤誘導線ノ方向ニ從ヒ前上方ニ赴クモノトス此故ニ分娩ノ際之レヲ處置スルニハ常ニ胎兒ヲ此方向ニ導クヲ要ス否ラザレバ娩出セシム

第六十二圖　軟部産道延長シ其方向前上方ニ向フヲ示ス圖



ルコト難ク且ツ會陰ヲ破裂セシムルニ至ルモノナリ

第四十六章　産出力

産出力

ハ更ニ之レヲ分チテ三トナス(甲)子宮ノ收縮力即チ陣痛(乙)腹壓(丙)腟壁ノ收縮力是レナリ

陣痛

(甲)陣痛　ハ疼痛ヲ伴ヘル子宮ノ收縮ニシテ陣痛發スルノ際手ヲ腹上ニ貼スレバ明カニ子宮ノ收縮シ硬固トナレルヲ觸知ス可シ

陣痛ノ三期及ビ其休歇時

陳痛ノ三期及ビ其休歇時　陣痛ニ三期アリ進行期極期及ビ退行期ト云フ進行期トハ子宮ノ收縮漸次ニ增進スルノ期ニシテ極期トハ其收縮極度ニ達シ少時稽留スルノ期ヲ云ヒ退行期トハ爾後子宮ノ收縮再ビ弛緩スルノ時期是レナリ此ノ三期ヲ合スレバ一陣痛ノ長サハ六十秒ヨリ百秒ニ至ル一陣痛經過スレバ暫時間休止ス之レヲ陣痛休歇時或ハ陣痛間時ト稱ス

陣痛ノ性質

陣痛ノ性質　陣痛ノ强度ハ分娩ノ進ムニ從ヒ增進スルモ陣痛ノ持續ト休歇時トハ却テ短縮ス可シ又陣痛ハ主要ナル産出力ニシテ固ト隨意ニ之レヲ生ゼシム可キモノニアラザレトモ精神ノ感動ニヨリテ其强サヲ變ゼシムルコトアリ

分娩痛

分娩痛　トハ陣痛ト胎兒ノ産道ヲ擴張シ通過スルノ際ニ發スル疼痛トヲ併セテ名ケタルモノナリ此故ニ分娩痛ハ兒頭ノ外陰部ヲ出ヅルノ際ニ當リ最モ强劇ナルモノナリ分娩痛ハ陣痛ト同一視ス可ラズ

腹壓

(乙)腹壓　トハ呼吸ヲ停止シ手足ヲ固定シ腹壁及ビ横隔膜ヲ收縮セシメ腹腔ヲ狹小ニシ以テ腹腔ノ內容物ヲ下方ニ壓出スルノ作用ニシテ分娩ノ際産出期ニ於テハ甚ダ緊要ナルモノナリ此腹壓ハ固ト隨意ニ營ムコトヲ得ベキモノナレトモ小兒ノ將ニ産出セントスルノ際ハ不隨意ニ反射作用ヲ以テ發起シ自ラ制スルコト能ハザルモノナリ

腟壁ノ收縮

(丙)腟壁ノ收縮　ハ胎兒又ハ後産ノ大部既ニ産出セルノ際其餘ノ一部ヲ壓出セントスルノ作出ヲナスモノナリ是レ敢テ緊要ナルモノニ有ラズ

第四十七章　胎兒ノ位置即チ胎位

胎位ノ區別

胎位ノ區別

胎兒ノ位置ヲ大別シテ縱位及ビ横位ノ二トナス而シテ縱位ハ其先進部ノ異ナルニ從ヒ更ニ小別シテ頭位ト骨盤端位トニ別チ頭位ハ又頭蓋位、額位及ビ顔面位トニ區別シ頭蓋位ノ中ニハ更ニ後頭位前頭位(又ハ前顱頂骨位、後顱頂骨位アリ骨盤端位ハ臀位、膝位及ビ足位ニ分チ且ツ足位ニハ全足位及ビ不全足位ノ別アリ此各胎位ニ就キ頭位中ノ一種ナル後頭位ハ最モ多數ニシテ且ツ全ク正規ナルモノナリ其他顔面位、足位、等ハ既ニ不正規ニ屬シ横位ニ至リテハ全ク病理的ナルモノトス以上ノ胎位ヲ表示スレバ次ノ如シ

- 縱位
  - 頭
    - 頭蓋位
      - 後頭位
      - 前頭位
    - 額位
      - 前顱頂骨位
      - 後顱頂骨位
    - 顔面位
  - 骨盤端位
    - 臀位
    - 膝位
    - 足位
      - 全足位
      - 不全足位
- 横位

各胎位ノ利害

各胎位ノ利害

胎兒ハ縱位ニヨリテノミ產出スルヲ得ベシ横位ナルトキハ通例產出スルコト能ハズ且ツ之レヲ放置シテ速カニ治方ヲ施コスコトナケレバ小兒ハ固ヨリ論ナク母體モ亦生命ヲ失フニ至ル――縱位中最モ安易ニシテ且ツ正規ナルハ後頭位ニシテ前頭位之レニ次キ顔面位ハ分娩頗ル難ク額位、前後顱頂骨位等ニ至リテハ最モ困難且ツ危險ナルモノトス骨盤端位ハ母體ニ於テハ敢テ甚ダ不良ナラザレトモ小兒ニハ頗ル不利ナリ就中臀位ハ最モ佳良ニシテ足位膝位ハ共ニ之レニ次

ノ足位ノ中不全足位(一足ノミ先進セルモノ)ハ全足位(兩足先進セルモノ)ヨリモ佳良ナリ其他此等ノ詳細ナル説明ハ各位置ノ條下ニ之レヲ論ズ可シ

各胎位ノ數

各胎位ノ數

今各位置ノ數ヲ擧グレバ次ノ如シ

頭蓋位	凡ソ	九五、〇%
顔面位	凡ソ	〇、六%
骨盤端位	凡ソ	三、一%
横位	凡ソ	〇、六%

各胎位ノ區別

各胎位ノ區別

各位置ハ其兒背ノ向フ所ニヨリ四種ノ別アリ今頭蓋位ニ就キテ之レヲ數フレバ次ノ如シ但シ其餘ノ胎位モ亦之レニ準ス可シ

第一頭蓋位　兒背母體ノ左前方ニ向フモノ

第二頭蓋位　兒背母體ノ右前方ニ向フモノ

第三頭蓋位　兒背母體ノ右後方ニ向フモノ

第四頭蓋位　兒背母體ノ左後方ニ向フモノ

或ハ以上第一頭蓋位ヲ第一胎向第一分類トナシ第二頭蓋位ヲ第二胎向第一分類ト稱シ第三頭蓋位ヲ第二胎向第二分類ト名ケ第四頭蓋位ヲ第一胎向第二分類ト唱フルモノアリ

分娩ノ經過

第四十八章　頭蓋位正規分娩ノ狀況

分娩ノ經過

分娩ノ經過ヲ分ケテ次ノ三期トナス

第一期開口期　ハ陣痛ニヨリ子宮口全ク開大シ胎兒ヲ通過セシメ得ルニ至ルノ時期ニシテ此期ノ終末ニハ胎水漏泄スルヲ常トス

第二期産出期　ハ子宮口全ク開大シ胎水漏泄セルノ後チ兒體ノ全ク産出スルニ至ルノ時期ヲ云フ

第三期後産期　ハ即チ胎兒娩出後ヨリ後産ノ全ク排出シ終ルノ時期ヲ云フ

此三期ハ各分娩ニ普通ナルモノナルニヨリ頭蓋位ニ於ケル經過ヲ知了

スレバ他ハ自ラ之レヲ了解スルヲ得ベシ次ニ頭蓋位分娩ノ經過ヲ說述セント欲ス

各期ニ於ケル陣痛ノ名稱

各期ニ於ケル陣痛ノ名稱

開口期ニハ開口期陣痛(豫備陣痛)產出期ニハ產出期陣痛及ビ震戰陣痛アリ後產期ノ陣痛ハ之レヲ後產期陣痛ト稱ス又分娩前妊娠ノ末月ニ於テ既ニ前陣痛ヲ現ハシ分娩後產褥中ニハ後陣痛アリ

開口期中ノ緊要ナル箇條

第四十九章　第一期開口期

開口期中ノ緊要ナル箇條

ヲ擧ゲ示セバ次ノ如シ此箇條ヲ記憶スレバ開口期ノ順序ハ自ラ瞭然タルモノトス即チ

開口期ノ順序

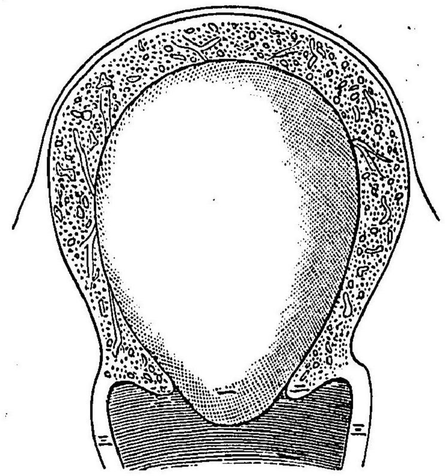
(一)前驅期　(二)陣痛漸次ニ增劇ス
(三)胎胞ノ形成　(四)子宮口ノ全開大
(五)分泌物中血液ノ混入　(六)胎胞ノ緊張
(七)胎胞破開シ胎水流出スルコト是レナリ

開口期ノ順序

開口期ハ其最初ニハ前驅期アリ前驅期ニ於テハ產婦ハ稍々强クシテ頻發スル陣痛ヲ感シ運動困難ニ便緊迫ヲ感ズ可シ此間ノ陣痛ヲ前陣痛ト名ク次ニ陣痛漸ク其度ヲ增シ三乃至五分時ニシテ反復シ卵膜ハ羊水ノ壓迫ニヨリ子宮口ヨリ膨出セラレ所謂胎胞(卵胞)ヲ形成シ以テ漸次ニ子宮頸管ヲ開大シ全ク之レヲ開クニ至レバ其口徑ハ十仙迷トナリ腟ト一管ヲナス此際子宮口甚ダシク緊張シ小裂傷ヲ生ジ爲メニ腟內ノ分泌物ニ血液ヲ混ズ可シ而シテ胎胞ハ始メ陣痛

第六十三圖

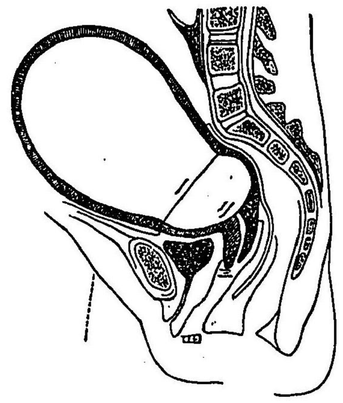
胎胞ヲ形成シ子宮口ヲ開カシムルノ圖



一、胎胞　二、二、子宮口　三、三、腟壁

間ニハ弛緩スト雖トモ開口期ノ終リニ至レバ絶エズ緊張シ遂ニ破裂シ以テ羊水ヲ泄ス此羊水ヲ前羊水(前胎水)ト云フ其量ハ八乃至十五瓦ナリ開口期ノ陣痛ヲ開口期陣痛若クハ豫備陣痛ト稱ス

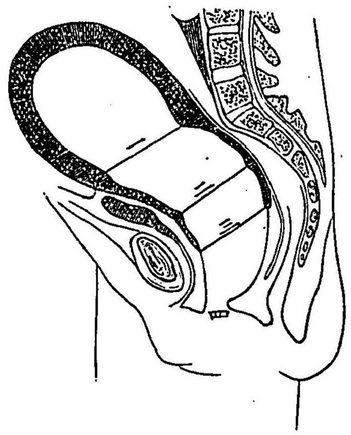
第六十四圖　開大セサル姙娠子宮ノ頸管ヲ示ス圖



一、分娩時ニ延張ス可キ子宮下部ノ境界
二、子宮内口
三、子宮外口
四、腟口

羊水漏泄ノ遲速及ビ其害

第六十五圖　子宮頸管全ク開大シテ腟ト一管ヲナスヲ示ス圖



一、分娩時ニ延張ス可キ子宮下部ノ境界
二、子宮内口
三、子宮外口
四、腟口

羊水漏泄ノ遲速及ビ其害　羊水ハ子宮口ノ全ク開大スルニ先チテ漏泄スルヲ多シトス而シテ子宮口尚ホ小ナルニ際シ既ニ漏泄スルヲ早期ノ羊水漏泄ト云フ若シ羊水ノ漏泄スルコト甚ダ早キトキハ子宮口ノ開クコト徐々ニシテ陣痛ハ強シト雖トモ分娩ハ頗ル遲延スルモノナリ之レニ反シ胎胞ノ破裂スルコト遲ク甚ダシキハ胎兒尚ホ卵膜ノ中ニ在

リテ産出セラルヽコトアリ此ノ如ク卵膜ノ破ルヽコト遲キトキハ亦分娩時間ヲ費ヤスガ故ニ人工ニ之レヲ破開スルヲ要ス

第五十章　第二期産出期

産出期中ノ緊要ナル箇條

産出期中ノ緊要ナル箇條

(一)兒頭子宮口内ニ出デ産痛ヲ形成ス(二)兒頭腟内ニ出デ腹壓ヲ營ム
(三)會陰延張膨出シ肛門哆開ス　(四)兒頭ノ露出
(五)震戰陣痛　(六)兒頭ノ産出(又ハ兒頭ノ撥露ト名ク)
(七)兒體ノ産出　(八)第二胎水ノ流出

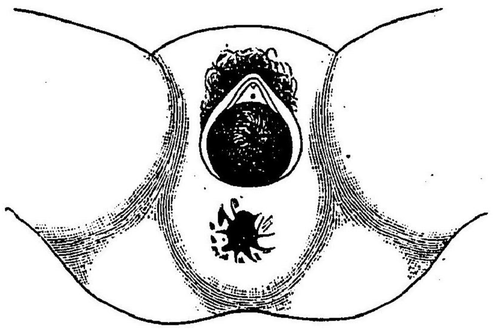
産出期ノ順序

産出期ノ順序

既ニ産出期ニ至レバ陣痛ハ益〻强劇トナリ兒頭ハ子宮口内ニ出ヅ此際兒頭强ク子宮口緣ニ括約セラルヽガ故ニ其部ノ前方ハ著シク浮腫シ時トシテ紫色ヲ呈ス之レヲ産痛又ハ頭痛ト名ク既ニシテ兒頭腟内ニ降レバ産婦ハ腹壓ヲ營ミ胎兒ヲ壓出セントコトヲ務ムル而シテ此腹壓ハ幾分カ陣痛ニ堪エ易カラシムルモノナリ今ヤ内診ヲ施コストキハ兒頭ハ陣痛ノ際ニ下降シ休歇時ニハ少シク退却スルヲ知ル可シ

此ノ如クニシテ兒頭漸次ニ下降スルトキハ陣痛時ニハ陰裂間ニ露出シ陣痛止メハ再ビ腟内ニ退キ數回反復シテ外陰部ヲ開張セシム此ノ際會陰ハ甚ダシク延張膨出シ長サ廣サ共ニ二倍ニ達シ肛門ハ强ク哆開シ糞便ハ自ラ漏出ス可シ此ノ如クナレバ陣痛ハ最モ劇烈トナリ産婦ハ反射的ニ强ク腹壓ヲ營ミ顏面潮紅口唇青色トナリ精神煩悶全身震戰シ最モ强劇ノ陣痛ヲ現ハシ以テ兒頭ヲ産出セシムルモノナリ此陣痛ヲ震戰陣痛ト稱ス次ニ兒頭既ニ産出スルトキハ陣痛少時間休歇シ更ニ發作ヲ來シ容易ニ兒體ヲ娩出セシム時トシテ兒頭ト

第六十六圖
兒頭露出シ會陰部延張膨出シ肛門哆開セルヲ示ス圖



共ニ兒體ヲ一頓ニ産出セシムルコトアリ又兒體ノ産出スルヤ殘餘ノ胎水ハ少許ノ血液ヲ伴フテ流出ス之レヲ第二胎水ト稱ス

第二産痼

第二産痼　時トシテハ兒頭陰裂間ニ於テ暫時停止スルコトアリ然ルトキハ更ニ産痼ヲ生ス之レヲ第二産痼ト名ク

第五十一章　第三期後産期

後産期ノ緊要ナル箇條

後産期ノ緊要ナル箇條

(一)爽快ヲ感シ若クハ惡寒ヲ覺ユ　(二)後産期陣痛

(三)胎盤ノ全部剝離　(四)血管斷裂シテ出血ス

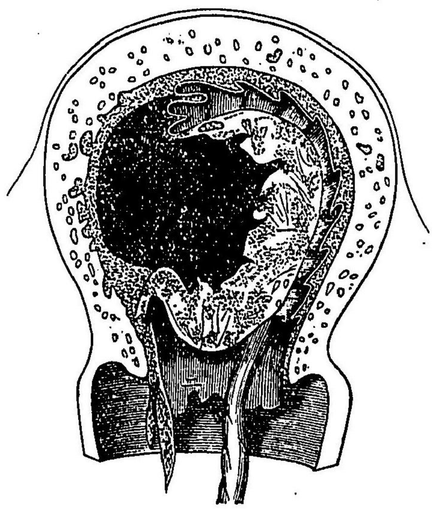
(五)後産ノ産出及ビ止血

後産期ノ順序

後産期ノ順序

既ニ後産期ニ至レバ産婦ハ爽快ヲ感シ時トシテハ惡寒若クハ寒戰ヲ催スコトアリ而シテ一二分乃至十五分間ヲ經レバ後産期陣痛ヲ發シ胎盤ヲ全ク子宮內面ヨリ剝離セシム蓋シ胎盤ハ小兒ノ産出スル際其一部既ニ剝離ズト雖トモ後産期陣痛ヲ待チテ其全部剝離セラルヽモノナリ又胎盤ノ剝離スルニ當リ子宮壁ノ血管斷裂スルガ故ニ是レヨリ出血シ陣痛時ニ於テ稍多量ニ流出シ子宮ノ收縮ニヨリ血管ノ斷口壓閉セラルヽニ及ビ止血ス可シ此ノ如ク後産期ノ陣痛ニヨリ剝離セル胎盤及ビ卵膜ハ漸次ニ子宮ヨリ腟內ニ出デ凡ソ三十分ヲ經過スレバ全ク外部ニ産出ス可シ

第六十七圖　胎盤剝離シ産出セントスルノ圖



一、胎盤
二、卵膜

分娩ノ持續

第五十二章　分娩ノ持續

分娩ノ持續ハ一定ナラズシテ陣痛ノ強弱胎兒ノ大小産道抗抵ノ多少骨盤ノ廣狹ニ關ス今若シ胎兒小ニシテ産道ノ抗抵弱ク且ツ骨盤廣ク陣痛強キトキハ分娩甚ダ速ナリト雖トモ若シ之レニ反シ産道ノ抗抵強ク骨盤廣カラズ若クハ陣痛弱キガ如キコトアルトキハ分娩遲延ス可シ

又初産婦ハ經産婦ニ比スレバ遲シ即チ初産婦ハ大凡ソ十二時間經産婦ハ大凡ソ六時間ナルヲ見ル但シ西洋人ニ在リテハ初産婦十八時間經産婦十二時間ヲ費ヤス可シ

分娩三期ノ中開口期ハ最モ長ク大凡ソ産出期ノ五六倍ナリ而シテ産出期ハ初産婦大凡ソ二時間經産婦ハ大凡ソ一時間ニシテ後産期ハ大凡ソ三十分ナリトス

三十歲以上ノ初産婦ニ在リテハ分娩大ニ時間ヲ費ス可シ之レ産道ノ延張スルコト少ナク分娩ノ抗抵大ナルニヨル

分娩遲延ノ害

又男兒ト女兒トヲ比較スルニ男兒ハ通例大ニシテ頭蓋ノ固キニヨリ時ヲ費ヤスコト多シ

分娩遲延ノ害

開口期遲延スルモ此期ハ尙ホ分娩ノ準備中ナルガ故ニ敢テ害ナシ然レトモ産出期遲延スルトキハ子宮ノ血行ヲ障害スルガ故ニ小兒ノ死ニ陷ルコト甚ダ多シ若シ又兒頭既ニ小骨盤內ニ下リ而シテ産出期遲延スルトキハ母體ニ於テハ兒頭ノ壓迫ニヨリ産道ノ損傷ヲ生ズルノ害アリ

分娩ノ器械的作用

第五十三章　正規分娩ノ器械的作用

分娩ノ器械的作用トハ胎兒骨盤內ヲ通過シ産出スルノ間ニ現ハスル所ノ種々ナル運動ヲ稱フルモノニシテ其主要ナルモノハ所謂兒頭ノ第一回轉第二回轉第三回轉及ビ肩胛ノ産出方是レナリ今頭蓋位ノ正規分娩ニ就キ之レヲ次ニ說述ス可シ而シテ先ヅ初メニ兒頭ノ骨盤內ニ入ルノ狀ヲ記セント欲ス

兒頭ノ骨盤入口內ニ進入ス

兒頭ノ骨盤入口內ニ進入スルニハ

六種ノ別アリ即チ其後頭

ルニハ

(一)母體ノ左前方ニ向フモノ(二)正左方ニ向フモノ(三)左後方ニ向フモノ(四)右前方ニ向フモノ(五)正右方ニ向フモノ(六)右後方ニ向フモノ是レナリ而シテ兒頭ハ骨盤入口內ニ進入スルノ際ヨリ順次ニ三種ノ回轉ヲ營ムヲ之レヲ第一第二第三回轉トナス

第一回轉

第一回轉 トハ兒頭ノ直徑骨盤ノ橫徑若クハ斜徑ヲ取リ其入口內ニ進入スルノ際ニ營ムモノニシテ子宮ノ收縮力ハ兒ノ軀體ヨリ頭部ニ達シ主トシテ後頭部ヲ壓下スルガ故ニ兒頭ハ少シク回轉シ以テ後頭ハ下リ頤部ハ上リテ益々胸上ニ近ヅキ恰モ屈伏スル狀ヲナス所ノ運動ナリ(或ハ之レヲ兒頭ノ橫軸回轉ト稱ス)此ノ如クニシテ骨盤腔內ニ入レバ第二ノ回轉ヲ生ズ

第二回轉

第二回轉 トハ兒頭左若クハ右ニ向フテ回轉シ後頭ハ前方ニ對シ兒頭ノ直徑線ハ終ニ骨盤出口ノ直徑線ト相一致スルニ至ルノ運動ヲ云フ是レヲ生ズルノ理由ハ骨盤出口ノ徑線ハ其入口ト異ニシテ橫徑狹ク直徑ハ却テ廣ク此直徑ト兒頭ノ直徑ト相適合スルニアラザレバ產出シ難キニ基クモノトス(或ハ此回轉ヲ兒頭ノ鉛直軸回轉ト稱ス)此ノ如クニシテ兒頭骨盤出口ニ至レバ更ニ第三回轉ヲ營ム

第三回轉

第三回轉 トハ兒頭第一回轉ト全ク反對ノ運動ヲ營ミ(同一ノ橫軸ヲ反對ニ回轉ス)頤部胸上ヲ離レ前頸ヲ伸展シ後頭ハ恥骨弓下ニ止マリ前頭ハ骨盤誘導線ノ方向ヲ取リテ產道ノ後壁ヲ下リ大顏門ハ初メニ會陰ヲ出デ次ニ前額顏面ヨリ頤部ニ至ルマテ全ク會陰外ニ產出スルノ作用ヲ云フ

肩胛ノ產出

肩胛ノ產出

兒頭既ニ產出スレバ顏面ハ後方ニ後頭ハ前方ニ向ヒ頸部ハ腟中ニ存シ肩胛ハ骨盤入口內ニ在リ而シテ肩胛ノ橫徑ハ初メニ兒頭ノ取レル骨盤斜徑線ト相交叉セル斜徑線ニ位シ骨盤腔內ニ進ムニ從ヒ前方ノ肩胛ハ右若クハ左ニ(即チ第一頭蓋位ハ右ヨリ左ニ第二頭蓋位ナレハ左ヨリ右ニ)廻旋シ骨盤出口ニ至レバ肩胛ノ橫徑ハ全ク骨盤出口ノ直徑線ニ合シ以テ外陰部外ニ產出ス可シ此ノ如ク肩胛回旋スルニ際シ小兒ノ顏面ハ母體ノ右腿若クハ左腿ニ向

フモノナリ

兒體ノ產出

兒體ノ產出　肩胛全ク脫出スルトキハ自餘ノ體部ハ容易ニ產出スルヲ常トス

次ノ四章ニハ各頭蓋位ニ就キ其器械的作用及ヒ內外檢査ヲ說述ス可シ

第五十四章　第一頭蓋位ノ內外檢査并ニ分娩ノ器械的作用

外檢査

外檢査　ニヨレバ胎兒ノ臀部ハ子宮底ニ位シ頭部ハ恥骨縫際ノ上部ニ存ス背部ハ母體ノ左方ニ向ヒ小體部ハ臀部ニ沿フテ其右方ヲ占ム聽診スルニ臍ノ左下方ニ於テ明カニ心音ヲ聽取ス可シ(第四十六圖及ヒ第五十圖ハ此位置ノ胎兒ヲ示ス參看ス可シ)

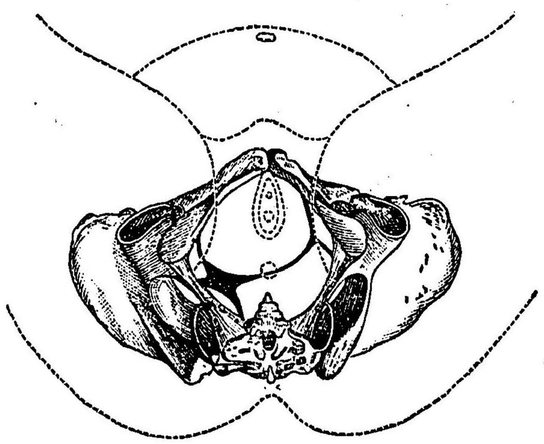
內檢査

內檢査　ヲ施コスニ先進部ハ硬固ニシテ圓球形ヲ呈シ骨縫合顚門ヲ具フ小顚門ハ左前方ニ在リ大顚門ハ右後方ニ位シ矢狀縫合ハ右斜徑線ニ一致ス(時トシテ矢狀縫合橫徑ニ位スルコトアリ)先進部ハ即チ右顱頂骨ナリトス故ニ此位置ニ於テハ小兒ノ後頭ハ左腸恥結節(腸骨ト恥骨ノ

器械的作用

第六十八圖

兒頭ノ矢狀縫合第一斜徑ニ位スルヲ示ス圖



接合部)ニ對シ顏面ハ右薦腸關節ニ向フ

器械的作用　此ノ如クニシテ分娩ヲ始ムルトキハ第一回轉ニヨリテ小顚門部最モ下降シ兒頭ハ骨盤入口內ニ入ル次ニ骨盤內ヲ下ルニ從ヒ第二回轉ヲ營ミ後頭ハ左方ヨリ恥骨縫際ニ向ヒ骨盤下口ニ至レバ矢狀縫合ハ殆ント骨盤直徑線ニ一致シ茲ニ於テ第三回轉ヲ現ハシ後頭ハ恥骨弓下ニ止マリ大顚門ノ右方即チ右顱頂骨

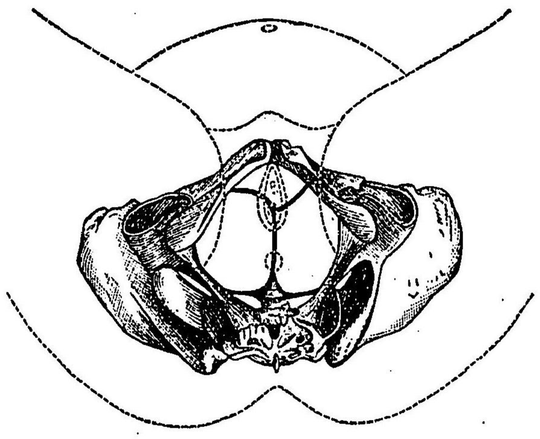
部始メニ露出シ次テ顏面ヨリ全兒頭ハ陰門外ニ產出スルニ至ル——兒頭全ク產出スルノ際ハ其肩胛骨盤入口內ニ在リテ肩胛橫徑ハ骨盤ノ左斜徑線ニ存ス而シテ肩胛部骨盤內ニ下レバ第二回轉ト同樣ノ回轉ヲナシ右方ノ肩胛ハ會陰部ヨリ出ヅ此際小兒ノ顏面ハ母體ノ右腿ニ對ス肩胛產出ノ後兒體ハ容易ニ分娩ヲ終ルモノナリ

產痛

產痛ハ右顱頂骨部ニ現ハル

第六十九圖

兒頭ノ矢狀縫合殆ト骨盤出口ノ直徑ニ一致スルヲ示ス圖



外檢査

內檢査

第五十五章　第二頭蓋位ノ內外檢査幷ニ分娩ノ器械的作用

外檢査

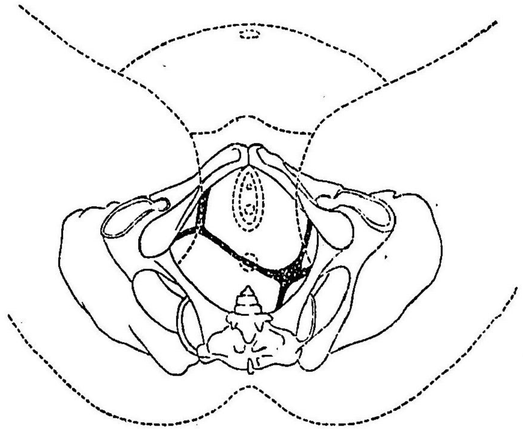
小兒ノ臀部ハ子宮底ニ頭部ハ恥骨縫際上ニ背部ハ右側ニ小體部ハ臀部ノ左側ニ在ルヲ觸知ス心音ハ臍ノ右下方ニ最モ善ク聽取セラル(第五十三圖ハ此位置ノ胎兒ヲ示ス參看ス可シ)

內檢査

小顱門ハ右前方ニ大顱門ハ左後方ニ位シ矢狀縫合ハ左斜徑線ニ一致ス(時トシテ矢狀縫合橫

第七十圖

兒頭ノ矢狀縫合第二斜徑ニ存スルヲ示ス圖



徑ニ位スルコトアリ）先進部ハ左顱頂骨ナリ又小兒ノ後頭ハ右腸恥結節ニ對シ顏面ハ左薦腸關節ニ向フ

器械的作用　此位置ノ器械的作用ハ其理第一頭蓋位ニ於ケルモノト同シク唯左右相反スルノ異アルノミ即チ兒頭ハ第一回轉ニヨリ小顎門部最モ下降シテ骨盤內ニ入リ次ニ骨盤內ヲ通過スルノ際第二回轉ヲ營ミ後頭ハ右方ヨリ恥骨縫際ニ向ヒ骨盤下口ニ至リ矢狀縫合ハ殆ント骨盤直徑線ニ一致シ茲ニ第三回轉ヲ現ハシ後頭ハ恥

第七十一圖

兒頭ノ矢狀縫合殆ト骨盤直徑線ニ一致スルヲ示ス圖

骨弓下ニ止マリ大顎門ノ左方即チ左顱頂骨部始メニ露出シ次テ顏面ヨリ全兒頭ハ陰門外ニ產出スルニ至ル——肩胛ハ兒頭全ク產出スルノ際骨盤入口內ニ在リテ其橫徑骨盤ノ右斜徑線ニ一致スル而シテ骨盤內ヲ下ルノ際左肩ハ母體ノ左方ヨリ恥骨縫際下ニ廻リテ始メニ露出シ右肩ハ次テ會陰部ヨリ出ヅ此際小兒ノ顏面ハ母體ノ左腿ニ向フ

產瘤　ハ左顱頂骨部ニ現ハル

第五十六章　頭蓋位ノ內外檢査幷ニ分娩器械的作用ノ一覽表

前二章ニ記スル所ヲ一括シ記憶ニ便ナラシメンガ爲メ次ノ表ヲ揭出ス可シ

	第一頭蓋位	第二頭蓋位
外	臀部ハ子宮底 頭部ハ恥骨縫際ノ上部	臀部ハ子宮底 頭部ハ恥骨縫際ノ上部

檢査	兒背ハ母體ノ左腹部 小體部ハ臀部ニ沿ヒ子宮底ノ右側 心音ハ臍ノ左下方	兒背ハ母體ノ右腹部 小體部ハ臀部ニ沿ヒ子宮底ノ左側 心音ハ臍ノ右下方
內檢査	先進部ハ固ク圓ク骨縫合顱門アリ 小顱門ハ左前方大顱門ハ右後方 矢狀縫合ハ右斜徑(第一斜徑)ニ一致ス 先進頭部ハ右顱頂骨	先進部ハ固ク圓ク骨縫合顱門アリ 小顱門ハ右前方大顱門ハ左後方 矢狀縫合ハ左斜徑(第二斜徑)ニ一致ス 先進頭部ハ左顱頂骨
器械的作用	小顱門ハ下リ且ツ左前方ヨリ前方ニ廻リ矢狀縫合ハ終ニ骨盤出口ノ直徑線ニ一致シ右顱頂骨部始メニ外陰部ニ出デ遂ニ兒頭全ク產出ス次ニ肩胛ハ左斜經線ニ就キ骨盤內ニ入リ右肩胛恥骨縫際下ニ進ミ左肩胛會陰ヨリ產出ス 兒ノ顏面ハ後ヨリ母體ノ右腿ニ向フ 產瘤ハ右顱頂骨部ニ位ス	小顱門ハ下リ且ツ右前方ヨリ前方ニ廻リ矢狀縫合ハ終ニ骨盤出口ノ直徑線ニ一致シ左顱頂骨部初メニ外陰部ニ出デ遂ニ兒頭全ク產出ス次ニ肩胛ハ右斜徑線ニ就キ骨盤內ニ入リ左肩胛恥骨縫際下ニ進ミ右肩胛會陰ヨリ產出ス 兒ノ顏面ハ後ヨリ母體ノ左腿ニ向フ 產瘤ハ左顱頂骨部ニ位ス

第五十七章　第三及ビ第四頭蓋位

(前顱頂位又ハ前頭位)

此兩位置

此兩位置ハ兒ノ後頭右後方又ハ左後方ニ向ヒ骨盤內ニ進入シ次ニ顏面ハ前方ニ向ヒ後頭ハ會陰部ヨリ產出スルモノニシテ產婆學ニ於テ

ハ異常ニ屬セシム可キモノナリ故ニ第六十八章ニ於テ詳述セリ就テ看ル可シ

第五十八章　分娩時ニ現ハル、母體及ビ兒體ノ變狀

母體ノ體溫ノ昇騰

母體ノ體溫ノ昇騰　分娩ノ際子宮ノ收縮又ハ努責等ノ如キ筋勞働ニヨリ〇、一度乃至〇、三度即チ一分乃至三分ノ體溫上昇ヲ現ハス分娩困難ナルトキハ三十八度以上ノ高キニ至ルコトアリ或ハ產道內ニ腐敗ヲ生スルガ爲メニ四十度以上ノ高熱ヲ發シ危險ヲ致スコトモ亦之レアリ

分娩時胎兒心音ノ變化

分娩時胎兒心音ノ變化　陣痛中胎兒ノ心臟音著シク減少シ陣痛止メハ再ヒ增加ス若シ過劇ノ陣痛甚ダシク長ク持續スルトキハ終ニ心動止ミ胎兒ハ死ニ陷ルコトアリ又產出期中ハ陣痛强キモノナルニヨリ產出期長キトキハ胎兒ハ死ニ陷ルコト多シ

胎水多量ニ流出スルトキ

胎水多量ニ流出スルトキ　子宮收縮シ恰モ陣痛ノ過劇ナルト同シキカ故ニ多量ノ胎水早ク流泄スルトキハ胎兒ノ死スルコトモ亦多シ

兒頭ノ變形

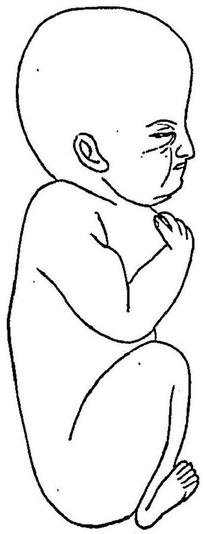
兒頭ノ變形　頭蓋位ヲ取リテ產出セル所ノ小兒ハ其前額項部ニ向ツテ壓平セラレ後頭ハ著シク延張ス可シ而シテ一側ノ顱頂部ニ產瘤ヲ生ズルニヨリ其部高起シ之レヲ後方ヨリ望ムトキハ頭蓋ノ歪斜セルガ如キヲ見ル可シ

第七十二圖

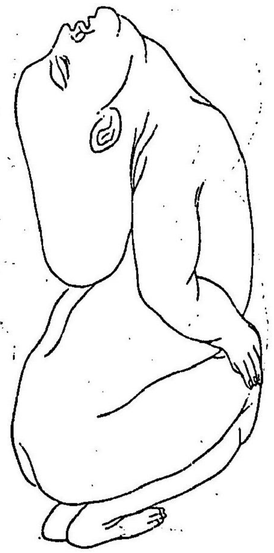
後頭位ヲ以テ產出セル兒頭ノ圖

第七十三圖

前頭位ヲ以テ產出セル兒頭ノ圖

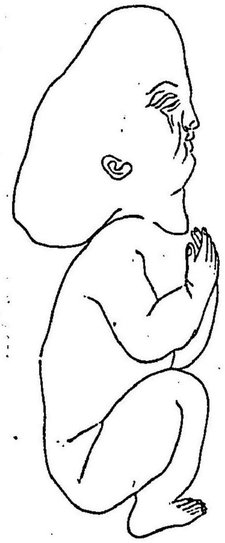


第七十四圖



顏面位ヲ以テ産出セル兒頭ノ圖

第七十五圖



額位ヲ以テ産出セル兒頭ノ圖

——第三第四頭蓋位即チ前頭位ヲ取リ産出セル小兒ノ頭蓋ハ産道ヲ通過スルノ際前額及ビ後頭ヨリ壓平セラルヽガ故ニ全頭蓋ハ頗ル圓形ヲ呈スルモノナリ其他額位ノ小兒ハ頭部殆ソト三角形ヲナシ顏面位ナルトキハ後頭位ニ於ケルガ如ク後頭延長シ且ツ顏面ハ横ニ壓縮セラレ醜形ヲ呈ス

第五十九章　正規分娩處置ノ概要

正規分娩ニ於ケル産婆ノ任務

正規分娩ニ於ケル産婆ノ任務

正規分娩ノ際ニハ産婆ハ自然ノ分娩力ヲ助ケ母體及ビ兒體ニ危險症ヲ發スルヤ否ヤニ注意スルヲ要ス決シテ妄リニ無用ノ手術ヲ施コスガ如キコトアル可ラス若シ異常ヲ發見スルコトアラバ速カニ醫師ノ診察ヲ請フ可シ

正規分娩處置ノ要領

正規分娩處置ノ要領

正規分娩ノ處置ヲ極メテ簡畧ニ說述スレバ先ツ分娩ニ要スル器具即チ　イルリガートル、ガテーテル、温湯、裸襁、臍帶結紮品、其他分娩ニ必要ナル器具ヲ整備シ法ニ從テ産床ヲ作リ開口期ノ終リニ至リ胎胞ノ破裂ニ近クヲ見バ直チニ産床ニ就カシメ既ニ破水セルノ後ハ防腐法ニヨリ更ニ一タビ内診ヲ行ヒ異常ノ有無ヲ檢ス可シ若シ分泌物多量ナル者ニ在リテハ二%石炭酸水ヲ以テ屢腟内ヲ洗滌シ而シテ兒頭腟内ニ下リ甚ダシク會陰ニ抵テヽ之レヲ防護ス可シ又胎兒既ニ娩出セバ口内ノ粘液ヲ去リ呼吸ヲ自由ナラシメ温カナル布片ニ包ミ母體ノ脚間ニ置キ手ヲ母體ノ腹上